

小野市

## 豊 地 城 跡

—道路改良事業((主)神戸加東線)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



平成26(2014)年3月

兵庫県教育委員会

小野市

# 豊 地 城 跡

—道路改良事業((主)神戸加東線)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成26(2014)年3月

兵庫県教育委員会





南から



北から

卷頭写真図版 2 豊地城跡



2・3区（上空から）



2区（北から）



3区（北から）

卷頭写真図版 4 豊地城跡



4区西半（北から）



4区西半（北から）



5区（東から）



東から



上空から



豊地城跡出土木製品

## 例　言

- 1 本書は、小野市中谷町に所在する豊地城跡の発掘調査報告書である。
  - 2 本発掘調査は道路改良事業（主）神戸加東線）に伴うもので、兵庫県北播磨県民局加東土木事務所長の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
  - 3 調査の推移
    - (1) 発掘調査
- 豊地城跡
- 分布調査
- 平成18年3月14日（遺跡調査番号2005259）
- 実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 確認調査
- 平成21年7月27日～平成21年8月1日（遺跡調査番号2009183）
- 実施機関：兵庫県立考古博物館
- 工事請負：株式会社イズイ建設
- 工事立会
- 平成23年3月15日（遺跡調査番号2010299）
- 実施機関：兵庫県立考古博物館
- 本発掘調査
- 平成21年11月9日～22年3月17日（遺跡調査番号2009183）
- 実施機関：兵庫県立考古博物館
- 工事請負：株式会社イズイ建設・株式会社かんこう
- 平成22年12月9日～23年3月25日（遺跡調査番号2010221）
- 実施機関：兵庫県立考古博物館
- 工事請負：株式会社大功組・アジア航測株式会社
- 平成24年3月28日（遺跡調査番号2011396）
- 直接執行
- 平成24年1月30日～24年3月14日（遺跡調査番号2011296）
- 実施機関：兵庫県立考古博物館
- 工事請負：坂本建設株式会社・株式会社アコード
- 岡道跡
- 確認調査
- 平成21年11月25日～平成25年11月26日（遺跡調査番号2009259）
- 実施機関：兵庫県立考古博物館
- 本発掘調査
- 平成22年12月13日～平成23年3月22日（遺跡調査番号2010222）
- 実施機関：兵庫県立考古博物館

(2) 出土品整理作業

平成22年4月1日～平成24年3月31日

実施期間：兵庫県立考古博物館

平成24年4月1日～平成26年3月28日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター

- 4 本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部嘱託職員 杉村 明美の編集協力をえて、職員の山上雅弘が担当した。ただし、第4章・第5節の石器の項については、同職員 久保弘幸が、同第6節については同職員 深江英恵が担当した。
- 5 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 6 写真測量は、以下のとおり作業委託を行い実施した。  
株式会社かんこう・朝日航洋株式会社・株式会社アコード
- 7 遺物写真撮影は、㈱地域文化財研究所・㈱タニグチフォト・株式会社クレアチオに委託して実施した。
- 8 調査成果の測量には、2級基準点S2 №31・同32及びこれを既地点として新設した3級基準点を使用した。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に属する。なお、本書に用いた方位は座標北を示し、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 9 第1章第3節の第5・6図は国土地理院作成のものを使用した。
- 10 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、関係各機関をはじめ、以下の方々から御協力や御教示をいただいた。御芳名を記して深謝の意を表する。  
松井秀喜（中谷町自治会長）・栗山秀則・井上茂喜・山本健次・横山克己・宮田逸民・依藤保・畠和良・北垣聰一郎（石川県金沢城調査研究所長）・西田猛（小野市教育委員会）・森岡秀人（芦屋市教育委員会）・畠康明（大阪市立大学）

以上敬称略・順不同・括弧内は当時の所属

## 凡 例

- 1 遺物には通し番号は付けていない。ただし瓦・木製品・石製品及び金属・骨製品には、その頭にそれぞれT、W、S、M、Bをつけて、土器と区別している。
- 2 土器の実測図は、種別ごとに以下のように断面の表現を区別している。  
土師器・瓦・弥生土器：白抜き／須恵器・陶器：黒塗り／磁器：濃い網掛け／瓦質土器：薄い網掛け
- 3 漆碗の器面に塗られた漆の色、施紋に使われた漆の色の表記については、以下のように区別した。  
黒漆塗り：濃い網掛け／朱漆塗り：薄い網掛け／朱漆施紋：薄い網掛け
- 4 道構の名称は、地区ごとに通し番号を付し、その頭に道構の種類を表記した。ただし、掘立柱建物・井戸については、別に通し番号をついた。
- 5 土層等の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著「新版 標準土色帖」1992年版を使用した。

## 本文目次

### 第1章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境.....	1
第2節 歴史的環境.....	1
第3節 豊地城跡の変遷.....	4

### 第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯.....	9
第2節 既往の調査.....	10
第3節 発掘調査の体制.....	11
第4節 整理作業.....	12

### 第3章 豊地城跡の調査成果

第1節 調査の概要.....	13
第2節 遺構の成果.....	13

### 第4章 豊地城跡の出土遺物

第1節 概要.....	27
第2節 土器類・陶磁器.....	27
第3節 瓦類.....	35
第4節 金属製品.....	38
第5節 石製品.....	38
第6節 木製品.....	40

### 第5章 岡遺跡の調査成果

第1節 概要.....	43
第2節 調査の成果.....	43
第3節 まとめ.....	44

### 第6章 分析.....

### 第7章 まとめ.....

## 卷頭図版目次

卷頭写真図版1 遺跡遠景	卷頭写真図版4 豊地城跡
卷頭写真図版2 豊地城跡2・3区（上空から）	卷頭写真図版5 同遺跡
卷頭写真図版3 豊地城跡	卷頭写真図版6 豊地城跡出土木製品

## 挿図目次

第1図 豊地城跡の位置	第19図 牛墓（南西から）……………	7	
第2図 遺跡の位置（1／35,000）……………	3	第20図 池田石石切場（北から）……………	7
第3図 屋口城跡（南上空から）……………	3	第21図 堀田神社本殿に使われた池田石 （北から）……………	7
第4図 小沢城跡（西上空から）……………	3	第22図 八幡神社（南東から）……………	8
第5図 1964年航空写真……………	4	第23図 現在のみやま保育園（南から）……………	8
第6図 1973年航空写真……………	4	第24図 東扇の現状（北から）……………	8
第7図 調査区全体図……………	5	第25図 八幡神社の社叢（東から）……………	8
第8図 みやま保育園地鎮祭（北東から）……	6	第26図 豊地の辻堂（西から）……………	8
第9図 みやま保育園地鎮祭（南から）……	6	第27図 中谷町のとんび（北西から）……………	8
第10図 土壘旧状（東から）……………	6	第28図 厄神祭で脹わう八幡神社（南東から）	8
第11図 土壘近景（東から）……………	6	第29図 厄神祭の子供相撲（南から）……………	8
第12図 堀と土壘（西から）……………	6	第30図 豊地城跡地区割図……………	14
第13図 造成が完了した直後の景観（西から）	6	第31図 土師器皿法量表……………	29
第14図 調査前の状況（西から）……………	7	第32図 出土瓦型式分類……………	36
第15図 土壘現況（北から）……………	7	第33図 豊地城跡出土石器……………	39
第16図 観音堂遠景（東北から）……………	7	第34図 朱印の蛍光X線分析結果……………	46
第17図 観音堂（東から）……………	7	第35図 豊地城跡概念図……………	49
第18図 観音堂の堀跡（東から）……………	7		

## 表目次

表1 遺物観察表1……………	52	表7 遺物観察表7……………	58
表2 遺物観察表2……………	53	表8 遺物観察表8……………	59
表3 遺物観察表3……………	54	表9 遺物観察表9……………	60
表4 遺物観察表4……………	55	表10 遺物観察表10……………	61
表5 遺物観察表5……………	56	表11 遺物観察表11……………	62
表6 遺物観察表6……………	57		

## 図版目次

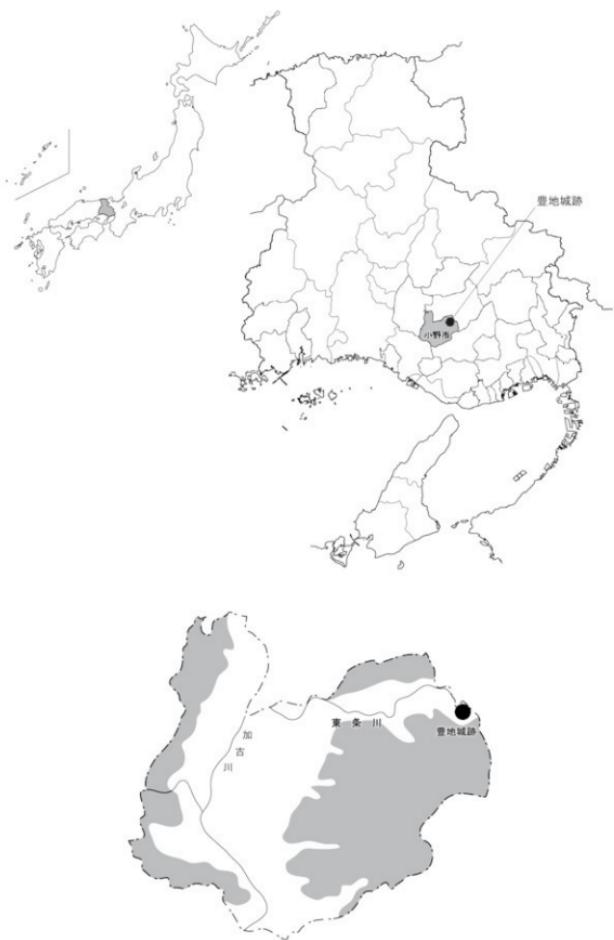
- |                      |                       |
|----------------------|-----------------------|
| 図版 1 豊地城跡・岡遺跡 調査区全体図 | 図版34 豊地城跡2区 出土遺物（3）   |
| 図版 2 豊地城跡1区 全体図      | 図版35 豊地城跡2区 出土遺物（4）   |
| 図版 3 豊地城跡1区 道構平・断面図  | 図版36 豊地城跡2区 出土遺物（5）   |
| 図版 4 豊地城跡2区 全体図      | 図版37 豊地城跡2区 出土遺物（6）   |
| 図版 5 豊地城跡2区 西半道構配置図  | 図版38 豊地城跡1・2区 出土遺物    |
| 図版 6 豊地城跡2区 道構平・断面図  | 図版39 豊地城跡3区 出土遺物（1）   |
| 図版 7 豊地城跡2区 道構平・断面図  | 図版40 豊地城跡3区 出土遺物（2）   |
| 図版 8 豊地城跡2区 道構平・断面図  | 図版41 豊地城跡3区 出土遺物（3）   |
| 図版 9 豊地城跡2区 東道構配置図   | 図版42 豊地城跡3区 出土遺物（4）   |
| 図版10 豊地城跡2区 道構平・断面図  | 図版43 豊地城跡3区 出土遺物（5）   |
| 図版11 豊地城跡2区 道構平・断面図  | 図版44 豊地城跡3区 出土遺物（6）   |
| 図版12 豊地城跡2区 道構平・断面図  | 図版45 豊地城跡4・1区 出土遺物（1） |
| 図版13 豊地城跡3区 全体図      | 図版46 豊地城跡4・1区 出土遺物（2） |
| 図版14 豊地城跡3区 道構平・断面図  | 図版47 豊地城跡4・2区 出土遺物    |
| 図版15 豊地城跡3区 道構平・断面図  | 図版48 豊地城跡4・6区 出土遺物    |
| 図版16 豊地城跡3区 道構平・断面図  | 図版49 豊地城跡5区 出土遺物      |
| 図版17 豊地城跡3区 道構平・断面図  | 図版50 岡遺跡1・2区 出土遺物     |
| 図版18 豊地城跡3区 道構平・断面図  | 図版51 豊地城跡2区 出土瓦（1）    |
| 図版19 豊地城跡4区 全体図      | 図版52 豊地城跡2区 出土瓦（2）    |
| 図版20 豊地城跡拡張区 道構平・断面図 | 図版53 豊地城跡2区 出土瓦（3）    |
| 図版21 豊地城跡4区 道構平・断面図  | 図版54 豊地城跡2区 出土瓦（4）    |
| 図版22 豊地城跡4区 道構平・断面図  | 図版55 豊地城跡2区 出土瓦（5）    |
| 図版23 豊地城跡5区 全体図      | 図版56 豊地城跡2区 出土瓦（6）    |
| 図版24 豊地城跡5区 道構平・断面図  | 図版57 豊地城跡2区 出土瓦（7）    |
| 図版25 豊地城跡6区 全体図      | 図版58 豊地城跡2区 出土瓦（8）    |
| 図版26 豊地城跡6区 道構平・断面図  | 図版59 豊地城跡2区 出土瓦（9）    |
| 図版27 豊地城跡6区 道構平・断面図  | 図版60 豊地城跡2区 出土瓦（10）   |
| 図版28 岡遺跡1区 全体図       | 図版61 豊地城跡2区 出土瓦（11）   |
| 図版29 岡遺跡1区 道構平・断面図   | 図版62 豊地城跡2区 出土瓦（12）   |
| 図版30 岡遺跡2区 全体図       | 図版63 豊地城跡2区 出土瓦（13）   |
| 図版31 岡遺跡2区 道構平・断面図   | 図版64 豊地城跡2区 出土瓦（14）   |
| 図版32 豊地城跡2区 出土遺物（1）  | 図版65 豊地城跡3区 出土瓦（1）    |
| 図版33 豊地城跡2区 出土遺物（2）  | 図版66 豊地城跡3区 出土瓦（2）    |

図版67 豊地城跡3区 出土瓦（3）	図版79 豊地城跡 出土木製品（1）
図版68 豊地城跡3区 出土瓦（4）	図版80 豊地城跡 出土木製品（2）
図版69 豊地城跡3区 出土瓦（5）	図版81 豊地城跡 出土木製品（3）
図版70 豊地城跡3区 出土瓦（6）	図版82 豊地城跡 出土木製品（4）
図版71 豊地城跡3区 出土瓦（7）	図版83 豊地城跡 出土木製品（5）
図版72 豊地城跡3区 出土瓦（8）	図版84 豊地城跡 出土木製品（6）
図版73 豊地城跡4・1区 出土瓦	図版85 豊地城跡 出土木製品（7）
図版74 豊地城跡4・5区 出土瓦	図版86 豊地城跡 出土木製品（8）
図版75 豊地城跡 出土金属製品	図版87 豊地城跡 出土木製品（9）
図版76 豊地城跡 出土石製品（1）	図版88 豊地城跡 出土木製品（10）
図版77 豊地城跡 出土石製品（2）	図版89 豊地城跡 出土木製品（11）
図版78 豊地城跡 出土石製品（3）	図版90 豊地城跡 出土木製品（12）

## 写真図版目次

写真図版1 遺跡遠景	写真図版21 豊地城跡2区
写真図版2 遺跡遠景	写真図版22 豊地城跡3区
写真図版3 調査前の豊地城跡	写真図版23 豊地城跡3区
写真図版4 豊地城跡1区	写真図版24 豊地城跡3区
写真図版5 豊地城跡1区	写真図版25 豊地城跡3区
写真図版6 豊地城跡1区	写真図版26 豊地城跡3区
写真図版7 豊地城跡2区	写真図版27 豊地城跡3区
写真図版8 豊地城跡2区	写真図版28 豊地城跡3区
写真図版9 豊地城跡2区	写真図版29 豊地城跡3区
写真図版10 豊地城跡2区	写真図版30 豊地城跡4・1区
写真図版11 豊地城跡2区	写真図版31 豊地城跡4・1区
写真図版12 豊地城跡2区	写真図版32 豊地城跡4・1区・抵抗区
写真図版13 豊地城跡2区	写真図版33 豊地城跡4・2区
写真図版14 豊地城跡2区	写真図版34 豊地城跡4区
写真図版15 豊地城跡2区	写真図版35 豊地城跡5区
写真図版16 豊地城跡2区	写真図版36 豊地城跡5区
写真図版17 豊地城跡2区	写真図版37 豊地城跡5区
写真図版18 豊地城跡2区	写真図版38 豊地城跡6区
写真図版19 豊地城跡2区	写真図版39 豊地城跡6区
写真図版20 豊地城跡2区	写真図版40 豊地城跡6区

写真図版41 豊地城跡 6 区	写真図版67 豊地城跡出土瓦 (2)
写真図版42 同遺跡 1 区	写真図版68 豊地城跡出土瓦 (3)
写真図版43 同遺跡 2 区	写真図版69 豊地城跡出土瓦 (4)
写真図版44 同遺跡 2 区	写真図版70 豊地城跡出土瓦 (5)
写真図版45 豊地城跡出土土器 (1)	写真図版71 豊地城跡出土瓦 (6)
写真図版46 豊地城跡出土土器 (2)	写真図版72 豊地城跡出土瓦 (7)
写真図版47 豊地城跡出土土器 (3)	写真図版73 豊地城跡出土瓦 (8)
写真図版48 豊地城跡出土土器 (4)	写真図版74 豊地城跡出土瓦 (9)
写真図版49 豊地城跡出土土器 (5)	写真図版75 豊地城跡・同遺跡出土 土製品・金属製品・石器
写真図版50 豊地城跡出土土器 (6)	写真図版76 豊地城跡出土石製品 (1)
写真図版51 豊地城跡出土土器 (7)	写真図版77 豊地城跡出土石製品 (2)
写真図版52 豊地城跡出土土器 (8)	写真図版78 豊地城跡出土石製品 (3)
写真図版53 豊地城跡出土土器 (9)	写真図版79 豊地城跡出土木製品 (1)
写真図版54 豊地城跡出土土器 (10)	写真図版80 豊地城跡出土木製品 (2)
写真図版55 豊地城跡出土土器 (11)	写真図版81 豊地城跡出土木製品 (3)
写真図版56 豊地城跡出土土器 (12)	写真図版82 豊地城跡出土木製品 (4)
写真図版57 豊地城跡出土土器 (13)	写真図版83 豊地城跡出土木製品 (5)
写真図版58 豊地城跡出土土器 (14)	写真図版84 豊地城跡出土木製品 (6)
写真図版59 豊地城跡出土土器 (15)	写真図版85 豊地城跡出土木製品 (7)
写真図版60 豊地城跡出土土器 (16)	写真図版86 豊地城跡出土木製品 (8)
写真図版61 豊地城跡出土土器 (17)	写真図版87 豊地城跡出土木製品 (9)
写真図版62 豊地城跡出土土器 (18)	写真図版88 豊地城跡出土木製品 (10)
写真図版63 豊地城跡出土土器 (19)	写真図版89 豊地城跡出土木製品 (11)
写真図版64 豊地城跡出土土器 (20)	写真図版90 豊地城跡出土木製品 (12)
写真図版65 豊地城跡出土土器 (21)	
写真図版66 豊地城跡出土瓦 (1)	



第1図 豊地城跡の位置

# 第1章 地理的環境・歴史的環境

## 第1節 地理的環境

豊地城跡は兵庫県小野市中谷町に所在する。旧地名では播磨国加東郡にある。小野市は播磨の内陸部に位置し、市域の中央を加古川が流れ城跡はこの支流である東条川南岸の段丘上に位置する。同川は城跡周辺で大きく南北に蛇行し、城跡が立地する川岸は岩盤が露頭した7~8m前後の崖地形となる。東条川南岸の川岸段丘の背後には草加野台地と呼ばれる標高140~150mの丘陵が連なる。城跡はこの丘陵の北麓に位置する標高70m前後の平地である。城跡の東西方向は間折谷が形成され東側に大畠川、西側には中谷川があって、城跡の東西を画する役割を果たしている。

東条川が流れるこの谷は西側で加古川に合流し、東側の源流方向では三田市の大川瀬、さらに蘿井市今田町に至る。今田町は農業地で有名な丹波焼の生産地であり、同時に丹波焼の加古川を通じた舟運の通路でもある。さらにこの通路は丹波と播磨をつなぐ街道として、北の三草・社を通る街道に次いで重要なと考えられる。また、城跡から東の大畠川をさかのぼり、三木の桃坂を通じて抜ける街道も重視される。このように豊地城跡周辺は丹波および摂津と播磨をつなぐ要衝にあったことが推測される。

## 第2節 歴史的環境

### 1. 東条谷の中世城館

豊地城跡の所在する東条谷には支城とされる屋口城・小田城・小沢城が周辺に所在する。さらに、東条谷の東側には天神山城・念仏城などがある。また、平地居館では河合城や小堀城、堀井城が東条川と加古川の合流点に近い場所に立地し、特に河合城跡は赤松氏と関係が深いといわれる。

小田城（小野市船木町ほか）は平成4年（1992）に発掘調査がおこなわれ主郭の半分が調査された。この城は東条川に張り出した丘陵上に土塁構造の主郭が配され、この郭の西側虎口から城道が構築される。さらに、主郭虎口や城道には櫓台が設けられ、横矢構造を持つ。城道は東条川に向かって下り、石段や築地に部分的に石垣を築く。一方、主郭南背後の堀切に面して石垣を持つ櫓台が構築され、堀切にはクランクを持つ。このような構造や土師器壙などに戰国時代末期のものが含まれ、天正年間のものであることを示唆する。3城の中では小田城がもっとも発達した構造を有し、織豊系城郭の影響を受けた可能性が高い。

屋口城（小野市中谷町字西山）は豊地城跡の南西に接する山城である。豊地城とは敵対関係にあつたともいわれるが、江戸時代の豊地村と屋口村との関係が暗に反映した伝承と考えられる。位置や構造から見ると豊地城直近の詰城として機能したものと思われる。山頂の主郭は30m四方の規模で、求心性を持つ。横幅と帯曲輪により城郭ラインを確定し、虎口に横矢が設定され、城道と曲輪の機能分化が進んだ構造である（多田暢久2005）が、織豊系城郭の様相は認められない。

小沢城（加東市東条町小沢）は豊地城の北東、東条川の対岸にある山城である。依藤氏の初期の城とされ、城内に「依藤城跡」の碑が建つが、実際は豊地城の支城の1つであったと考えられる。尾根筋上の主郭と西側の2曲輪を中心とする構造で、山頂の主郭には部分的に土塁が見られ、虎口の可能性を持つ遺構であることから、やや発達した構造であるが織豊系城郭の影響はない。

## 2. 城跡の歴史

豊地城跡は東条条（東条町）と下東条を占めた中世の吉田新庄に所在し、依藤氏の本城とされるが、同氏は15世紀後半ごろにこの地を拠点としたといわれている。周辺には屋口城・念仏城・小田城などの支城が配置され、豊地城を中心とした地域支配をおこなった。

豊地城の初見は南北朝期に金谷經氏が据った「東条」が豊地城であるといわれ、建武3年（1336）北朝方が南朝方の東条城を焼き払っている（同年九月八日「岸田隆寛軍忠状中」辻文書）。ただし、今回の調査でも南北朝期の成果がないので、この東条城と豊地城が同じ城かどうかについては明確な根拠はない。

嘉吉の乱後、東播磨三郡は室町幕府料所となって赤松満政が代官となるが、嘉吉四年（1444）には東播磨三郡は山名氏の支配下となる。その後、依藤氏は文明年間（1469～1487）頃に赤松家再興による功績により、東条谷に入り（文明九年正月二三日「依藤則忠判物」清水寺文書）、赤松氏の重臣として東播磨に勢力をもつ。文明15年（1483）の真弓峠の合戦に間に連して、文明16年（1484）浦上貢宗は東条城に重臣を招集し、赤松政則（真弓峠の敗戦の責任）を追放しているが、この時、依藤弥三郎も連署に名を連ねている。（2月5日「赤松家老臣連署書状案」鷹川家文書）。いったん摶津に逃れた依藤氏は翌17年3月13日に城を奪還した（年次3月27日「依藤弥三郎状案」栗山文書）。

明応5年（1469）10月には三条実隆の家司中沢重種が「播州依藤館」に下向するが（『実隆公記』同月四日条）これが豊地城といわれている。

享禄3年（1530）5月、別所村治は柳本賢治の援助を受け依藤城を攻撃するが、依藤氏は浦上氏の救援を受け6月29日、中村助三郎に柳本賢治を暗殺させた（同年7月20日「細川高国感状」中村文書など）。

しかし、翌4年に浦上村宗が敗死すると依藤氏は別所氏に圧迫されることとなり、永禄2年（1559）には没落したといわれている（同年10月21日「清水寺衆徒誓状案」清水寺文書）。

豊地城には別所重棟が入り同城を北播磨侵攻の拠点とした。その後、天正年間に重棟は織田方として活動したが、天正6年（1578）に始まる三木合戦後も織田方に残り、播磨計略に活躍している。天正6年4月1日に重棟は阿閉城（播磨町）で毛利方・雜賀衆を撃退するが、この時、重棟は阿閉城の城主であった。その後も野口城（加古川市）・高砂城（高砂氏）などの城攻めに加わり、同8年1月に合戦の終結にあたって、浅野長政と共に三木方との交渉にあたっている（清水寺文書・訣文書）。

三木城落城後、秀吉は同年6月に播磨に城郭破却令を出すが、これに東条之城・阿閉之城が含まれていたことから（年次4月26日「羽柴秀吉播磨國中城割り覚」一柳文書）、破却令に一時、重棟は抵抗したようである。ただし、この破却令は豊地城のほか、置塙城など秀吉方の城も対象としており、単なる廢城を目的としたものではなく秀吉政権の播磨領国支配の一貫としておこなわれたことが、近年の研究で明らかにされている（小林基伸2010・多田暢久2009）。

その後、天正13年に別所重棟は但馬八木城城主（兵庫県養父市）となり豊臣大名として生き残るが、播磨からは去ってしまう。江戸時代には栗山氏が帰農して庄屋を務めた。栗山氏は依藤氏時代からの重臣であるが、別所氏時代にも生き残ったようで、江戸時代の豊地村に於て重要な役割を果たした。

### 引用文献

兵庫県教育委員会編1982「豊地城跡調査」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和55年度』

兵庫県教育委員会編1984「豊地城跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和66年度』

兵庫県教育委員会1982「兵庫県の中世城館・莊園道跡」

西田一猛1986「依藤氏居館跡 豊地城」『兵庫県の歴史22』

宮田亮氏1996「小野市史 別名文化財編」小野市

多田暢久2005「播磨・屋口城跡の構築について」『城館史科学』第3号 城館史科学会



第2図 遺跡の位置 (1/35,000)

- |               |               |               |
|---------------|---------------|---------------|
| 1. 豊地城跡       | 2. 屋口城跡       | 3. 買野廢寺跡      |
| 4. 買野経塚       | 5. 中谷古墳       | 6. 池田古墳群      |
| 7. 別所池古墳群     | 8. 桑大夫塗推定地    | 9. 船木美台谷古墳    |
| 10. 船木女谷古墳    | 11. 船木南山古墳    | 12. 船木東光寺道跡   |
| 13. 船木高町遺跡    | 14. 船木遺跡      | 15. 小田城跡      |
| 16. 船木東遺跡     | 17. 船木古墳群     | 18. 妙見塚古墳     |
| 19. 小田古墳群     | 20. 小沢城跡      | 21. 小沢城関連遺跡   |
| 22. 厚利・八田遺跡   | 23. 厚利・横山古墳   | 24. 大畑・片木道跡   |
| 25. 大畑・土井ノ内遺跡 | 26. 東垂水・堀下ヶ遺跡 | 27. 東垂水・東大部遺跡 |
| 28. 小沢古墳群     | 29. 吉井古墳群     | 30. 小沢古墳      |
| 31. 吉井・松木遺跡   | 32. 新定・平井遺跡   | 33. 新定・大平井古墳群 |
| 34. 安国寺関連跡    | 35. 新定・上垣内遺跡  | 36. 新定・内領道跡   |



第3図 屋口城跡 (南上空から)



第4図 小沢城跡 (西上空から)

## 第3節 豊地城跡の変遷

### 1. 城跡の字名・通称地名

城跡周辺の字は「城の土井」と呼ばれる平坦面全体に広がる。この「城の土井」の西北隅にかつて存在した土壇を「城畠」と呼んだが、地元の伝承ではここが城跡であると云われてきた。この西側には牛墓と呼ばれる墓地がある。一方、土星が残る北側は庄屋屋敷であったといわれるが、この場所を通称「古屋敷」と呼ぶ。さらに、後述の通り八幡神社周辺にも城郭遺構が存在したが、地元では単にこの場所を「山」と呼び、城跡の伝承は残っていない。豊地村続図では載地や神社境内地として記載される。このほか、豊地村と屋口村の境に「パパ」、城跡の南西、中谷川の西岸には「城下」などの字が残される。

### 2. 豊地城跡の旧状（第8～13図参照）

昭和56年度（1981）におこなわれた園場整備事業によって豊地城跡の遺構は残されたものの、園場の形状は改変された。ここでは先ず、園場整備以前の豊地城跡の景観について航空写真および、みやま保育園に残されたアルバム写真資料により判明することを紹介しておきたい。なお、第8～13図はこれまで紹介されていない新出のものである。

第5・6図は園場整備前の航空写真である。どちらもみやま保育園建築前のものであるが、東側に堀状地形と土塁が判読できる。この土塁は第8図でさらに詳細が判明する。第8・9図はみやま保育園建設に伴う地鎮祭の際のものであるが、このときに第5・6図に写っていた樹木はすでに伐採され、一部で造成が始まっている。つまり、この前後の写真は土塁が景観として残される最後の姿である。第11図はみやま保育園南側の堀の景観で、手前まで碎石が敷かれ造成が始まっている。第12図は地鎮祭の後、造成が実施された後の状況である。すでに土塁は失われ更地になっている。この後、みやま保育園に残された写真アルバムには保育園建設の状況が写されていたが、土塁の細部や周辺の状況を知ることができる写真是見出しができなかった。

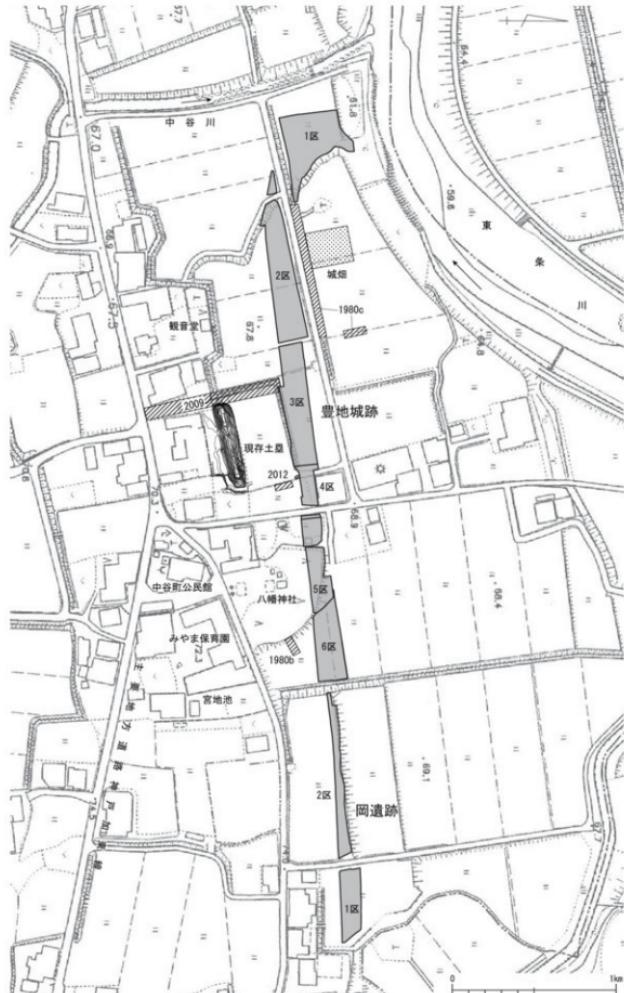
一方、小野市教委蔵の画像資料では、城畠とよばれる地形を南東から撮影した画像がある。城畠は地元で城跡と伝承される場所である。左手には牛墓と呼ばれる墓地も写っているが、牛墓は現在の状況とあまり変化がない。一方、この城畠は第5・6図の航空写真でも明瞭に確認することができる。水田地形の一角を占める形で残されるが、城郭遺構として評価できる景観ではない。このため、土壇状地形は旧状を改変もしくは人為的に造成されたものと考えた方がよさそうである。しかし、小野市教委1980年度c調査では南側に堀が検出され、堀内部から戦国時代の瓦が出土するなど城郭に関連する遺構の検出が



第5図 1964年航空写真



第6図 1973年航空写真



第7図 調査区全体図

顕著である。城塁の状況そのものはやや疑問が残るが、この場所に豊地城跡の遺構が存在したことは明らかである。以上、立在する形ではあるが、これらの画像から庄屋屋敷や西側の城塁、そして東側の八幡神社境内およびみやま保育園周辺などの東西500mほどの範囲に城跡の痕跡が残され、広い範囲に城域が及ぶことが推測できるのである。

### 3. 現在の豊地城跡（第14～29図参照）

現在、城跡の遺構が残るのは現存土壘（第15図）とこれを巡る堀跡（東・南辺）、観音堂南側の土壘、堀の痕跡などに限られる。現存土壘は残存部の長さ52m、高さ3.8m、基底部幅11mの規模を誇り、県下でも有数の規模をもつ。また、現存土壘の西側に建つ観音堂周辺（第16・17図）も土壘の名残とされ、現在でも壇状の地形となる。これに並行して南側には水田が壠状地形（第18図）となって残される。

次に、現在の豊地城跡の姿を写真で紹介しておきたい。第15図は豊地城跡で最も知られている現存土壘である。この土壘は現在居館の南辺のみが残されるが、昭和10年代頃までは東辺にも巡っていたことが地元の方の記憶に残されている。中谷町豊地にはかつて瓦生産がおこなわれていたが、この瓦生産のための粘土採掘が周辺でおこなわれたようで、東辺土壘はこの粘土採掘によって消滅したといわれている。

第14図は調査前の豊地城跡中心部で、西から望んだ姿である。第15図は土壘を北から望んだ景観で、手前は調査前の3区東側付近の景観である。第16・17図は観音堂を東から望んだ姿である。左手には現



第8図 みやま保育園地鎮祭（北東から）



第9図 みやま保育園地鎮祭（南から）



第10図 土壘旧状（東から）



第11図 土壘近景（東から）



第12図 堀と土壘（西から）



第13図 造成が完了した直後の景観（西から）

存土塁が残されており、観音堂はこの土塁から続く土塁敷地上に建てられたとされている。なお、この観音堂では17日ごとに栗山氏を追善して講がおこなわれている。第17図が観音堂近景であるが左手の標柱には東条城の説明がある。南北朝期に金谷経氏が依ったとされるもので、これは東条の城をこの豊地城跡に比定したことである。第18図は観音堂脇の堀である。水田が落ち込む景觀が残される。この場所で土塁・堀が存在した可能性があり、豊地城跡の郭の南限を限っていたと思われる。

第19図は牛墓と呼ばれる墓地の景觀である。この墓地は豊地城跡の西端に位置し、基礎は岩盤であるため削り残された余剰地であったと思われる。ただし、段丘地形の西岸近くに残される地形であるた



第14図 調査前の状況（西から）



第15図 土塁現況（北から）



第16図 観音堂遠景（東北から）



第17図 観音堂（東から）



第18図 観音堂の堀跡（東から）



第19図 牛墓（南西から）



第20図 池田石切場（北から）



第21図 堀田神社本殿に使われた池田石（北から）

め、かつての土塁の痕跡であった可能性も残される。

第22図は八幡神社の本殿で、現在は建て替えがおこなわれた。第23図は前述のみやま保育園である。左手に八幡神社が写るが、保育園側の地形が高くなる。第24図はみやま保育園東側の外堀である。第25図は八幡神社境内の社叢を東側から見たものである。第26図は豊地集落の辻堂である。背後がみやま保育園に隣接する公民館で、辻堂よりも地形が1mほど高くなる。第27図は中谷町のどんど祭り、第28・29図は厄神祭で賑わう姿である。第28図が餅つき行事、第29図が子供相撲の様子で、いずれも1月中旬の行事である。



第22図 八幡神社（南東から）



第23図 現在のみやま保育園（南から）



第24図 東堀の現状（北から）



第25図 八幡神社の社叢（東から）



第26図 豊地の辻堂（西から）



第27図 中谷町のどんど（北西から）



第28図 厄神祭で賑わう八幡神社（南東から）



第29図 厄神祭の子供相撲（南から）

## 第2章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

#### 1. 調査の経緯

東条川下流部の小野市・加東市の市境を通る県道小野藍本線および県道神戸加東線については地元住民の生活に直結する道路であり、神戸への通過に至便な経路であったが、狹小な道路幅にもかかわらず地域内を通過する多くの車両によって、交通に支障をきたすなど様々な問題が生じていた。そのため改良要望が地元より兵庫県北播磨県民局加東土木事務所（現社土木事務所）に提出されていた。

これを受けて、同土木事務所において道路改良のための計画案を立案することとなったが、新たな取り組みである「みんなの道路づくり事業」として地元で委員を選出し、委員会を組織して路線決定をおこなう手法がとられ、計画案に地元の要望を反映するものとなった。

この結果、平成14～17年にかけて策定された県道小野藍本線については東条川沿いに法線が伸び、これに交差する県道加東神戸線では小野市中谷町付近で路線を新たに設定することとなった。しかし後者では当該計画法線は周囲の遺跡「豊地城跡」の主要部を東西方向に壊断する形で計画となっていたため、同土木事務所と兵庫県立考古博物館（平成19年10月）の間で計画の変更について協議がおこなわれた。

協議では路線変更および工法変更が協議されたが、要望地区である池田町・中谷町が利用できない法線計画では生活道路としての役割を失うこととなり、工法変更是費用の問題が生じるなどの点から、現行計画での事業実施の選択以外には困難との結論に達した。この結果、当該開発地については記録保存をすることが決定された。同時に小野市教育委員会においても、「遺跡の重要性を鑑みても、住民生活の公共性に関わることから見てやむをえざる判断」として、記録保存処置について同意を得た。

#### 2. 豊地城跡の調査

本発掘調査は6地区に渡って実施されることとなったが、開始時期や調査量などの問題から第1次調査（平成21年度）では1～3区、第2次調査（平成22年度）では4・6区を実施した。5区については八幡神社保安林の解除指定の問題から平成23年度に第3次調査として実施することになった。

岡遺跡については平成21年度に確認調査を実施し、埋蔵文化財が存在することが確認されたため、平成22年度豊地城跡第2次調査と同時に本発掘調査を実施した。

このほか、第1次発掘調査時に1区の北側、東条川の川岸で池田石採石場跡の範囲を確認する目的で県道小野藍本線の計画地において確認調査を実施した。

第2次調査に際しては4～1区南側、塙1東辺の南側について、調査開始時期の問題から当初の調査範囲に含まれない部分について拡張区として調査をおこなった。

このほか、第3次調査の終了後には4～1・2区間に通る農道について水路の改正好工事に伴う立会調査を実施した。

#### 3. 岡遺跡の調査

道路改良事業（主）神戸加東線）に伴い、平成21年度から「豊地城跡」の発掘調査を実施している。

豊地城跡の東に位置する「岡道跡」は平成21年度の確認調査（遺跡調査番号2009259）により中世の遺跡の存在が認められたため、兵庫県北播磨県民局長からの依頼に基づき、平成22年度に本発掘調査を実施した。

## 第2節 既往の調査

### 1. 小野市教委1980年度a・b・c調査

a 調査は昭和55年度に小野市教育委員会が実施した圃場整備事業に伴う調査である。調査は甚太夫窪跡・小田城跡と共に3遺跡の確認調査が実施された。豊地城跡ではトレンチおよび坪を20ヶ所設定して字城ノ土井と呼ばれる城域全体の様相を確認した。b 調査は同年度に同事業の水路工事部分の事前におこなった追加調査で、3ヶ所の坪掘りが実施された。c 調査は水路工事施工時の立会調査である。

a 調査の結果、①城烟周辺では城烟が後世の盛土であることが判明した。②西側の段丘縁部に幅6mの土壠痕跡が確認された。③現在土壠の内側には栗石大の石積みがあり壇には雨落ち溝が検出された。溝幅は50cm前後で備前焼壺・擂鉢などが出土地した。このトレンチ北側（古屋敷内部）からは石組状造構が検出されている。このほか屋敷内部ではピットが検出されている。

一方、八幡神社周辺では境内の東側縁部の隆起状地形が土壠の痕跡とされているが、その山裾部に設定したトレンチ（16トレンチ）で幅4mの堀が検出されている。これは5・6区境に検出されたSD1に統くもので北側では削平が著しいが近世の用水路と考えられる。

これらの成果から広範囲にわたって良好に豊地城跡の造構が残されていることが確認された。この結果を受けて小野市教育委員会では当該事業者と協議の上、豊地城跡の範囲について保存措置を講じた。

ただし、この時検出された柱穴（ピット）の大半は出土遺物に13～14世紀前後のものが混じる点からすると中世前半頭のものと推測される。この点において中世集落の広がりが広範なもので城跡の範囲全域を覆うことが予測される。c 調査は調査終了後、水路工の立会時に現農道と平行に走る堀2本が検出された。堀の側壁に石組みが組まれていた。石材は大型のものであったというが詳細は不明である。また、この時内部から本報告において掲載した軒丸瓦中世Aタイプおよび軒平瓦中世Aタイプのセットが多く出土した。この2本の堀は2区のSD4・5に接続する可能性がある。

### 2. 小野市教委2009調査

県道神戸加東線に伴う工事に際して、民家移転先の掘削部分について調査がおこなわれた。調査地点は古屋敷東堀部分にある。この調査では堀底の岩盤層を検出するとともに、土師器壠・備前焼などの戦国時代の遺物を検出している。

### 3. 小野市教委2012調査

県道神戸加東線から現存土壠と觀音堂の間を抜けて、旧道と接続する市道が計画されこれに伴う調査が実施された。調査地点は庄屋屋敷の西邊から、宮田氏が南北に堀跡とする範囲で、村絵図にも部分的に堀の表現がある。ただし、掘削深度が中世以前の面にまで達していないので豊地城跡の様相については不明である。部分的な斬ち割りでは古屋敷東堀の存在は確認されたという。ただし、南側の旧道寄りで近代に下る竈や土坑・埋桶造構などが検出され民家跡が検出されている。

小野市教育委員会の調査事例は報告書が未完であるため、調査成果の詳細は不明であるが、本報告の成果も踏まえた総括的な報告書の刊行が望まれる。

## 第3節 発掘調査の体制

### 1. 発掘調査の経過

調査は兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館が調査機関となって平成21年～23年度の3カ年間に渡って実施した。

航空測量については1次調査が2月24日、2次調査が2月3日（4-1区）および3月3日（4-2区・6区）、3次調査が平成24年2月29日に実施した。

現場公開については第1次調査が平成22年2月27日（土）に現地説明会を開催し150名の参加者、同2月22日（火）に下東条小学校6年生56名の遺跡見学があった。第2次調査が平成23年2月26日（土）に現地説明会を実施し150名の参加を得た。また、期間中には周辺地域の方々の来訪が随時あり、農地跡の関心の高さを示した。第3次調査が平成24年3月3日（土）に現地説明会を開催し約20名の参加者がいた。

### 2. 現場の体制

調査組織は以下のとおりである。

平成21年度（第1次調査）

調査担当職員：吉誠雅仁（調査専門員）・別府洋二（担当課長補佐）久保弘幸（同左）・山上雅弘（同左）・深江英恵（主査）

調査補助員：西本寿子・小谷義男・山本亮二・竹地克征・赤堀千恵子

現場事務員：藤田由美

室内作業員：五百蔵道代

平成22年度（第2次調査）

調査担当職員：別府洋二（担当課長補佐）・山上雅弘（同左）・柴田紀三光（臨時の任用職員）

調査補助員：西本寿子・小谷義男・山本亮二

現場事務員：藤田由美

室内作業員：五百蔵道代

平成23年度（第3次調査）

調査担当職員：森内秀造（調査第2課長）・山上雅弘（担当課長補佐）・長瀬誠司（主査）

調査補助員：西本寿子

## 第4節 整理作業

### 1. 整理作業内容

出土品整理事業は4カ年にわたって実施した。各年度の作業内容は次の通りである。

平成22年度は平成21年度調査の木製品の実測、および写真撮影、平成23年度は同じく平成22年度調査の木製品の接合・補強、実測、写真撮影、写真整理を兵庫県立考古博物館内で実施し、木製品の保存処理を魚住分館にておこなった。平成24年度は平成23年度調査の水洗い・ネーミング、接合・補強、実測・拓本、平成21・22年度調査の復元を実施し平成22年度調査の分析鑑定を株式会社パレオ・ラボに依頼した。

平成25年度では平成23年度分の接合・復元、実測・拓本、復元作業を実施し、21～23年度にかけての残りの写真撮影・写真整理を実施した。さらに、平成22・23年度調査の木製品について保存処理をおこなっている。

平成25年度に公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部において図面補正・トレス・レイアウト・編集作業をおこなって報告書を刊行した。

### 2. 整理作業体制

整理作業を担当した整理技術嘱託員・日々雇用職員は以下のとおりである。

平成22年度

B作業 杉村明美 高橋朋子

平成23年度

A作業 真子ふさ恵 萩野麻衣 青生真理子 又江立子 宮野正子

B作業 杉村明美 高橋朋子

保存処理 浜脇多規子 桂昭子 今村直子 小野潤子 前田恵梨子 藤尾裕子 西口由紀

平成24年度

A作業 島村順子 荒木由美子 萩野麻衣 小野潤子 藤池かづさ 上田沙也香

B作業 杉村明美 柏原美音 宮田麻子 池田悦子 高瀬敬子 加藤裕美 川村由紀

平成25年度

A作業 藤池かづさ 萩野麻衣

B作業 杉村明美 佐伯純子 古谷章子 池田悦子 栗山美奈 梶真菜美 有田遙香

山口陽太（日々雇用職員）久保夏美

## 第3章 豊地城跡の調査成果

### 第1節 調査の概要 (図30図、図版1参照)

今回の調査は豊地城跡の中央を東西に横断した範囲について実施した。西側は通称「城畠」の南側、東側は通称「古屋敷」の北側を通り八幡神社境内の北端までの範囲にあたる。ただし、調査実施に際してはこれらを6区に分割して調査をおこなった。

調査の結果、戦国時代の豊地城跡（15～16世紀）関連の遺構（堀・石組井戸など）、集落跡（12～13世紀）、池田石の石切跡（江戸時代～近代）、粘土探掘土坑（明治～昭和初期）、石組井戸（近世）、埋桶（近世～近代）などの遺構が検出された。このほか、遺産遺物であるが石器や弥生時代・古代の遺物が出土しており、当該期についても僅かに痕跡を知ることができた。

これらの成果によって戦国時代に築城された豊地城跡は調査区の全域、東西約500mの範囲に及ぶ大規模な拠点城郭であったことが検証された。さらに、小野市教委1980年度a～c調査などのこれまでの調査では戦国時代後半の様相に視覚が集中していたが、SD 6の検出などによって同城の16世紀前半の様相についても成果を得ることができた。また、中世前半についても広い範囲で建物群や土器などが出土したことによって広範囲に集落の広がりを確認しており、豊地城跡以前の遺跡周辺についても僅かながら様相を明らかにすることができた。

一方、豊地城跡の廢城後についても東側の通称「古屋敷」と呼ばれる庄屋屋敷関連の施設群、2区東側の近代民家の痕跡、1区周辺の池田石採石のための開発の痕跡、2区東側・4・2区西端にかけての瓦生産に伴う粘土探掘土坑の検出、さらに近世～近代にかけての用水確保のために設けられた溜池・埋桶・溝・井戸・土坑などの施設群が検出された。これらは多岐にわたる土地利用が豊地城跡周辺でおこなわれたことを明らかにするもので、豊地の人々の近世～近代にかけての営みを明らかにするもので貴重である。

### 第2節 遺構の成果

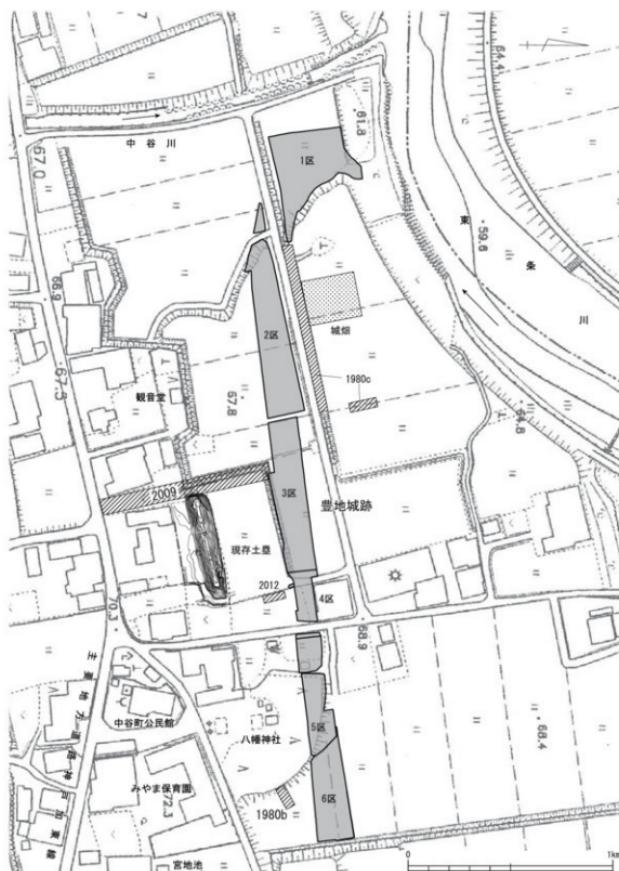
#### 1. 1区 (図版2・3・写真図版4～6参照)

1区は最も西端の調査区で、城跡の中権部が立地する段丘面より1段下がった標高63m前後に位置する。調査区中央に旧中谷川の河道が南北に通るが、調査区全域が採石場であったと思われ、人為的な石材の切り出し痕跡が全域で確認された。

調査区内部の基盤層は河床部を除いてすべて岩盤層である。東条川の河床は標高57.6m前後であるので調査区（標高63m）との標高差は4m前後、東側の調査区（2～4区・67.8～68.5m）との標高差は10～11mである。

調査区の耕作土・床土直下からは当該地周辺の基盤層である凝灰岩質砂岩（地元では池田石と呼ばれている。以下、池田石と呼称）が検出され、遺構面を形成する土層堆積は認められなかった。

調査区北東隅では、池田石を切り取った痕跡が2箇所あり、平面上ではL字状を呈している。これは、ほぼ等間隔で東西方向に走る石の筋理を1単位として、段階的に石を切り取っている痕跡と判断され



第30図 豊地城跡地区割図

た。さらに、その周辺部分でも同様の節理が認められる。石材が切り取られた部分は、主に東面で切り取りの痕跡が認められ、左右斜方向の壓痕跡があり、斜格子状に観察される。しかし、石切りの際によく見られる矢穴跡は認められなかった。

石切りの痕跡は、調査区の北西側でも見られ、調査区西側で検出した東条川の支流である中谷川の旧河道西岸でも、節理を境にして切り取られている。さらに、旧中谷川の護岸には人為的な加工を示す壓痕跡が見られ、特に西岸には3基の柱穴列が検出されたことから、川岸付近に何らかの施設を設けていたことが窺え、石切りに関する作業場的な空間が存在した可能性が考えられる。

当該調査地で検出した石切場は、採用時期等の詳細が明確ではないが、近隣の墓石や御百度石等で使用されている池田石に刻まれた年代では明治40年頃を示すものがあるため、少なくとも当該時期までは採業したのではないかと考えられる。また、調査区北側に隣接する東条川南岸付近では、切り取られた石材が散在する。このため石切りは中谷川のさらに深部まで続く可能性もある。一方、東側の崖上、牛島や城畠周辺についても石切りの影響で土地の変更が著しいといわれている。このように東条川に近い部分から順次切り取られた石材が、採石の範囲を徐々に広げ、最終的に一帯の石切りがおこなわれたと考えられる。

また、上記のことから、現在竹林となっている当該調査地北側にも石切場跡が広がる可能性が高い。このため調査区外に石切場の広がりが予想されたため、トレンチ3(7×1m)を設定し採石場の広がりを確認した。この結果、当該地は盛土が深く(3m以上)、本調査区の状況と同様、軟弱な土砂堆積が見られた。この状況からすると周辺は河床付近まで探石がおこなわれており、採石場の範囲が広範に及ぶことが予想される。

一方、調査区外の状況を東条川左岸沿いに確認すると、1区の東側に板石状の大きな石材が散布すること、旧中谷川の西側では石材が崖地形となり人為的な石材の切り出しがおこなわれた痕跡が確認できるなど広範囲に石切場の広がりが確認された。

#### 【石切面】

現場内では石切り面のほか節理を利用して石材を割り取るための人工による筋状の亀裂が随所に確認された。ここでは石切り面のうち良好に残されたものについて報告する。

**石切面1** 長さ3.65mほどの石切面で高さは4m以上であるが、調査区崩落の危険性から高さ1mのみを記録した。石面にノミ痕跡が顕著に遺れるもので、南側では縦方向、北側では不規則に縦ないし右斜め方向に残される。

**石切面2** 長さ3.7mほどの石切面で実際の高さは4m以上に及ぶが石切面1同様、高さ1m前後の範囲のみを記録した。石面にノミ痕跡が遺れるもので、南側では左上り、中程では右下がりと左上がりの交互、北端では縦方向に残される。

#### 【柱穴】

旧中谷川西岸に3基の柱穴が1列に並んで検出された。いずれも岩盤を掘込んだもので3基が並んで検出された。東西断面をみるといずれの柱穴も東側に傾斜して掘り込まれている。柱穴の平面形は円形で、直径20cm前後、検出土面からの深さは15~25cmである。柱底は南側の1基を除いて丸く、北側の2基は平底である。

## 2. 2区（図版4・5、写真図版7参照）

2区は東条川左岸の城跡主要部が立地する段丘面（標高68m）の西端にあたり、調査区西端では段丘崖となる。この地区的北側にはかつて城煙とよばれた土壇状を呈した地形が存在し、地元ではこの場所を城郭と認識していた。一方、城煙の西側には牛墓と呼ばれる墓地が存在する。この墓地は周囲よりも一段高い地形を残すもので、圃場整備前は牛墓の西側に川へと下る農道が存在した。

この地区では中世前半・戦国時代・近世以降の3つの時代の成果が認められた。検出された遺構は掘立柱建物・柱穴・土坑・溝・堀・粘土採掘土坑など多数である。特に、調査区の中程から西側にかけては中世前半および戦国時代の遺構が検出されるなど遺構の密度が高い。一方、東端では近代以降の粘土採掘土坑が検出された。また、前述のように地区西北側の水路において戦国時代末の瓦が出土するなど、周辺はかつて城郭に関係する成果が多く残されていた。

中世前半は掘立柱建物などが検出され集落遺跡が広がる。柱穴の密度からは西側から中程にかけてが特に稠密であるため、集落の中心エリアがこの範囲に存在した可能性が高い。集落の時期はSK23などの土器からすると13世紀代と思われる。建物に伴う顯著な区画構は検出されていない。

### 【堀】（図版6・7、写真図版10~14参照）

SD 4~6は2区の西側で検出された戦国時代の堀である。SD 4・5はSD 4がSD 5を切るもので、さらにSD 4の東側ではSD 6を切っている。従って、SD 4は最も新しい堀でありSD 5・6はこれより古い時期のものとなる。一方小野市教委1980年度c調査において検出された堀は今回検出された2本の堀に方向が近似する。この堀は側面に石積を持ち、内部に多量の瓦を包含していたということであるが、これらの瓦は北側の城煙と呼ばれる土壇状地形周辺から供給されたといわれている。今回の調査でも投棄された瓦が面的な広がりを持つことがない。このため瓦の供給先が城煙周辺であった点に関しては矛盾がない。

**SD 4** SD 4・5は重なって検出された堀でSD 4がSD 5を切る。2本とも調査区西端の北壁付近で検出され、SD 4は東西方向に検出され南北分のみを検出した。深さ1.5mで断面はV字状になる。検出長は20mであるが堀の北側は半分以上が現農地に続いていると思われ、調査範囲は堀底まで達していない可能性もある。

埋土は砂礫混じり軟弱なシルト質土が中心である。調査範囲の堀南側では土砂が南側から流入しており、一気に埋め戻された様相が確認された。SD 4を掘削するにあたってSD 5を埋めた可能性が高い。堀底付近から土師器皿・掛矢・建築部材などが出土している。

**SD 5** SD 5はSD 4の西側に重なるが、端部のみが検出された。規模は幅5m、深さ1.5mで断面はU字形となる。この堀はSD 4とは交差するが、方向は南西から北東に軸を持っており調査区外ではSD 4より北側に伸びていると思われる。内部からは土師器皿・堀などの小片が出土したもの、個体数はわずかである。ただし、SD 5が伸びている北側では圃場整備時の工事によって戦国時代末期の瓦が多量に出土しているが、この堀はそれより1時期古い遺構となる。

一方、この堀は先端が台地の端まで通り手前で途切れで検出された。段丘崖からは4mの距離を持つが、周囲の状況から見ると城跡の構造と深くかかわると思われる。小野市教委1980年度a調査ではこの段丘縁辺部に土塁の存在が指摘されている。今回の調査では土塁の痕跡などは認められなかったが、堀の途切れた状況からは土塁の存在は否定できない。

**SD 6** 堀は2区の中央付近で検出されたもので調査区を分断して南北方向に伸びており両側とも調査区外へ伸びている。北側にSD 4が東西方向に伸びるがSD 6とは調査区北壁付近で交差する。

この堀は南北方向に軸を持つが、南端で直角に折れ、西方向に延びている。堀の規模は幅5.0m、深さ1.2mで断面はU字形を呈するが、南端の西方向に伸びる部分は、北肩部分のみが検出されたもので全容は不明である。南北方向の部分では上層を地山掘削シルトによって埋め、下層に黒褐色の腐食土層が堆積していた。南端の東西部分は腐食土の上層を円錐で埋め固め、上層には軟弱な暗黒褐色土が充填されていた。円錐および暗黒褐色土は繩りが悪く、埋め戻し土であるため、この部分は後世まで堀状に開口されていた可能性が高い。

さらに、堀の南端にあたる調査区の壁には柱材が立った状態で検出された。状況から見て堀が疊層まで埋まつた状態で据えられた柱材と考えられることから、橋脚の可能性がある。このため、腐食土上層の疊層は橋脚の根固めのために客土された土砂の可能性が高い。

堀内部からは多くの遺物が出土したが、特に下層の黒褐色の腐食土からは京都系土器小皿・皿・木製品などが一括で出土している。さらにもこの堀全体では土器小皿・中皿・堀・瓦質土器鉢・備前焼鉢・徳利・丹波焼鉢などの土器類や、板材・柱材・漆器椀・木簡（「文明六年九月廿九日」鉢）・橋・曲物（朱印押印）などの木製品、錢貨（錢種不明）や石材など他種類のものが豊富に出土しており、3カ年の発掘調査において戦国時代の最も良好な資料となった。

これらの出土遺物からSD 6の下層、腐食土層の堆積の時期は16世紀前半頃と考えられる。一方、上層の出土土器には16世紀後半のものが混じるので、上層は長く堀跡が残されていたことが推定される。さらに堀南西端周辺の客土からは丸瓦T14~23などが出土したことからみると、この周辺では戦国時代末期まで軟弱な場所として痕跡が残されていたと思われる。

#### 【掘立柱建物】（図版8・10・11、写真図版9・15~19参照）

2区で6棟（このほか3区で1棟、6区で1棟）の掘立柱建物を検出した。建物はほぼ同軸方向を示すことから、何れも同時あるいはその前後の時期のものと考えられるが、柱穴内からは時期を示す明確な遺物の出土が乏しく、建物個々の詳細時期は不明である。ただし、近世遺構との切り合い関係や、近世以前の遺構及び遺物の状況を考慮すると、2区・3区の建物については、概ね鎌倉時代頃（13世紀）のものではないかと考えられる。また、掘立柱建物として成立しなかった柱穴の中には、五輪塔の地輪や火輪等を礎石として転用しているものも見られ、これらは、時期的に後出するものと考えられる。

**SB 1** 柱行（南北）約6m×梁行（東西）約4.3m、柱行3~4間×梁行き2間の南北棟である。北側はSD 5によって失われていた。削平が著しいためか柱穴の大小や深さの差が大きい。柱の並びは西辺が比較的の良好であるが、東辺は並びが不均等である。このほか、全体に南側の地形が少し高くなるためか、この部分では柱穴が浅くなる。

**SB 2** 西端段丘崖に沿って検出された建物である。柱行7.3m×梁行2m以上を測る南北棟で統一柱建物である。柱間は北側が2.2~2.1m前後に対して、南側は2.6mとやや長くなる。柱穴は円形で直径30~50cm、検出深さは30~40cmと比較的の残りが良好である。

**SB 3** 2区西側では多数の柱穴が集中して出土するが、東側ほど柱穴の深度が浅くなる。本建物も構成する柱穴の深度が浅いものが多い。このためか南辺および東辺については建物を復元することが出来なかった。L字形に検出された柱穴の並びを建物と推定した。

**SA 1** SD 6の西側に堀に沿って検出された構跡である。ただし、構跡のピットは直径10~15cm、深さ

15cm前後と小規模であるため、堤岸を遮断するほどの柵であったかどうかは結論できない。ピットの間隔は80~90cmである。

**SB4** 2区の東側で検出された建物である。桁行12.5m×梁行7.9m以上、面積98m<sup>2</sup>以上を測る南北棟で、桁行6間以上×梁行4間の規模を持つ。東柱はほぼ正確にならぶ総柱構造である。

柱並びや柱の通りは比較的良好である。ただし、南側のP143はやや柱間が聞くことから見るとP104までがこの建物の南限である可能性も残される。復元案は柱通りからP143・P146までを含め、さらに南側に伸びることを想定した。柱穴の直径は30~60cmで円形ないし梢円形であるが、検出面からの深浅には個々の柱穴で開きが大きい。

なお、建物北側にSK17が掘り込まれるが、後世のものである。このほか同じく北側にSK23がある。この建物は、今回の調査で最も大型のもので周辺の柱穴密度も高い。このため本地点が道路の中心となる可能性が高い。

**SB5** SB4の東北側で検出された建物である。建物中央にSK9が後世に掘り込まれる。建物規模は梁行4.7m×桁行5.5mを測る東西棟で側柱建物である。柱間は東辺が約1~2mの4間で、南辺が約2mの2間、西辺と北辺では、建物に伴う柱穴が少ないと、俠長が大きく柱間が不定となる。

**SB6** 調査区の南端、SB4に重なって検出された建物である。SB4よりも若干西側に傾いて検出された。検出範囲での規模は南北2間以上×東西4間で、3.8m以上×7.8mを測る。

#### 【柱穴】(図版4、写真図版16~19参照)

2区からは全城にわたって稠密に柱穴が検出されるが、建物として並びを復元できるものが少なく、検出された柱穴は浅いものが多い。このことからは上面を削平されたり、失われた柱穴が多いことが推測される。検出された柱穴は概ね円形ないし梢円形のもので、直径は15~60cm前後であるが、30~50cm前後のものが標準である。平面形状に円形の重複が認められるものや、柱底の最深部が一ヵ所でないものなど柱の重複ないし柱材の抜き取り痕跡と思われる柱穴も確認される。なお、2区の柱穴を俯観的に入ると西側では建物軸と同一方向に並ぶものが多く、東側ではSB4・5などに並ぶ柱穴が多い。

ただし、SB6のように西側に近い軸方位をとる建物も存在する。このため、西側と東側で建物群の基本的な軸方位が異なるが、時期的には西側の建物の軸方位が東側にも及んだ可能性がある。

柱穴群からはP23（備前焼利30）・P62（土師器皿31）・P210（土師器壙33）・P72（須恵器壙34）・P93（須恵器壙32）・P137（施釉陶器29）が出土している。

#### 【土坑】(図版11・12、写真図版21参照)

**SK7** 粘土探掘土坑SK9の南肩で検出された土坑である。出土遺物から時期は13世紀代と考えられる。平面は直径約1mの不定円形を呈し、深さは0.4mを測る。土坑内からは、土師器壙、須恵器壙、須恵器小皿等がまとめて出土した。

**SK9** SB5に重なって検出された土坑で粘土探掘土坑である。長さ8m、幅3.4m、深さ0.85mの大型のものである。内部からは多くの中世瓦が出土しているが、少量の近世瓦も含まれるため、時期は近世以降のものである。

**SK11** 円形土坑であるが東側半分を粘土探掘土坑によって半裁される。土坑底に拳大の礫が集石されていた。遺物が出土していないため時期は決めがたいが、この土坑はP65・P66・P151などと同様近代の民家に伴う礫石の根固め土坑である可能性が高い。

**SK17** 方形の土坑で、粘土探掘土坑である。SB4の北側を掘込む形で検出された。長さ4.5m、幅3.4

m、深さ0.8mを測る。土坑の東面に沿って北側に上るスロープが検出された。土坑底はほぼ水平で壁も垂直に近いもので規格性の高い土坑である。出土土器は戦国時代の瓦や土器などが出土するが、近世以降のものも混じる。このため本土坑は近世後半に掘削されたと判断できる。

**SK23** SB 4 の北側で検出された円形の土坑である。北側から流れる溝の流末にあたる。

**【井戸】** (図版12、写真図版21参照)

**SE 1** SE 1 は2区で検出された唯一の井戸で、粘土採掘土坑によって東側半分を破壊されている。小型の井戸で内径0.5m、検出された深さ1.1mを測る。上半を崩して内部に井戸側石材を投棄していた。井戸底は粘土採掘土坑よりも若干深く、シルト層下の礫層まで達していた。

遺物が出土していないため時期の詳細は不明であるが、周辺の状況や埋土が粘土採掘土坑と同質であることから見ると、近世以前の遺構と判断される。

**【粘土採掘土坑】** (図版12、写真図版20参照)

2区の東側には粘土を採掘した土坑が集中して検出された。これらの土坑は6列に分割され南北に細長く掘削している。さらに、西側のSK9・17などについても同様の機能が考えられるが、全く異なったプランを持つので、同じ瓦粘土を採取するためのものかどうかは疑問が残される。

6列の土坑では東端の列が最も深く掘削をおこなうが、これは良質の粘土層が深くまで採取できたことに起因する。これらの土坑の底では礫層が部分的に検出されている。さらに東側の土坑列では方形に近い掘削単位ごとに採掘がおこなわれている。東側列の土坑の深さは0.6~0.8m前後である。これに対して西側の土坑列は徐々に浅くなる傾向があって、西端では深さ0.1~0.2m前後まで浅くなる。

埋土からは近世瓦や近世~近代にかけての陶器(未実測)が出土するが、地元の方の記憶からすると昭和初期頃まで粘土採掘作業がおこなわれていたという。

**【溝】** (図版5・9、写真図版8・15参照)

**SD 2** SK 9 に切られる溝で、SE 9 から南方向に伸びる。幅0.2m、深さ0.15mである。

**SD 7** 西地区の南辺に伸びるもので、平面不定形の遺構である。この遺構は段丘面に向かって下るが底や壁に凹凸が見られるため、段丘面が開析されて谷状になった自然地形の可能性が高い。

### 3. 3区 (図版13、写真図版22参照)

3区は堀1西辺の西側から堀1東辺の手前までの地区で、中世段階では方形館、近世以降は通称「古屋敷」と呼ばれる。近世には庄屋屋敷が置かれた場所の北半にあたる。調査区はこの屋敷地の北側で屋敷地中心部より1段下がった場所にあたる。村絵図では屋敷地は北側に入口があり屋敷へ通る通路があったといわれるが、調査ではそれらは検出することができなかった。

調査の結果、調査区西端で堀1西辺が検出されたが、地区内からは近世以降の掘立柱建物、土坑・溝・埋桶・井戸などが検出された。これらの遺構は営農活動のための施設群と考えられ、畠作に伴う肥溜や、用水確保のための施設と思われる。

調査で検出された遺構で、西側に集中する埋桶群がある。これらは西南からSK11・29・8→SK9・7・4→SK10・25・30の範囲にコの字形に配置され、さらに、堀1西辺に向かって排水溝を持つ。この状況からみると、埋桶群の範囲は長軸12m、横軸4m前後の範囲に納まっている。小屋などの簡易な建物の中におさめられていた可能性が高い。おそらく肥溜め小屋などの作業小屋が存在したものと推測される。さらに、東側のSX1は堆肥を集めた場所もしくは苗床などが想定され、SE2は農業用の用水

確保のためのものである。さらに堀1西辺出土の建築部材W13、柿葺の薄板W14~17などはこの作業小屋のものと考えられる。ただし、同じく堀1西辺から出土した瓦類については、当時の貴重性からみると屋敷本体の瓦を見ておきたい。以上から調査区周辺は庄屋敷の営農に関連した施設が置かれた場所と推測される。いずれにしても、3区では戦国時代の方形居館を想定して調査をおこなったが、堀以外に当該期の遺構は検出できなかった。また、調査区内には包含層は残されておらず検出状況からすると古屋敷と呼ばれるよう屋敷地でなくなった段階で、削平がおこなわれ地盤が切り下げられた可能性が高く、この影響で遺構面が喪失したものと思われる。ただし、このように遺構の残りは良好ではないが、近世以降の遺構群に重なって、中世前半のSB7など掘立柱建物や柱穴群が検出されていることから見ると、削平は數十センチ未満で中世前期の集落域が3区にも及んでいることが確認できた。

【堀】(図版14・15、写真図版27~32参照)

**堀1西辺** 調査区西側から西北にかけて検出されたもので、主郭の周囲を巡る堀である。庄屋敷の西辺と東辺のコーナー部分を検出した。堀の規模は幅12m、深さ2.5m、検出長13.5mと大規模である。

上層の整地土(図版14・2層)の直下に石組溝が堀中央に構築されていた。軸を南北方向(N10°W)にもつもので、北から南に向かって流下する。ただし、東面は埋戻し時に大半が破壊されて残らない。検出範囲での溝の規模は幅1.2m、深さ0.3~0.4m、検出長13.4mである。検出面での高さは溝の天端が67.1~66.8m、溝底が67.7m前後である。ただし溝の深さについては側壁の石材で天端石が見られないため、もともとはもう少し深い溝であったと思われる。なお、上層の整地土はシルト質土や礫混土、植物遺体が混る表土層などが大きなブロック状の塊で含まれていた。これらが転圧を受けてラミナ状になるもので、重機などの整地による土砂と思われる。また、石組み溝周辺には戦後以降と思われる遺物も含まれるため、園場整備段階までこの溝は機能していた可能性が高い。溝の石材は多くが池田石で、長方形ないし板状のものが多く、大きいものは1m前後の規模がある。溝中には腐食した植物遺体が堆積するが、砂などの堆積はないので最後の段階では水の流れではなく、滞留して機能していなかっと思われる。なお、側壁の裏込にはグリ石が充填されていた。これにはバラス状のものから拳大のものまでさまざまな石材が含まれる。

このほか、溝下層付近でも石列が検出されている。この石列は埋まる過程で東岸の土留めのために構築されたもので、下部に杭を打ち込んでいた。石列の検出高さは標高67.5m、検出長は5mである。堀下層は岩盤を水平に掘削するが側壁は居館内側に大きく入り込み、法面には段を持ち、階段状に掘削され、肩部が湾曲する。これに対して西側は急角度(70°)で肩部はやや湾曲を持つもののほぼ直線的である。北辺についても居館側の肩が大きく湾曲した形で検出され、法面は中ほどが抉れた状態となっている。

村絵図に表現された形態でも堀1西辺は膨らんで、居館西北側が大きく内部に入り込んだ表現となるので、この部分は近世になって堀を拡大し、溜池に利用した可能性が高い。その後、近代になって石組み溝のレベルまで埋めて、周囲を水田とし、堀中に用水溝を引いたと推測される。堀内や周囲からは近世の瓦が大量に出土したが、これらの瓦は庄屋敷に伴うものであるので、用水溝(石組溝)が構築されるのは庄屋敷の廢絶以後の可能性が高い。また、用水溝下層の埋立土は堀外側から大量に運ばれてきている。この土砂は灰色の礫混りシルトであるが、表土層ではなく、段丘礫層の1層上から供給されるものである。また、土壌の盛土ではないことも確実なので、西側の段丘崖などから供給されたものと推定され、近代にも耕作地の大規模な整備がおこなわれた可能性がある。

なお、堀1西辺からは戦国時代の土器・陶磁器が出土するとともに、最下層を含む場所から近世の陶磁器も出土している。一方、瓦類に関しては近世の瓦が主体となる。このほか前述のとおり建築材（柱・板）などが出土している。

**【掘立柱建物】**（図版16、写真図版24参照）

**SB7** 桁行5m×梁行3mの南北棟で、柱間がやや不定であるが、2間×3間の規模である。北辺の一部はSK9に切られて、柱穴が失われている。P23Iには根石として石臼S3が転用される。

**【土坑・埋桶】**（図版16～18、写真図版25参照）

**SK2・3** SE2の東側で検出された土坑である。SK3は埋桶土坑で、SK2はSE2に切られるが、SK3はSE2の上層になる。

**SK5** 埋桶遺構である。直径1.2m、深さ0.18mの規模を測る。

**SK6** 埋桶遺構である。直径1.55m、深さ0.45mの規模を測る。

**SK7・21** SK7はSK21を切って構築される。SK7は埋桶遺構で、直径1.0m、深さ0.35mの規模を持つ。SK21は方形土坑である。規模は長軸1.9m、幅1.35m、深さ0.28mを測る。両土坑とも内部に礫を多量に投棄していた。

**SK8** 埋桶遺構である。直径1.45m、深さ0.45mで埋戻し土に多量の礫を投棄していた。

**SK9** 埋桶遺構である。やや下彫れの平面形となる。

**SK10** SK10と切り合う形で2基の埋桶が検出された。SK10が隣接土坑に切られる。SK10は直径1.15m、深さ0.3mの規模で、隣接土坑は直径1.35m、深さ0.1mを測る。

**SK11・29** 2基の埋桶遺構が重なるもので、SK11は直径0.9m、深さ0.45mの規模で、SK29を切って構築される。両者とも桶材は撤去されて堀方の痕跡のみとなっている。

**SK20** 内部に丹波焼窯236を据える土坑である。直径0.48mの小さなものである。

**SK25・30** 2基とも埋桶遺構である。隣接するSK30を切ってSK25が据えられる。SK25は直径1.5m、深さ0.3mで、さらに西側に土坑を拡大して掘削する。SK30は平面は円形で、直径1.3m、深さ0.4mである。

**SK28** 埋桶遺構である。規模は直径1.2m、深さ0.6mである。堀方は円形に近い。桶は撤去されて残らない。

**【井戸】**（図版16、写真図版26参照）

**SE2** 石組みの内径0.95m、堀方の直径1.9m、深さ1.95mの規模を測る。深さは石組み部分が1.7mで、下部は岩盤を掘り窪めて水溜としていた。石組みは角礫を主とし人頭大から拳大前後の石材を組んでおり、積み方は丁寧なものである。

**SE3** 調査区の南辺で検出された井戸で、半分が調査区外に伸びる。規模は直径3.5m、深さ1.8mを測る。土坑の最下部は円形に埋んだ状態で検出されたが、土坑側壁は広がる状態で土坑内から石材が多く検出された。検出状況から本遺構は石組井戸を崩して大半の石材を取り除いた痕跡と思われる。最下部の積みは井戸の水溜めと判断される。

**4. 4区**（図版19、写真図版30参照）

調査範囲は堀1東辺およびその東側で八幡神社の境内地の手前までの範囲で、4-1区（西側）と4-2区（東側）の2地区に分かれる。調査の結果、農地跡に関する遺構は堀1東辺・溝・石組井戸な

どに限られ、その他の遺構は江戸時代以降のものであった。特に近世以降の遺構は、井戸・土坑や溝など耕作に関わる農業用水を確保するための施設が中心である。これらの施設の発見は、この地域の農業用水確保が困難なものであったことを物語っている。ただし、少量であるが戦国時代の遺物の出土や堀の発見によって、調査区が農地跡の域内であることも確認できた。

#### 【4-1区】(図版19・20・22、写真図版30~32参照)

検出された遺構は堀1東辺・井戸・埋桶・柱穴土坑などがある。堀1東辺は調査区の西端で検出された。SE4は石組の井戸で堀方の直径1.5m、内径0.5m、深さ1.6mの規模を測る。

**堀1東辺** 調査区の西端で、堀1東辺が検出された。この堀は主郭の周囲を巡るもので、3区で検出した堀1西辺の続きである。検出部分は堀1東辺のコーナー付近にある。堀の規模は幅6mで、昨年検出された西辺(幅12.5m、深さ2.5m)の半分であった。検出範囲は南北方向に10mであるが、北側は深さ2m前後と深いが、南側は1m前後と極端に浅いものである。两者とも岩盤層まで掘削するが、これは南側の岩盤層が東に向かって上昇するため、掘削を断念した結果と推定される。

一方、この堀は江戸時代を通じて埋めしなかったようで、底部に木桶が据えられていた。この桶は南側から北側に通水する構造で、北端には方形の石材を置いて桶を安定させていた。さらに、桶は北側へ傾斜して敷設されるが、前述のように北端部で急激に深くなるので、これに向かって木桶の水が流下するように造られている。

検出された木桶の長さは3.8mで、この間に木桶が設置されており、ある時期にこの部分が埋め戻されていたことが推測される。桶の上層の土砂はグライ化した泥土で、わずかに掘方が残されるものの直上まで後世の土砂で充填されていた。調査前にこの部分は農道となっていたが、この状況からこの農道の敷設以前にこの木桶の上(幅6m)は屋敷地への進入路であった可能性がある。この屋敷地の東側入口については村絵図には記載がないが、木桶の存在からすると江戸時代には存在した可能性が高い。

堀内部からは丹波焼擂鉢・備前焼擂鉢・土師器壺、瓦などが出土した。このほか、中世の遺物に混じって江戸時代後半の肥前系磁器や杓文字・下駄などの本製品も出土している。

**SE4 堀1東辺の西側** 検出された井戸で、規模は堀方の直径1.45m、深さ1.6m、井戸の内径0.6mで、井戸底は岩盤層に達していた。石組み石材は長さ15~30cmのものが使用され、埋め戻し時に内部に多くの遺物が投棄されていた。埋め戻し土は泥土状の灰色シルトで炭を多く含んでいる。井戸断面はロート状に掘削がおこなわれ、井戸底の近くでは堀方が小さくなる。

#### 【拡張区】(図版20、写真図版31・32参照)

農道部分で当初の本調査区で調査がおこなえなかった部分である。(経緯は第2章のとおり) この拡張区では、堀1東辺の底部のみを検出した。検出面は全域が岩盤層で標高67.46~67.54mを測る。調査区の北端に木桶の一部を検出したが、長さ0.5m南側で終わっていた。これは破壊されたものではなく、もともとこの部分が桶の端部であったもので、検出範囲では側板ではなく桶の底部のみが残されていた。

出土遺物は江戸時代の瓦片や土師器鍋片などがあるが、細片であるため図化できたものはない。

#### 【4-2区】(図版19、写真図版33参照)

この地区は八幡神社境内の西側に隣接する地区である。江戸時代の井戸・埋桶・土坑・柱穴・溝・粘土採掘土坑などが検出された。井戸は3基すべて石組井戸である。

埋桶は6基以上が検出された。埋桶1のように桶をそのまま残すものと、埋桶2・3のように桶を抜き取られたものがある。

調査区の西端では粘土探掘土坑が検出された。いずれも東西方向に長軸を持つ土坑で長さ2~3m、深さ1~1.5m前後の規模を測る。近世以降の瓦生産に伴う土取りによって掘削されたものと考えられる。

#### 【土坑・埋桶】(図版21、写真図版33参照)

**SK1** 調査区の東北隅で検出された土坑で、東側の一部が調査区外に伸びる。平面円形で直径1.6~1.8m、深さ0.5mを測る。内部には人頭大の石材が多く含まれ、土坑底は岩盤層に達していた。土坑の位置が丘陵裾に達し、丘陵の傾斜に沿って岩盤層が急激に上がっている場所であったことから、深さ0.5mで土坑の掘削を中止したと思われる。土坑の平面形状や側壁が垂直に掘削されている状況からすると、4~2区のSE4~6、5区のSE7~8などと同様に井戸の掘削を目指したものと推測されるが、岩盤層がいため別の場所へ移ったと思われる。

**SK2** 調査区中央で検出された長方形土坑で、南北方向に長軸を持つ。規模は長さ2.63m、幅1.75m、深さ0.8mを測る。土坑底は中央が深く、周間にいくにつれ徐々に浅くなり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は軟弱な緑灰色の礫混じり層である。

**SK3** 調査区の北端中央付近で検出された土坑で南側のSK11を切っている。規模は南北1.9m、東西2.05m、深さ0.6mである。内部には小規模な石室があったと推定されるが、土坑廃棄時に破壊したとみられ、石室の北壁と南壁の一部が残存していた。

**SK11** SK3の南側に切られる形で検出された。元々は埋桶遺構であったと思われるが、桶が抜き取られていた。埋土はややしまりのある褐灰色シルトである。

**埋桶1・埋桶2** 並んで検出された埋桶遺構である。埋桶1が埋桶2を切っている。埋桶1は壠方の直径1.05m、深さ0.6m直径内部には桶の底部が残される。一方、埋桶2は桶が抜き取られているが、土坑の壠方は埋桶1に比べると不定形に拡大しているので、廃棄時の埋め抜き取りによって土坑規模が拡大した可能性がある。

**埋桶3** SK2の南東に検出されたもので、桶は抜き取られていた。直径0.9m、深さ0.6mである。

**埋桶4** 調査区の南より中央で検出された埋桶遺構で、規模は直径1.2m、深さ0.6mである。桶は抜き取られて残っていないかった。埋土は基本的に縦まりがわらいものである。

**粘土探掘土坑** 調査区の西端の幅5mほどの一帯は、南北方向に粘土探掘土坑が集中して検出された。その内、最も深いものについて断面図を提示した。埋戻し土は基盤のシルト層に類似した土砂で、内部にはあまり交雜物や瓦礫は混入されていない。この粘土探掘土坑の西側で水路工事に関わって立会調査をおこなったが、この調査では、掘削影響範囲が粘土探掘土坑の上面までであった。ただし、検出面の状況から、水路範囲まで粘土探掘土坑が広がることが確認できた。

この地区的探掘土坑も2区東端の連続する粘土探掘土坑と同様、一辺2~5mほどの単位で掘削を繰り返し、徐々に北側へ掘り進めるもので、南北方向の掘削単位で作業を進めている。ただし、岩盤層ないし礫層に達すると粘土の探掘を中止したようで、礫層が顕を見ると土坑底になっている。また、探掘土坑は南側から北側に浅くなるが、これは岩盤層との関係で浅くなっているものと思われる。

#### 【井戸】(図版22、写真図版34参照)

**SE5** 調査区の中央、SK2の東隣で検出された。規模は壠方の直径1.5~1.7m、深さ1.0m、内法直径0.7mである。井戸側の石組みは壠方に沿って掘削されるが、石組みの深さは0.6mで、下部の0.4mは岩盤層を掘削した水溜めとなる。石組みの構築は稚拙で、部分的に石材の組み方が乱れる。井戸側の石材

は池田石で板状のものを多く使用している。

**SE 6** SE 6 は堀方の直径1.76m、深さ0.6m、内径0.8mである。井戸底は0.4mほどで岩盤層に達しており、岩盤層を若干掘り窪めたところで掘削を中止している。井戸側の石材は池田石を用いている。掘理の関係で板石状のものが多いが、石組みの西側が崩れてなくなっている。このほか、石組みの地盤崩落を防ぐために杭が打ち込まれていた。

**SE 7** 調査区の北辺、SK 3の西側で検出された井戸で、規模は堀方の直径1.14m、深さ1.85m、石組みの深さは1.46m、石組みの内径0.44mを測る。内径が小さく小規模な井戸であるが、SE 5・6と異なり規模に比べて深い井戸である。これは井戸底の岩盤層の関係から深くなつたものと思われる。石組みの基底石は岩盤層に直接据えるが、水溜は岩盤層を掘削して構築している。

石組みの構造は横積みを意識するもので、比較的均質な石材を用いて巧みに積み上げている。SE 5・6に比べると本格的な井戸である。石材は角礫が多く、池田石は含まれない。

## 5. 5 区（図版23、写真図版35・36参照）

5区は八幡神社境内の北端およびその両側の山裾にあたり、農地跡の東端にあたる。この神社境内の東辺には緩やかな高まりがみられるが、調査の結果、八幡神社境内の東側で堀跡を検出し、調査区の広い範囲で戦国時代の遺物が出土した。また、堀跡に隣接して近世の井戸2基（SE 8・9）および土坑（SK 1・2）を検出した。山頂側において土壠の痕跡は検出できなかつたが、16世紀後半の土師器等などが出土しており、戦国時代の遺構が存在した可能性が認められた。

### 【溝】（図版24、写真図版36参照）

**SD 1** 調査区の東側山裾において堀1を検出した。この堀は南側が幅2m、深さ1mほどの規模で、断面が葉研堀状になる。埋土は暗青灰褐色の泥土を中心で植物遺体などを含むものである。しかし、SK 2を挟んで北側は幅が5m前後と広くなり、深さが0.2m前後と浅くなるなど、規模が一定でなく南北で大きく異なるため、上層を大きく削平されたと考えられる。

当初、みやま保育園から緩く土壠線に並行する堀（前述のとおりみやま保育園では用水池として堀跡が残る。）を想定したが、埋土には植物遺体が麻らずに残され、縦りが悪いなど新しい状況が読み取れた。このため本遺構を用水溝とした。

なお、小野市教委1980年度a調査で検出された外郭線の堀は本遺構に接する可能性がある。そうであれば、みやま保育園東側の溜池から延びる溜池用水の可能性も考慮の必要があろう。

### 【井戸】（図版24、写真図版37参照）

井戸は調査区の東側、山裾において2基（SE 8・9）検出した。この2基は石組井戸で東側の山裾付近に構築されていることから、湧水を汲み上げるためにものである。井戸底は岩盤まで掘削しており、井戸底に湧く水を汲み上げたものと考えられる。また、4-2区SE 5～7・6区SE 10なども同様の性格のもので、この周辺では集中して井戸が構築されている。2基の井戸の掘削は近世と思われるが最終的に埋まるのは近年のこと、昭和56年度の圃場整備事業まで使用されていたといふ。

**SE 8** 石組井戸で堀方の直径1.95m、深さ2.5mで、石組の内径が0.4～0.5mと小さな井戸である。石材は10～50cm大の川原石が多く、大小の石材を混ぜて使用し、石組の背面にはグリ石が充填される。井戸底は岩盤層まで達するが、斜面地であるため南側と北側で岩盤層の高さが異なっている。丘陵側である南側で岩盤層が高くなるが、井戸底は北側のレベルで合わせる。

**SE 9** 堀方の直径1.5m、深さ2.6mで、石組の内径が0.75mと小型の井戸である。石材は20~60cmの大川原石が多く、大小の石材を混ぜて使用し、石組の背にはグリ石が充填される。井戸8同様井戸底は岩盤層まで掘削するが、規模の割に深くなっている。埋土には植物遺体が大量に混入する。

【土坑】(図版24、写真図版36参照)

**SK 1** SE 8・9の間で検出された土坑である。直径1.1m、深さ0.3mの円形の土坑である。埋土は褐灰色シルトでしまりの悪い土が充填されていた。規模や状況から見ると井戸を掘削する途中で放棄した可能性が高い。

**SK 2** SD 1 の中程で長さ3.5m、幅3.2m、深さ0.85mほどの楕円形の土坑である。平面は隅丸の長方形を呈し、壁面はほぼ垂直に掘削されている。土坑底も水平に掘削する。ただし、周囲からの湧水が激しく面積が十分におこなえなかった。SD 1 同様用水溝を貯める土坑と考えられる。SD 1 の用水やSE 8・9の汲み出し水を一時貯水するための用水池の機能も果たしたことが推測される。

## 6. 6 区 (図版24、写真図版38参照)

この調査区は豊地城跡東端の地区で、八幡神社境内の東裾から同遺跡との間の谷地形である。ただ、開墾によって全体的に削平したと思われる遺構の状況は良好ではなかった。表土下40~50cm前後で黄色シルト層をベースとする面を検出した。

調査の結果、鎌倉時代・戦国時代および江戸時代の遺構が検出された。検出された遺構には13世紀の掘立柱建物・柱穴、戦国時代の井戸・堀・溝、江戸時代以降の井戸・土坑・溝などがある。このうち確実に戦国時代の遺構と考えられるのは井戸SE11、土坑群SK10~13・15~19などである。13世紀の遺構は掘立柱建物SB 8、柵跡SA 2、柱穴がある。柱穴は比較的広い範囲に検出されたが、大半が検出深度が浅く、柱の並びも悪いので上面を大きく削平されている可能性が高い。ただし、遺構の分布状況から広範囲に集落が立地したことが明らかになった。

【掘立柱建物・柵】(図版27、写真図版39参照)

**SB 8** この建物は南北棟で、調査区の南端で検出された。3間×2間(桁行4.5×梁行4.0m)の規模であるが、建物は南側にさらに延びる可能性もある。SD 2 をP 9 が切るので、SD 2 が跡で埋まつた後に建てられた建物である。

**SA 2** 東側で検出されたSA 2 はSB 1 の東側に並行して検出されたもので、範囲は3間分で長さ6.0m以上である。P 1 ~ 4 が列に並び、建物の東辺を画している。

【溝・井戸】(図版25~27、写真図版40・41参照)

**SD 1** 調査区の東側山裾においてSD 1 を検出した。この溝は南側が幅2m、深さ1mほどの規模で、断面が葉研磨状になる。しかしSK 2 を挟んで北側は幅が5m前後に広がり、深さ0.2m前後と浅くなるなど小規模で、南北で形状が大きく異なり、埋土は軟弱である。これらのことから、SD 1 は豊地城跡に伴うものではなく、湧水確保のために掘削された溝で、SK 2 はこれを貯水するための土坑と考えられる。北側で幅が広がり検出面からの深さは浅くなるが、溝底のレベルは南から北側に向かって低くなる。斜面裾部で湧水を集め北側の水田に引水した溝と思われる。

**SD 2** SB 8 の下層で検出された溝で、南東から北西に向かって曲流して流れ。幅は0.9~1.5m前後と一定しないため自然流路と考えられる。調査区内には同様の流路がないが、もともとこの周辺はこのような流路が残されていたと推定されるが、水田開発に伴う削平で失われたのであろう。

**SD5** SD1から6区の中央に向かって伸びる溝である。東端で円形状の土坑となる。状況から水溜用の施設と推定される。

**SE10** 調査区の東側、山裾において石組井戸SE10を検出した。SE10と5区で検出されたSE8・9は丘陵裾付近に位置し、すべて井戸底は下層の岩盤層に達している。SD1同様に水確保のための井戸である。

井戸の堀方の直径1.45m、内径0.7m、深さ1.9mで、石組の内径が0.7mと小さな井戸である。井戸側は円形に石材を組んでいる。井戸上半の石材は魔絶時に撤去される。井戸側の石材は20~50cm大の川原石で小規模なものが多く、石組の背面にはグリ石が充填され、基礎には胴木が井桁に組まれていた。

**SE11** 調査区南辺に接して検出された戦国時代の石組井戸である。井戸上半は魔絶時の破壊によって石材が井戸中に転落した状態で検出された。

井戸の規模は堀方の直径2.0m、深さ2.1m、井戸の内径0.9~1mである。堀方は円形であるが約1/4が調査区の外に位置する。

井戸側に積まれた石材に大小が見られ、宝篋印塔などの石像品が転用される。ただし、石材の積み方が堆積で、南側の胴部が大きく孕んだ状態で検出された。

#### 【土坑群】(図版26、写真図版40参照)

調査区の西端、SD1に隣接してSK10~19などの土坑が集中して検出された。このうちSK14・19を除いた土坑は4基ごとに2列に並ぶ構造となっている。これらの土坑の規模は最も大きいSK17で0.7m、深さ0.15m前後である。埋甕遺構の可能性が考えられるが、内部から甕片などの出土がなく結論はできない。

## 第4章 豊地城跡の出土遺物

### 第1節 概 要

豊地城跡からは中世～近世を中心として多くの遺物が出土しており、総計はコンテナ150箱に上る。出土した遺物は縄文時代・古墳時代・中世前半（13世紀後半～14世紀）、戦国時代（15世紀後半～16世紀）・近世以降のものがある。

### 第2節 土器類・陶磁器

#### 1. 1・2区（国版38参照）

1区から出土した遺物で、図化できたものは土鍤149の1点のみである。管状土鍤で長さ4.2cmの小型のものである。このほか近世以降の磁器などがあるが細片のため図化していない。

2区からは中世前半および戦国時代の遺物が多く出土している。特に戦国時代の遺物はSD 6からのものが多くを占める。出土遺物には土師器小皿・皿・壺、瓦質土器火鉢・備前焼壺・擂鉢・丹波焼擂鉢・甕、中国産白磁・青磁・染付、瀬戸美濃焼丸皿・天目碗がある。

##### 【壺・溝】（国版32、写真国版45・56参照）

SD 2 須恵器椀1・2の2点が出土している。高台はなく口縁部の横ナデも省略気味の側体である。

SD 4 須恵器皿3、瀬戸焼丸皿4、中国産染付碗5がある。3は糸切底の皿で短い体部をもち、口縁部を丸くおえるものである。4は口縁部片で透明釉を施す。5は薄手の器壁を持ち、外面に植物文を描く。このほか図化できなかったが土師器細片やかけやW45・47などの木製品が出土している。瀬戸焼や染付磁器の出土から、この頃の時期は戦国時代のものと考えられる。

SD 7 須恵器高台付椀6、須恵器椀7の2点を図化した。6は高台付の椀で底部の破片である。7はベタ高台の底部片であるが、高台部分は退化したものである。

##### 【土坑】（国版32、写真国版45・51・53・54・56参照）

SK 7 土師器台付杯8・9・杯11、須恵器椀12～16・小皿10が出土した。いずれも土坑底からの出土で、13世紀代のものである。8・9は底部片のため体部の詳細は不明であるが、椀の可能性が高い。10は底部が厚手になる皿で体部を短く上方に立ち上げる。12～15はいずれも高台が退化したもので、口縁端部を丸くおえる。13・14は体部が直線的で底部を水平に切り離す。15・16は体部がやや湾曲し底体部の境がやや不明瞭である。16は内面の水引痕跡が顯著で底部が窪む。

SK 9 土師器壺20・21・備前焼壺19・弥生土器甕18が出土した。20は鈎が退化したもので、口縁部が内傾、外面に右上がりの平行タタキを施す。21は直立して直線的な体部で、外面に格子タタキが観察される。ただし格子タタキの痕跡は体部の中位より下のみに残され、上半は横ナデによって消されている。19は甕口縁部片であるが、玉縁が帯状になるものの抜張が未発達で、凹縁も顯著ではない。頭部がやや外開きであるが中世6期a段階でも初期の頃のものと評価される。

SK17 土師器壺25・26、瀬戸焼皿22・備前焼壺23・丹波焼擂鉢24がある。25・26はいずれも口縁部の小片、25は横ナデによって口縁部を内湾させる。26は口縁部を直立させ、端部を丸くおえる。22は底部

片であるが詳細は不明。23は玉縁がやや抵張するがSK 9の19に近似する。24は底部片で戦国時代のものである。

**粘土探掘土坑** 近世の瓦や陶磁器なども若干出土した。本土坑では唯一の中世遺物である土師器壠17を図化した。17は直線的やや内傾する体部を持つ個体で、口縁部内面に面を持つ。鈎はなく口縁部から体部の上半は横ナデを施す。外面の体部下半に観察される格子タタキは右上がりであるが、ナデによって大半は消されている。

**SK22** 丹波焼撻鉢28を図化した。底部片で一本書きの鉢目を持つ。

**SK23** 土師器撻鉢27を図化した。斜めに立ち上がる体部をもち、口縁部上端に面を持つ。鈎は退化するが横ナデによって隆起させる。内面には顯著に板ナデの痕跡が残される。

**【柱穴】**(図版33、写真図版45参照)

**P23** 備前焼慈利30がある。德利の口縁部細片で、ラッパ状に聞く小さな口縁である。

**P62** 土師器皿31がある。口縁部を横ナデによって引き出すもので、京都系土師器の範疇で捉えられるものである。

**P210** 土師器壠33がある。壠型のもので、内傾する口縁部を持つ。時期は中世前半のものである。

**P72** 土師器壠34がある。壠型のもので、外面に左上がりの平行タタキが僅かに観察される。

**P93** 須恵器碗32がある。底部を欠く。口縁部を屈曲させて丸く折る椀で、体部は直線的になる。

**P137** 施釉陶器29がある。時期不明の陶器で詳細は不明である。

**【堀】**(図版33~37、写真図版46~57参照)

**SD6** SD 6から多くの遺物が出土している。この堀の出土遺物には堀の南側でL字に屈曲する周辺の遺物と主として断面2・3より北側の遺物がある。このうち遺物の出土は南側に圧倒的に集中しており、土師器皿には正位置に置いたものも見られるので、単に投棄された遺物ではなく、意図的に置かれたものの可能性がある。特に有機質層とした遺物群はその可能性が高い。

前者には①埋め戻し時に混入した上層遺物で、SD 6周辺からのものも若干含む遺物、②埋め戻し時の上層遺物、③下層の糞食土堆積層からの遺物、④腐植土堆積層のうち植物遺体が顯著に堆積した場所からの遺物などの4種類がある。後者は⑤中層～上層の遺物、⑥暗褐色土の遺物、⑦最下層の遺物の3種類がある。

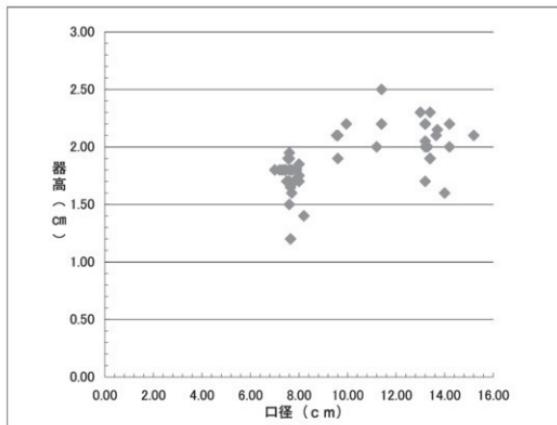
①は土師器小皿35・36、皿37・土師器壠39~43、須恵器碗38、瓦質土器44、丹波焼壺45、備前焼撻鉢46、中国産染付碗47があるが、上層の遺物には土師器皿は多く含まれない。土師器、小皿・皿はすべて京都系土師器の範疇に入るものである。37は薄手で口縁部をすんなりとおえる。土師器壠はいずれも鈎が退化したタイプで強い横ナデによる凸凹によって鈎状の隆起を形成している。40・41・43では外面の体部下半に右上がりの平行タタキが観察される。45は口縁部を屈曲させ、46は中世6期a段階のものである。47は碗の底部片で、内面に草花文を描く。

②は土師器小皿48・49、皿50・51、壠52~55、備前焼撻鉢56、青磁碗57、須恵器碗58などがある。小皿・皿はいずれも薄手の造りで、小皿にはナデ抜き痕が残る。皿は口径に比べ底径が大きく、底体部の境が明瞭である。横ナデも丁寧で端部を外方につまんでいる。壠は鈎が形骸化してナデによる痕跡のみとなったものである。ただし、体部は直線的であるが、底部は渋曲して丸くなり、やや深手になる個体である。タタキは右上がりの平行タタキであるが、体部上半はナデ消される。備前焼撻鉢56は中世6期a段階のものである。57は細片、58は中世前期の製品である。

③は堀南側の東壁付近から出土した土器で、部分的に下層のものが混じる可能性が否定できないが基本的には堀上層のものと考えている。土師器小皿59～61・65、皿62・鉢63、中国産白磁皿64・染付碗66がある。

小皿については底部が丸いものと、61のようにヘソ皿のような形態になるものがある。皿62は底部がやや小さく深手の印象を持つ個体である。口縁部のナデはやや省略気味であるが薄手の造りで、歪みも少ない。63は鉢としたが磨滅が著しく詳細は不明である。64は切高台になるもので15世紀代の製品である。66は染付碗で図像化した雲文を描く。

④は堀南側の下層から出土した土器である。土師器小皿67～82・皿83～89、土師器壺90～93、備前焼徳利94・播鉢95、白磁壺96がある。小皿と皿が明瞭に分かれるグループである。小皿は口径7.45～8.2cm、器高1.5～1.85cmで、右回りの横ナデ調整を施し、多くの個体でナデ抜きが観察される。底径は比較的小さく、丸底に近いものが多い。67・68・79～81のように底部がやや盛り上りヘソ皿気味になるものが見られるが、③の61ほどの顯著なものではない。83～85は法量からみると86～89の中間にあたるもので中皿としてもよいものである。86～89は口径13.4～14.2cm、器高1.9～2.2cm前後で大皿としてもよいものである。ただし、小皿の個体数に比べると、これらの皿は極端に低い比率となる。何れも底体部の境が明瞭な平底タイプのもので、小皿を除くと丸底タイプは確認できない。土師器壺は跡がすべて横ナデによる凹凸で表現されるものであるが、上層に比べ痕跡が明瞭であり、体部もやや内湾気味に立ち上がり、直線的ではない。92は口縁部上端を上方につまむ。90で体部下半、91・92で体部3/4より下に右上がりの平行タタキの痕跡が確認される。90～92の3個体は外縁の煤痕跡と内面に吹きこぼれの痕跡が確認されるなど使用痕跡が顯著であった。これらの3個体は被熱によって底部を中心として器面の剥離が見られた。93は細片のため詳細は不明である。



第31図 土師器皿法量表

備前焼壺94は底部に最大径を持つ船徳利で、体部にヘラ書き記号「卅」を持つ。擂鉢95は口縁部が上下に拡張し、端部内面に面を持ち、口縁部内面下がやや窪んで、体部へと移行する。中世6期a段階に該当する。

⑤は土師器小皿97～114・皿115～127・杯128、瓦質土器火鉢129がある。土師器皿が中心で基本的に④と同じタイプのものであるが、比較的中皿・大皿が多い点で異なる。小皿は口径7～9.95cm、器高1.7～2.2cmで、概ね8cm台に主体がある。④同様に明瞭なハソ皿は少ないので、99・104・106のように底部を隆起するものは一定量含まれている。128は橢形になるもので白色系の製品である。焼成は堅継で底部糸切りになる。本調査では唯一の出土品である。

129は3足を持つ製品で内外面に密なミガキ調整が観察される。

⑥はSD 6北側で上層から中層までの土器を含む。土師器小皿130・皿131～133・壺134・135、丹波焼擂鉢136、中國産青磁碗137がある。

土師器皿は個体数が少ないので132・133などは底径が比較的大きく、底体部の境が比較的明瞭である。壺134は鈎が消滅し横ナデによる凹線で表現される。135では口縁部直下がやや隆起し、端部を外方につまむもので時期的には16世紀代のものである。136は土器片、137は底部片である。

⑦はSD6北側の下層遺物である。ただし、南側の土層とは対応しないうえ、若干中層のものも含むため、堀南側とは対応しない。土師器小皿138～143・皿144・145・壺146・147、須恵器鉢148がある。

土師器小皿は基本的に他の遺物群と同じである。皿145は底体部の境が明瞭である。壺は鈎を横ナデによる凸凹で表現する。体部下半に右上がりの平行タタキが観察される。148は須恵器の鉢であるが、基本的に土師器擂鉢と同様の技法で製作される。鉢目はないが内面に刷毛目状の板ナザ痕跡が顯著で、片口を持つ。15世紀後半～16世紀代のものと考えられる。

SD 6の遺物群について記述してきたが、南側①～③出土の遺物群には土師器壺に16世紀後半に下るもの、また染付の存在など多くの点でやや時期が下るもののが含まれている。これに対して下層遺物は土師器皿・壺や備前焼擂鉢などを見る限り16世紀前半段階までの製品で占められている。貿易陶磁器についても基本的に染付は混じらない。一方、SD 6からは後述のとおり文明6年銘（1474）の木簡が出土しているが、その年代よりは出土の遺物群は新しいようである。

#### 【包含層】（図版38、写真図版45・51・53～56・63・64参照）

2区の包含層について国化できたものは17点（150～166）である。国化したものは須恵器B151、中国産白磁皿150・土師器壺152・155～157・羽釜153・擂鉢154、備前焼壺158・擂鉢159～161、丹波焼擂鉢162～164、染付磁碗165・皿166などがある。

151は奈良時代の須恵器である。150は底部の破片で、体部が縦反りになる器形である。152は頭部が夷形のもので、外面に平行タタキを施す。155～157は16世紀代のもので、155・157は外面に格子タタキを施し、口縁部は内傾して内側に面を持つ。

備前焼は壺158が口縁部で丸く小さな玉縁が観察される。159は擂鉢の底部片である。内面に9本単位の鉢目をもつ。160・161は口縁部を上方に拡張し板状となるものの、肥厚があり進まないタイプである。いずれも中世6期a段階である。

丹波焼は擂鉢で162と163が戦国時代のものである。162は口縁端部を丸くおえる。外面は斜め方向に指ナデの痕跡が残され、内面には1本描きの鉢目が観察される。163も同様の個体であるが口縁部はやや尖り気味におえる。165・166は江戸時代後半の染付磁器である。

## 2. 3区

3区は堀1西辺から出土した戦国時代と近世以降の遺物が大半を占める。ただし、これらの遺物では近世前半のものが多くを占めており、出土状況も混在した状況である。

【堀】(図版39~43、写真図版51・53~59・63・64・75参照)

**堀1西辺** 国化した遺物は①戦国時代～近世初頭のものと②近世のものがある。前者①には土師器小皿167・168、擂鉢173・174・堀175・176、丹波焼壺182・壺231・擂鉢177~181・盤185、備前焼小壺183・壺186・擂鉢184・壺188、瀬戸焼天目碗171・丸皿172、伊万里焼189、唐津焼小碗187・碗191・皿190・192・193、中国產磁器白磁皿169・染付皿170などがある。土師器小皿167・168は糸切り底で体部は直線的にハの字に開く。底径が大きく短い体部をもつ杯タイプのものである。土師器擂鉢173・174はどちらも底部片で内面に刷毛目状の板ナデの痕跡を残す。堀は横ナデによって鶴の痕跡を造り出すもので、176は口縁部端部を斜め上方につまむ。

丹波焼壺182は口縁部を外反させ、外方に面を持つ。擂鉢は178が方形状を呈する口縁部をもつ。乱雜な1本描きの御目を持ち、口縁部内面には御目を区画するラインをもつ。179・181は底部片、180は体部片で180には施印が観察される。壺231は口縁部を外方に折る。185は盤で口縁部を内側に折る。

備前焼は183が口縁部片、184が底部片、186は肩部片、188は口縁部片である。

189は初期伊万里の皿である。小さな高台に淡く青みのかかった釉を掛ける。内面に芙蓉手を簡略化した区画線を入れ、内側に3本の横線を配した模様を描く。

唐津焼は5点国化した。187は底部片である。碗191は削り出し高台でラップ状に開く体部を持ち、口縁部をさらに外反させる。皿190・192・193は3点とも体部中位に段を持つ個体で、砂目である。

②の近世以降の遺物は染付磁器碗194~202・白磁碗203・皿205・染付碗204、陶器碗206~210・皿211・急須212、丹波焼擂鉢220~230・壺232~235、鉢213・214、土師器熔炉216~218、鹿角製品B1がある。194~202は肥前系の丸碗である。201はやや腰が張る個体で外間に2段の網手文を描く。203は波佐見焼の皿で内面底部を釉ハギする。204は壺ないし急須の底部片である。205は見込に五弁花のスタンプ文、体部に宝珠文をもつ。206~210は陶器碗で、208は京焼系のものである。このほか急須212も京焼系の黄みを帯びた胎土に透明釉を施釉する。

丹波焼擂鉢は柳目で220~222が板状の口縁部をもち、内面に御目の区画線をもつ。224~226・227は口縁部を上下に拡張する。227は口縁部外面に四線をもつ。223は口縁部欠くが17世紀代のものである。同じく230は江戸後期の製品である。

213・214は丹波焼の鉢である。213は指頭で体部を押さえて花弁を表現している。215は丹波焼の小鉢である。216~219は炮烙に近い形態で底部を型作りし、これに体部を接合して成型するものである。17世紀後葉~18世紀前半頃のものである。B1は鹿角製の型ヘラで、柄の部分に滑り止めの線刻を入れ、端部に総通し穴がある。

【柱穴】(図版44参照)

P30 土師器壺237が出土した。口縁部の細部で内側気味の体部で、口縁部直下に形散化した鶴を持つ。

【井戸・溝】(図版44、写真図版54・56参照)

SE2 青磁碗242が出土した。底部の破片である。

SE3 丹波焼擂鉢241が出土した。241は1本描きの御目で口縁内面に四線状の区画を持つ。口縁部は

端部を丸くおえる。

【埋桶・土坑】(図版43・44、写真図版56・58参照)

SX1 漢戸焼丸皿238、中国産白磁皿239・丹波焼擂鉢240が出土した。238は小さな高台で口縁部を丸くおえる。239は、中世前半の製品である。240は6本単位で櫛書きの御目、板状の口縁部を持つ。

SK2 土師器小皿243が出土した。極小の手づくね製品である。

SK20 丹波焼壺236が出土している。肩部に輪状の耳が付く。

【包含層・遊離遺物】(図版44、写真図版49・53~56・75参照)

包含層ないし遊離遺物は土器・陶磁器が9点。土製品が5点国化できた。これらは戦国時代~江戸時代初期のもので、土師器小皿244・壺245、丹波焼擂鉢246・247・盤250、備前焼壺249、瀬戸焼天目碗248、中国産染付碗251、管状土錐252、面子254~257がある。

244は底径がやや小さく器高が深い。口縁部を横ナデし端部をつまむもので、外面下半は手づくね後は未調整である。京都系土師器と考えられる。245は鶴が省略されるもので、外面底部下半に右上がりの平行タタキが観察される。戦国時代後半の製品である。246・247はいずれも1本書きの御目を持つもので、戦国時代後半段階の製品である。248は天目鏡の底部片である。249は肩部に波状文を施す小型の壺で、250は盤の口縁部片である。251は粗製の染付碗で内面に花卉文を施す。

近世後期以降のものは陶器皿253がある。内外面に透明釉を外面に施す。また外面にはボタン状の浮文を貼り付ける。この他、時期は不明であるが管状土錐252がある。このほか、土製品254~257はすべて面子である。時期は不明である。

### 3. 4 区

4-1区は堀1東辺とSE4の遺物が中心で、4-2区は埋桶や井戸から出土した遺物が中心である。

【4-1区の遺構】(図版45・46・48、写真図版51・53~56・58・59・61・63・64参照)

堀1東辺 堀1東辺からは戦国時代~近世初頭・近世以降の遺物が出土している。これらは大半が堀底からの出土であるが、両者は堀底も含めて混在するため、堀の埋没時期は近世以降と考えられる。

戦国時代の遺物は土師器皿264・擂鉢258・259・備前焼利260、丹波焼擂鉢273~276がある。近世前期の遺物は唐津焼碗261・皿262・263、丹波焼擂鉢277~282がある。

丹波焼擂鉢は273~276までは御目が1本書きで、このうち276までは口縁部内面に凹線ないし段をもたない。277は口縁部内面に凹線を持つが御目が1本書きで、プロポーションから16世紀末ないし近世初頭のものと考えられる。これに対して、御目が櫛書きで、内面下に段のある278・279・282や、御目が密な櫛書きとなる280は17世紀前半に位置づけられる。

近世以降の遺物は幕末から近代にかけてのものである。染付磁器碗265・267・268・270・皿269、陶器碗266・蓋272、丹波焼擂鉢283、瓦質羽釜271がある。

磁器碗265は白濁した施釉で外面に多重團線と草花文を描く。267は外面に篆の葉文、268は広東碗である。270は外面に井桁文を描く。269は輪花皿であるが近代に下る製品である。内面見込みに草花文を描く。陶器266は京焼風の碗でやや黄身がかった胎土に透明釉を施す。272は茶碗などの蓋で見込みにつまみを持つ。283は口縁部を内傾し、縁帯外面に明瞭な2条の凹線を施す。御目は櫛書きで口縁部内面直下に、御目を施す範囲を画した團線が見られる。下相野窯址のE類に類似する器形であることから18世紀中頃以降のものと評価できる。

**SE 4** 土師器小皿306・壺304・305、備前焼壺307、丹波焼鉢308・擂鉢310・311、唐津焼皿309などがある。306は糸切底である。ハの字に聞く体部をもち、口縁部を丸くおえる。304・305は同一タイプのもので、体部下半を型づくりし、体部上半に2ヶ所の穿孔をもつ。307はハの字に聞く口縁部で壠部は玉縁をもつ。308は鉢である。焼台などの窯道具が流通したものである。309は皿の製品で体部中位に段を持つ。310は口縁部を内傾し壠部上端に凹線を持つ。内面には細い櫻書きの御目が入れられる。311は口縁部が板状になり、端面に凹線が施される。内面には4本単位の幅の太い御目が施される。

【4-2区の構造】(国版47、写真図版48・54・60・64参照)

**SK 1** 丹波焼擂鉢284がある。1本描きの御目を持ち口縁部をやや角ばらせておえる個体である。

**SK 2** 土師器皿286・瓦質土器火鉢285・花生303、唐津焼小壺287、肥前系陶器碗288・肥前系染付皿289・290がある。286は糸切底で薄手のつくりである。285は小振りの火鉢で3足が付く。口縁部を肥厚させ上端に面を持つ。303も瓦質のもので、壠掛け用の花生である。手づくねで角状の形態を持つ。外面上には細かいヘラガキが觀察され丁寧な器面調整をおこなう。287は褐色の鉄釉をもつ。288は半磁器碗で外面に図像化された草花文を描く。289は外面に草花文、内面に印花の五弁花文をもつ。290は内面を蛇ノ目軸ハギするもので、波砂見焼である。ただし、これらの図化したものは近世遺物を抽出したもので、実際の出土品には近代のものが多く含まれる。

**SK 3** 肥前系染付碗293、施釉陶器鉢294がある。293は2重網手文を描く。294は产地不明である。

**SD 2** 肥前系染付碗300、関西系染付碗301、陶器擂鉢297がある。297は内面に回線を施し、回線より下に密な御目を施す。口縁部はやや肥厚し上端に面を持つ。

**SE 6** 施釉陶器302が出土している。伝化器で、濃緑色の施釉を施す。

【包含層】(国版48、写真図版55参照)

図化した遺物は丹波焼擂鉢312がある。体部が外反し口縁部が板状で、内面に凹線を持つ。

4. 5区 (国版49、写真図版48・52・61・62参照)

5区から出土した土器はSD1から出土した土師器小皿321を除くとすべて遺物である。図化した遺物は土師器小皿321、備前焼壺322、丹波焼壺323・325・324などの中世～近世初頭のものと、土師器壺327・331、肥前系陶器碗329・330、染付蓋328、丹波焼擂鉢332・333・壺334、陶器壺326などの近世のものがある。

**SD 1** 321は手づくね皿で在地産のものである。

**【包含層】** 322は縁帯が肥厚し、外面に凹線を持つ。323はN字状口縁部が退化したタイプのもので、福井山窯期に相当するタイプである。324・325は戦国末期ないし近世初頭頃の製品である。

近世の遺物は9点を図化した。327・331は外型で底部を成形した壺で、器形は焰焰へ移行する過渡期のものである。外面のタケキ痕跡はナデ消され、口縁部上端に面を持つ。

碗329は京焼系の模倣品である。皿330は波佐見焼の製品である。328は広東碗などの蓋で内面に四方棒を描く。丹波焼は332・333が口縁部の縁帯が肉厚になるもので18世紀代の製品と考えられる。332は口縁部内面に段を持ち櫻描きの御目を持つ。口縁部は上下に肥厚し上端に面を持つ。334は肩部に最大径を持つ個体で、口縁部上端に面を持つ。肩部から胴部に鉄釉を流し掛けする。胴部には3段の輪積みの跡が觀察される。18世紀代前半のものである。326は产地不明である。

## 5. 6 区

6区では須恵器・土師器の細片が多く出土したものの、図化できるものは少ない。出土したものは須恵器壺・皿・鉢・土師器皿・壠などの13~14世紀前後のものが中心である。

【遺構】(第47図、写真図版45・54・56参照)

SE11 土師器壺295、丹波焼搖鉢291・296、窯道具298、瀬戸焼天目碗292などがある。

295は鈴が形骸化し痕跡のみを残す。291は口縁部を尖り気味におえる戦国期のものである。296は口縁部をやや丸くおえるが291と同じ時期のものと考えられる。292は瀬戸の大窯期の製品である。298は胎土から丹波焼と思われるが窯道具と考えられる。

SD5 須恵器皿299、底部糸切りで、内溝しながら立ち上がる体部で口縁部は丸くおえる。13世紀代のものである。

【包含層】(図版48、写真図版45・53・54・56・61参照)

図化した遺物は丹波焼搖鉢313・314、備前焼壺315、土師器羽釜316・壠317・318、唐津焼皿319、肥前系磁器碗320がある。313は口縁部を尖らせ氣味におえる。内面には1本書きの御目がやや密に入り、×印の窓印が観察される。314は口縁部が断面三角形で上方に尖り気味でおえ、体部が内弯気味に立ち上がる。315は備前焼の壺の肩部である。細線の波状文を施し、胎土は田土である。16世紀代のものと推定される。316は板状の鈴を持つ羽釜で、外面にわずかに左上がりの平行タタキが観察される。317・318は甕型の製品で、くの字に折れる頸部から口縁部を外反させておえる。外面には右上がりの平行タタキ、内面には同心円のあて具痕跡が観察される。318は板ナデの痕跡が観察される。319は唐津焼で砂目のトチン痕跡をもつ。320は近世後半のもので内面の口縁部に四方襷、見込に花文、外面にも花文を施す。

### 第3節 瓦類

瓦は戦国時代のT 1～T59・T111・113と、近世のT60～T110に分けられる。ここでは戦国時代と近世以降の瓦を分けて記述をおこなう。今回の調査で出土した瓦はコンテナ100箱前後で、2区のSD 6上層、SK 9およびその周辺や粘土採掘土坑、3区の堀1西辺に集中的に出土する。中世の瓦は主として2区のSK 9からのものが多く、近世の瓦は3区堀1西辺や、2区粘土採掘土坑などを中心とする。

#### 1. 戦国時代の瓦

戦国時代の瓦は基本的に軒丸瓦中世Aタイプと軒平瓦中世Aタイプがセットとなると考えられ、数量の上でも主体を占める。この他、軒丸瓦で珠文の多い軒丸瓦中世Bタイプや、軒平瓦中世Bタイプのように唐草の末端が上側に巻くタイプのものが少量混じる。さらに、鳥糞の下部に取り付けられる鶴口であるT111、隅軒瓦であるT42などがある。

##### 【軒丸瓦】(図版51～52・73・74、写真図版66参照)

軒丸瓦中世AタイプはT 1～12、104の13点を図化した。豊地城跡の中世瓦の主体となるタイプである。巴は左巻きで珠文は18個である。出土した軒丸瓦AタイプはT 8が最も良好に残される。T 8の直径は14.4cm、周縁の幅は1.6～1.8cm、周縁の高さは1.4cmで、瓦当面の文様は肉厚で明瞭である。

巴文は尾部が末端で接合するが、完全な正円とはならず尾部の接合箇所でやや歪みを持つ。その場所がT 8では右下や上になるが、T 7では左上になる。また、珠文の間隔も一定ではなくばらつきが認められるとともに形状も一定ではない。基本的には背が高く突起状になるが範製作時の状況によって若干差異がみられる。T 3 左側珠文には范傷が残るが他のものには観察されない。

筒部は凸面を細かくヘラミガキし、凹面にはコビキ(コビキA)痕跡が残される。さらに、筒部側面は幅広く面取りされる。T 7・8では布目痕跡も観察される。またT 12には玉縁に釘穴が穿孔される。

軒丸瓦中世BタイプはT112の1点がある。巴の基部は離れており周間に密な間隔で珠文が配される。

##### 【軒平瓦】(図版58～62・73、写真図版68・69参照)

軒平瓦は2タイプがある。軒平瓦中世AタイプはT25～45・105の22点を図化した。平瓦部が残されるT25でこのタイプを観察する。法量は横幅25cm、縦幅4.3cm、周縁は上1.2cm、下0.9cm、側面右側が2cm、左側が1.9cmで、高さは0.7～0.9cmである。

中心飾りは花芯と左右に2枚の花弁が広がるもので、両側に唐草を3反転する。唐草の末端は下側、上側、下側の順で巻く。ただし、左側は唐草の2葉目が1葉目の巻きの頭に繋がるのに対して、右側はより内側に接合部を持つ。周縁は明瞭で瓦当面との段差は0.9cm前後を測る。凹面は密なヘラミガキで器面調整をおこなう。

軒平瓦中世BタイプはT46・47の2点がある。何れも瓦当の左端の破片である。中心飾りは不明であるが、唐草の巻きが逆転したもので、上→下→上の順で巻き、端部を玉状にする。整形や調整はAタイプに類似する。

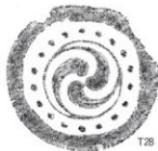
##### 【面戸瓦・鬼瓦】(図版64、写真図版70参照)

T58は鬼瓦の細片である。T59は面戸瓦の破片である。凸面のミガキが丁寧におこなわれている。

##### 【丸瓦】(図版52～58、写真図版67参照)

丸瓦はT13～T24の12点を図化した。コビキAで放射線状のコビキ痕跡を明瞭に残す。ただし、T13の

<中世>



軒丸瓦中世Aタイプ



軒丸瓦中世Bタイプ



軒平瓦中世Aタイプ



軒平瓦中世Bタイプ

<近世>



軒丸瓦近世Aタイプ



軒丸瓦近世Bタイプ



軒丸瓦近世Cタイプ



軒丸瓦近世Dタイプ



軒丸瓦近世Fタイプ



軒丸瓦近世Eタイプ



軒平瓦近世Aタイプ



軒平瓦近世Bタイプ



軒丸瓦近世Gタイプ



軒平瓦近世Cタイプ



軒平瓦近世Dタイプ

第32図 出土瓦型式分類

みはコビキ痕跡が観察されず布目痕跡が顕著に残る。凸面は縦方向の密なミガキ痕跡が観察され、凹面の面取りは側面と端面に幅広に施される。側面で2~3cm前後、端面で3~6cm前後である。玉縁は幅2.8~3.5cmで、筒部との段差は1.2~2.0cm前後を測る。胎土は精良であるが砂粒が比較的多く見られ、焼はやや浅いものやムラのあるものが目立つ。さらに、T14・15では左下がりかつ、幅広で明瞭な同心円を描くコビキ痕を残す。T16・17も明瞭で幅広な同心円で、T16は左上を中心点とし、T17は右下を中心点とする。T18Cでは上方が平行に近く、下部で右を中心点とする同心円を描く。T19では左下を中心点とし、幅広で明瞭なコビキ痕跡を残す。T20・21・23は右上を中心点とする幅広で明瞭なコビキ痕跡となる。T22は右下を中心点とし、やや薄いコビキ痕跡を残す。T20は釣り繩痕をもつ。

#### 【平瓦】(図版63~64、写真図版70参照)

平瓦はT48~57の10点を図化した。平瓦は破損が著しく図化できる個体は限られた。基本的に凹面のミガキ調整は丁寧である。凸面は型抜き後未調整であるが部分的にナデ調整をおこなう。

## 2. 近世の瓦

近世瓦は多くの范を持つ軒瓦が確認されている。時期的には17世紀後半~18世紀前後のものと考えられる。出土した瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦などがある。

#### 【軒丸瓦】(図版65~67、写真図版71・72参照)

軒丸瓦は7タイプがある。T60~T82を図化した。軒丸瓦近世Aタイプは珠文が16個のものである。軒丸瓦近世Bタイプは珠文が15個のものである。軒丸瓦近世Cタイプは珠文が14個のものである。軒丸瓦近世Dタイプは珠文が13個のものである。軒丸瓦近世Eタイプは珠文が12個のもので、巴が右巻きのものである。軒丸瓦近世Fタイプは珠文が12個のもので、巴が左巻きのものである。軒丸瓦近世Gタイプは珠文をもたないものである。

#### 【軒平瓦】(図版70・71、写真図版73・74参照)

軒平瓦は4タイプがある。軒平瓦近世AタイプはT88~90の3点がある。中心飾りが幅広で短い2葉で、茎が表現される。唐草は2反転で上から下向きに巻く。T90は范を外した後、瓦当面を板状の工具で擦った痕跡が残される。周縁の輪は3cm前後と短く、高さは4.1cm前後で比較的高い。

軒平瓦近世BタイプはT91・92の2点がある。中心飾りが逆三角形で左右がハの字に開き、唐草は2葉、両端は巻かない。

軒平瓦近世Cタイプは大阪式軒平瓦でT93がある。中心飾りの中央が銀杏の葉様の文様で、左右が2股に分かれるが、萼は2股に分かれていない。唐草は左右3葉で構成されるが2・3葉目が巻かず、2葉目は先端で2股に分かれる。萼先端が2股に分かれるのは元禄期(1688~1704)ごろとされるので、それ以前のものと評価できる。

軒平瓦近世Dタイプは橈瓦である。文様から大阪式軒平瓦でT94・95の2点がある。中心飾りの中央が織文の定型化したものとなる。中心飾りの左右および萼は2股に分かれる。唐草は左右2葉で構成され先端が巻かずで2股に分かれる。T95の左側には丸瓦の貼り付け痕跡であるカキ破りが観察される。

#### 【丸瓦・平瓦】(図版68・69・71・74、写真図版74参照)

丸瓦はT83~87の5個体を図化した。中世瓦に比べ軽量で小型のものである。コビキ痕跡は鉄線挽き(コビキB)で、布目痕跡が残される。さらにT85には吊り紐痕跡が観察される。

平瓦はT96~98・113の4個体を図化した。丸瓦同様、中世瓦に比べ軽量で小型のものである。

#### 【菊文瓦・面戸瓦・鬼瓦】(図版72、写真図版72・74参照)

そのほかの瓦ではT99～101は菊文瓦、T102は面戸瓦、T103は鬼瓦の破片である。

### 第4節 金属製品 (図版75、写真図版75参照)

鉄製品は16点を図化した。出土した製品には釘・鑿・輪状製品・煙管・不明品などがある。

釘 M1・9は頭部を欠損するので不明であるが、M2・3・5は頸巻釘、M6・7は巻頭釘、M4は皆折釘である。いずれも断面が方形の和釘である。M9は基部での太さが0.8cmと大型のものである。

鑿 M8は幅広で長方形断面を持つ製品で頭を叩いて折り曲げる。鑿としたが小さいものである。

輪状製品 M10は輪状の製品であるが半分を折損する。M12も環状の製品であるが一部を欠く。

煙管 M14・15は煙管である。M15は雁首、M16はラウと吸い口である。

不明品 M11・13も鉄製品であるが詳細は不明である。

### 第5節 石製品

#### 1. 石造品・石材 (図版76～78、写真図版76～78参照)

石製品は墓石・方形石材を中心に各地区から出土している。出土した石製品には砾石・宝鏡印塔・五輪塔などの墓石や石臼・硯・方形石材(切り出し石材)がある。出土地区については2区からは五輪塔S1・2、石臼S4・方形石材S6が出土した。3区からは五輪塔S10、石臼S11、石臼S3・5・12、方形石材S7、硯S8、4区からは方形石材S19・21、5区からは宝鏡印塔S9、石臼S12・13・14、6区からは方形石材S15～18・20などがある。

硯 S8は安山岩製のもので、小型の硯である。中世段階に事例が多いもので、海の部分を欠く。残存長が4.05cm、最大幅0.95cmの小型のものである。いずれも使用痕跡が顕著で摩耗が著しいため、使用後に廃棄されたものと考えられる。

墓石・石臼 五輪塔はS1・2・10の3個体がある。すべて花輪で凝灰岩製のものである。3個体とも天井部に差し込み穴をもつ。石臼はS11の仮の詳細は不明であるが下部の受葉のみが残される。宝鏡印塔はS10の1個体で花崗岩製のものである。図化したものは基礎石材で各側面に格狭間が刻まれ、上面には蓮弁が陽刻される。また、上面には塔身を受けるための柄穴が穿たれる。

石臼 S3～5、S12～14の6個体がある。S3・5・13・14が上臼、S4・12が下臼である。

方形石材 S4・5～7・15～20の9個体がある。すべて池田石製(凝灰岩)のもので製品加工のために切り出された石材と思われる。各石材とも表面に細かなミ痕跡が残され、切り出し加工の後に表面を調整している。S7・17・20は面の内側を僅かに窪める。これらの石材は石臼や墓石などを加工するための原材料となるものと推定されるが、礎石や井戸側に転用されるなどしていた。

#### 2. 石器 (第33図、写真図版75参照)

豊地城跡では、合計13点の石器類(碎片等を含む)が出土している。ここでは、そのうち定型の石器として分類されるもの3点を図化して記載する。

### 【石器】

S22はサスカイト製平基式石器である。左右非対称形をなしており、一側縁がほぼ直線的に仕上げられているのに対し、もう一方は器長中央よりやや先端寄りで屈折する。二次加工は縁辺に限定されており、特に左図左側縁はごく薄いためか、片面側から細かな整形をおこなうのみである。表裏ともに中央部に大削離面をとどめており、左図中央はポジティブな削離面である。2区のP38より出土した。長さ18.7mm、幅12.9mm、厚さ2.5mm、重量0.6gである。

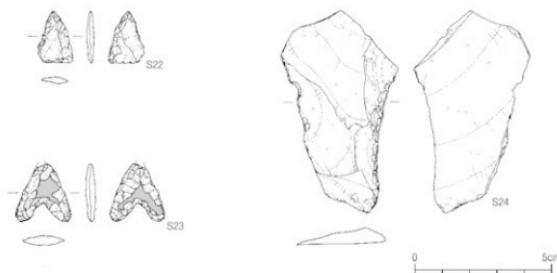
S23はサスカイト製凹基無茎式石器である。極度に風化が進行し、削離痕の棱線の観察も困難をきわめる。特に器体中央部は、両面とともに風化と摩耗が著しい。両側縁はほぼ直線的に整形され、基部の抉りは、器長の1/3前後を示す。なお、先端部は新しい折損である。2区のSD12より出土した。長さ21.0mm、幅20.2mm、厚さ3.5mm、重量1.1gである。

### 【削器】

S24はサスカイト製削器である。削離軸が傾いた削片を素材とし、その一側縁に腹面側から細かな二次加工を施して、緩やかに内弯する刃部を形成している。これと相対する削片末端側には、刃こぼれ状の、不規則な細かい削離痕が並ぶ。素材となった削片の打面部は、折断されている。背面側は腹面側と同一打面からと推定される削離痕とともに、削離軸が腹面側と斜交する削離痕、同じく直交する削離痕などが認められることから、本削器の素材削片は、打点を転移させながら剥離する工程によるものと思われる。3区のSK9より出土した。長さ73.5mm、幅43.0mm、厚さ6.4mm、重量16.2gである。

### 【その他】

上述の定型的石器以外に、二次加工のある削片1点、碎片8点、削片1点が出土している。石材は、削片1点がチャート製であるほかは、いずれもサスカイトである。二次加工のある削片は、削片の一端に鋸歯縁状の二次加工を施したものである。また碎片のうち1点は平坦な打面と、底面をとどめ、急斜



第33図 豊地域跡出土石器

度の剥離をおこなったことが明らかなものであり、一見、後期旧石器時代のナイフ形石器の二次加工に伴うプランティング・チップを想起させるものである。

農地跡で出土した石器類は、いずれも原位置を遊離した出土状況を示す上、数量が少ないことから、全体として評価することはできないが、図示した定型的石器を見る限り、縄文時代の所産と考えて大過ないだろう。

## 第6節 木製品

記述については、木器の器種等を中心とする。法量等、樹種名等については出土遺物観察表を参照されたい。

【2区】(国版79・82~87、写真国版79・82~88参照)

**SK 9** W1は、棒状木製品である。一部に加工痕を残す。W2~W4は桶のくれ板である。W5は木端である。W6は角材である。

**SD 4** W41は、断面長方形状の板材である。W42・W43は板材である。W44は、丸太材である。一端を加工して、杭状を成す。W45は、カケヤーの一部である。柄を挿すための長方形状の溝穴が穿たれたる。W46は、大型の角材である。一ヶ所に長方形状の溝が穿たれており、建築部材と考えられる。W47は、カケヤーの一部である。柄を挿すための方形状の溝穴が穿たれたる。W48は、端部付近に括れを持つ、断面円形状の棒である。丁寧な加工痕が認められる。

**SD 6** W49は、完形の木筒である。長方形の板目材の上端を圭頭にしたもので、上端の幅がやや広く、中ほどに釘跡が残される。表面に墨痕が見られるが、著しい風化により墨痕のみが浮き上がって残存している。以下の篆文が認められ、不明ながら認められる年号の「文明六年」は、1474年である。

【梵字】 □ 不動ヶ譲摩八千枚ヶ□也カ 文明六年  
九月廿九日

W50は、漆器椀である。外面に黒漆、内面に赤漆、外面に赤漆で円形の紋を施す。W51は、漆器椀である。外内に黒漆、外面に赤漆で円形の紋を施す。底部外面上には「×」字の刻みを持つ。W52は、漆器椀である。外面に黒漆、内面に赤漆を施す。W53は、外面に朱印を持つ曲物である。全体に拉げているが、底板が梢円形であることから、元来梢円形状であった事が窺え、朱印を明示するために、より平滑な面を持った梢円形としたものとも考えられる。朱印自体の判読には至っていないが、この曲物は朱印を収納していた印箱であった可能性が高い。W54①~④は、柿葺材と考えられる薄板である。端部、中ほどに数箇所の釘穴状の小孔を有す。W55は、柿葺材と考えられる薄板である。W56は、断面台形状の薄めの板である。平面に一ヶ所、側面に二ヶ所の釘穴が残る。W57は、折敷の一端である。W58は、断面長方形状の薄めの板である。数ヶ所に釘穴が残り、容器類の一部と考えられる。W59は、足打折敷脚部である接合部に合計五ヶ所に釘穴が残り、小孔には棒が埋められている。W60は、断面台形状の板材である。一端をやや面取りをしており、もう一端に圓孔を持つ。W61は、断面台形状の板材である。W62①~④は、橋の側板である。それぞれに釘穴が残存し、底板はないものの組み合わせが可能である。W63は、桶のくれ板である。W64は、先端がやや丸みを帯びた薄板である。W65は、柿葺材と考えられる薄板である。W66は、断面長方形状の角材である。丁寧な加工痕が認められる。W67は、柱材の切り落とされたものと考えられる。全面に丁寧な加工痕が認められ、何かの転用があったとも考えられ

る。W68は、半切された丸太材と考えられる。W69は、角材の一部である。W70は丸太材の端材部分である。W71は木端である。W72は小型の丸太材の一部である。杭状のものと考えられる。W73は幅の狭い薄めの板である。木筋の可能性も考えられるが、不明である。W74は丸太材の一部である。切り落とされた枝部が残る。W75は丸太材である。W76は、橋脚材と考えられる。下部の先端となる部分は丁寧な加工痕が認められる。W77は漆器皿である。外内面に黒漆が施され、内面に紋の痕跡があり、赤漆と考えられる。蓋の可能性も考えられる。W78は、曲物の底板の一部である。W79は、ぎっこうの玉である。球体にするために上部、下部を面取りにより丁寧に加工している。W80は、桶のくれ板である。W81は、板材の破片である。W82は、断面長方形状の板材である。W83は、断面台形状の薄めの板材である。W84は、板材の破片である。平面形が三角形状になると考えられる。W85は、丸太材である。ほげ中央に方形状の勝穴が穿たれ、建築部材と考えられる。W86は、断面方形だと考えられる角材である。W87は、丸太材の破片である。建築部材の一部と考えられる。W88は竹筒である。一端を斜めに切断している。

【3区】(国版79~82、写真図版79~82参照)

SE 2 W7は柄杓の柄の部分である。W8は加工痕があるが、用途不明である。W10は歯の一端と考えられる。柄押し孔の一部が残る。

SE 3 W9は紡績具の一部とみられる。断面方形で輪状を成す。W11は薄い板材である。W12はやや加工痕を残す丸太材である。

堀1西辺 W13は建築部材の角材である。一部に勝組みに部材が残る。W14~W17は柿葺材と考えられる薄板である。W18~W19は、柿葺材の隅木と考えられる薄板である。W20は、柿葺材若しくは曲物の一部と考えられる薄板である。W21は薄板である。W22は、用途不明の板である。片側が薄くなり、刃状を成す。W23は、柿葺材の隅板と考えられる薄板である。W24は、端部が極薄くなる薄板である。W25は、クサビ状の木材である。W26は、断面長方形状の角材である。片面に長方形状の浅い抉りを持つ。W27は、断面長方形状の角材である。全面に丁寧な加工痕が認められる。W28は、断面方形状の角材である。一ヶ所に長方形状の勝を持つ。柱材の一部と考えられる。W29は、断面長方形状の小型の角材である。丁寧な加工痕が認められる。W30は、木端である。W31は、欠損が激しいが大型の角材である。柱材の一部と考えられる。W32は、両端とも欠損する丸太材である。杭状のものと考えられる。W33は、半切した細い丸太材である。何かの柄の一部とも考えられる。W34は、桶のくれ板である。W35~37は桶板である。側部二ヶ所に木釘が残存する。W38は、円形の板材である。W39は、漆器の指物である。内面二ヶ所に木釘が残る。外内面には赤漆、内面の一部には黒漆を施す。W40は、両端付近に括れを持つ、断面円形の材である。把手の一部と考えられる。全面に丁寧な加工痕が認められる。

【4-1区】(国版88~90、写真図版90参照)

SE 4 W89~W90は曲物の底板である。両面に丁寧な加工痕が認められる。

堀1東辺 W98は断面長方形状の薄めの板材である。数ヶ所に木釘が残り、容器類の一部とも考えられる。W99は、方形状を呈する、小型の橋の底板である。合計七ヶ所で木釘が残る。W100は、漆器重箱の側板である。漆自体は剥がれており色等は不明である。組み合わせ部分には木釘が残り、その部分の状況から、漆塗布後に別の部材と組み合わせた事が窺える痕跡を残す。W101は、杓文字である。完形であり。丁寧な加工痕が認められる。W102は、箸である。W103は、連歛下駄である。歯は削り出した一体型で、非常に良く磨り減っている。鼻緒の紐通し孔は方形で、その他の二ヶ所は円形を呈する。W104

は、中割りの下駄である。W105は、紡錘車の一部である。W106は、用途不明の板材である。丸みを帯びた外縁に当たる部分が細身になっており、桶の底板の一部に当たると考えられる。W107は、断面長方形形状の薄めの板材である。両端部は欠損している。中ほどに円孔を有す。W108は、用途不明の板材である。両端部付近と、中ほどの合計三ヶ所に釘穴が残る。W109は、木桶の一部である。合計三枚の板材の組み合わせで箱状の構としている。組み合わせは、底板の側面に側板を合わせて鉄釘で打ちつける一方で、底板の反対の面には釘穴が残っている事から、底板上に側板を設置し、下面から鉄釘で打ち付けたものと考えられる。

【4-2区】(図版89参照)

埋桶 3 W95は桶の底板の一部である。

【6区】(図版88・89、写真図版89参照)

SE10 W91は杭である。W92は杭である。W93は、杭と考えられる。下端部は欠損している。W94は杭である。全体に枝跡が残り、下端部を丁寧に加工している。

SD 1 W96は漆器椀である。底部は欠損している。外面に黒漆、内面に赤漆を施す。

SD 5 W97は板材である。

引用文献

栗園実 2000「備前焼」「中近世の備前焼振鉢の編年案」『第3回中近世備前焼研究会』

山崎信二 2008「近世瓦の研究」

別府洋二 2011「農地道路」「木簡研究」33号

## 第5章 岡遺跡の調査成果

### 第1節 概要

岡遺跡は豊地城跡の東側の台地上に立地し、標高約73mと豊地城跡主郭部より比高が高い。検出された遺構は平安時代末から中世前半にかけての掘立柱建物や溝、土坑と、近世の耕作地に伴う石組遺構(SX1)などがある。岡遺跡は、南の山裾から北へと広がる台地上に広がるもので東側を大畠川への崖地形で限られており、西側は豊地城跡6区が立地する解析谷で画されている。

この遺跡では中世前半の遺構・遺物が広く検出されたことから、広範囲に集落が広がることが明らかになった。この他、当遺跡から出土した遺物の中には古墳時代後期の須恵器も見られることから、同時代の遺跡も近辺に存在した可能性がある。一方、豊地城跡周辺でも中世前半期の遺構・遺物が認められるので、岡遺跡を含めて東条川南岸の台地上に東西約1kmの範囲に平安時代末から中世前半にかけて広範囲に集落跡が存在したことが推定される。このことから見ると、この集落域の一帯に中世後半期なつて豊地城跡が築かれたことが推測される。

### 第2節 調査の成果

#### 1区 (図版28、写真図版42・65参照)

1区では東端部で幅約130cm、深さ約45cmのSD3が崖に沿うように検出され、土師器壙335・336、須恵器壙337が出土した。

また、掘立柱建物2棟(SB1・2)が確認されたが、後世の削平により残存状況は著しく悪い。ただし、柱穴から出土した遺物や包含層出土遺物からみて13世紀頃のものと考えられる。固化できた遺物はSD3から出土したものと包含層出土の古墳時代の須恵器杯身343がある。343は底部回転糸切りで6世紀後半のものである。

#### 【掘立柱建物】(図版29、写真図版42参照)

**SB1** 調査区の西寄りで検出された建物で、南北4間×東西3間(6.9m×5.3m)、東側に庇が付く。身舎に東柱が検出されなかつたが、周囲は削平が著しく側柱構造であったかどうかは結論できない。庇部分も含めると建物の面積は46.27m<sup>2</sup>である。建物は南北を軸とするが、N11°Eを向いて建つ。

SB2も含めて全体的に柱穴の削平が著しく残りは良好でない。

**SB2** 調査区中央付近で検出された建物で、SB1とは9mの距離がある。建物は南北2間×東西2間(4.7m×4.5m、面積21.1m<sup>2</sup>)の規模を持ち、N19°Eを向いて建てられる。東柱が検出されたので総柱構造と評価できる。南辺中央の柱穴を欠くが、削平で喪失したものと考えられる。

#### 【溝】(図版29、写真図版42・65参照)

**SD3** 調査区の東北端で検出された溝である。北西方向から南東方向に流下する。幅1.2m、深さ0.5mで調査区の隅をかめるように検出された。内部からは土師器壙335・336、須恵器壙337が出土している。土師器壙は頭部がくの字に折れ、体部外面にやや細かな左上りの平行タタキが観察され、内面にはわずかに当て具の痕跡と板ナデの痕跡が確認される。須恵器壙は口縁部のナデが省略されたもので体部

も直線的な器形となる。

## 2区 (図版30・50、写真図版43・44参照)

2区は1区の西側、豊地城跡6区との間に位置する。1区と同じ台地上位面の北縁辺部に位置する。このため調査区の西側は段丘の傾斜面にあたり、圃場整備によって盛土造成がおこなわれていた。

柱穴の集中部が2ヶ所程度認められ、掘立柱建物が存在したようであるが、調査範囲内では復元できなかった。このほか近世の耕作地に伴うと考えられる石組をもつSX1が段丘斜面下で検出された。この土坑は内部に人頭大の石材が多量に検出された。水田からの排水を中継するための機能を有した土坑と推定される。このほか、調査区西端の段丘下は近世以降の遺構が検出されたが、中世前半期や戦国時代の遺構は検出できなかった。遺物はSK1・SX1および包含層から土師器壙338・339・342、丹波焼擂鉢340、中国産青磁碗341、同白磁碗344が出土している。340は口縁部端が内側に軽く折れる。

### 【土坑・溝】(図版31・50、写真図版43・44参照)

**SK1** 調査区の東端で検出された土坑で、平面不定形を呈する。北側の段丘課に向けて深くなるため、谷状の窪地の可能性がある。内部からは土師器壙338・339が出土している。14世紀頃の製品である。

**SX1** 方形の土坑で長軸2.1m、短軸1.47m、深さ0.5mを測る。北側に土坑からの排水のための溝が付属する。この溝は北側の段丘下へと流れている。出土遺物のうち土師器壙342を同化した。14世紀頃のものである。

**SD2** 2区の西側、段丘の傾斜変換点付近で検出された溝で、規模は幅0.7m、深さ0.2m、検出長5mである。東側に柱穴群が集中して検出されているので屋敷などの区画溝の可能性があるが、調査区の範囲内では結論できなかった。出土遺物は土師器細片があるが器種は不明である。

## 第3節 まとめ

同道路は標高72m前後の段丘平坦面に立地する中世集落遺跡である。検出された遺構は掘立柱建物を中心として13~14世紀ごろの集落に関わるもののが中心であった。

今回の調査区はこの同道路の北端を東西に横断するもので1・2区合わせて長さ約155m、幅7~12mの範囲に及んでいる。一方、この遺跡で今回検出された集落遺跡は豊地城跡側でも検出された中世集落と同時期のものである。このため、東条側左岸の段丘上には広く集落道路が展開することが明らかとなった。これらの集落の14世紀以降の痕跡は調査区の範囲内ではたどれなかつたが、包含層などに若干遺物が混じることを考慮するならば、集落は場所を移動しながら継続した可能性が高いとみるべきであろう。

## 第6章 分析

### 豊地城跡出土木製品の元素マッピング分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

#### 1. はじめに

小野市中谷町に所在する豊地城跡は、東条川に面した河岸段丘上に立地する播磨の拠点城郭である。豊地城は、依藤氏により戦国時代の初め頃に築城され、永禄年間（1558～1570年）には依藤氏は滅ぼされて別所重棟が城主になり、天正8年（1580年）頃まで存続したといわれる。

豊地城の西側の郭で検出されたSD 6 からは、朱印の押された曲物が出土している。ここでは、この朱印について、蛍光X線分析装置による元素マッピング分析を行い、顔料の種類および朱印の判読を試みた。

#### 2. 試料と方法

分析対象は、SD 6 より出土した曲物である。SD 6 からは他にも多数の遺物が出土しており、文明6年（1474年）銘が確認された木簡も出土している。

分析対象の曲物は、保存処理前であり、水漬け保管されていた。一般に出土木材は、乾燥すると収縮、変形が起きるため、測定においても、通常の遺物測定とは異なり、常に湿潤状態を保ちつつ測定する必要がある。特にマッピング分析は測定に時間がかかるため、保湿対策が重要な課題となる。そこで対策として、アクリル製のトレイにキュプラ製ワイヤーを敷き詰めて水に浸し、その上に試料をセッティングした。さらに粉末試料や液体試料等の蛍光X線分析に用いられるポリエチル製のマイラーフィルムで遺物およびトレイ内を覆った。この状態で経過を観察し、保湿状態の長時間の維持が可能であることを確認した。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000T type II を使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム（Rh）ターゲット、X線ビーム径が10μm、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）で、検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）である。また、試料ステージを走査させながら測定することにより元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析も可能である。

今回の分析においてこの装置を使用することの利点は、大気中の測定が他の装置よりも比較的有利に行える点である。本来、蛍光X線分析は、試料室が真空環境下である方が大気の影響を受けず感度が良い。しかし、出土木製品の測定にあたっては、当然のことながら乾燥しないように試料室を真空にせず大気環境下で測定する必要がある。この装置は、一つは分析プローブ内のみを真空にする方式であることと、もう一つはX線の照射に、X線の輝度の低いコリメータ方式ではなくキャビラリ方式を採用しているため、高輝度のX線が得られることから、大気中でも大気の影響を最小限に抑えての測定が可能である。また、キャビラリの種類も、焦点から外れると空間分解能が大幅に劣化するポリキャビラリではなく、X線ビームの広がりの小さいモノキャビラリを採用していることも、分析試料が平坦であるとは限らない、遺物のマッピング分析に最適といえる。

元素マッピング分析に先立ち、朱印に使用された顔料の種類を特定するべく、点分析を実施した。点分析の測定条件は、50kV、0.14mA、測定時間500sである。元素マッピング分析は朱印の押された面

全体の測定と、朱印部のみの測定の2回実施した。なお、2回目の元素マッピング分析は、遺物への負担を考慮し1回目の測定後に連続してはおこなわず、いったん水漬け保管して数日後に再び試料台にセットして測定した。元素マッピング分析の測定条件は、全面の測定は50kV、1.00mA、測定時間4500sを15回走査、朱印部の測定は30kV、1.00mA、測定時間10000sを12回走査とした。

### 3. 分析結果および考察

顔料の点分析により得られたスペクトルおよび半定量分析結果を第34図に示す。分析の結果、硫黄(S)、カルシウム(Ca)、鉄(Fe)、水銀(Hg)が検出された。水銀と硫黄が検出されたことから、硫化水銀(HgS、鉛名辰矽)、すなわち水銀朱の使用が確認された。

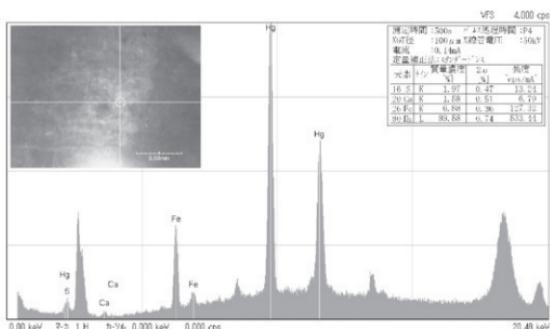
元素マッピング分析により得られたケイ素(Si)、リン(P)、硫黄、カリウム(K)、カルシウム、マンガン(Mn)、鉄、水銀(M線とL線の2図)、その他(background)および透過X線像を、朱印の押された面全体について図版1に、朱印部のみについて図版2に示す。硫黄と水銀が朱印に伴って分布していることがわかる。特に、水銀のL線はエネルギーが高い分減衰率ににくく、X線強度も強かったため、硫黄・水銀M線のマッピング図では見えづらい箇所でも感度良好く検出することができた。また、リンのマッピング図においてもぐわざかながら朱印に伴う分布が見られた。一方、点分析ではベンガラの主成分である鉄も多少検出されるが、鉄のマッピング図を見ると明らかなように、朱印に伴っての分布はしておらず、基本的に顔料由来の鉄ではないといえる。

#### 4. おわりに

豊地城跡より出土した曲物に押された朱印について元素マッピング分析を行った結果、水銀朱の構成元素である水銀、硫黄の分布が認められた。

#### 参考文献

中井 寛嗣 2005 量子X線分析の実際 242p 朝倉書店



第34図 朱印の蛍光X線分析結果

## 第7章　まとめ

### 1. 豊地城跡の検討

豊地城跡の調査では、2～5区の東西250mに渡って城跡の東西方向を確認した。さらに、6区でも戦国時代の遺構が検出され、関連した施設の存在が明らかになった。ただし、城跡遺構の遺存状況は良好とは言えず、検出された遺構は限られる。具体的には2区のSD4～6の3本の堀と、3・4区の堀1（3区は堀1西辺、4区は堀1東辺）があるのみである。これに対して、戦国時代の土器・陶磁器の分布範囲は2～6区に及んでおり、広い範囲に当該期の生活痕跡を確認することができた。一方、瓦では2区のSK9などを中心に城跡関係のものが集中して出土する。これは、小野市教委1980年度c調査の成果に整合するものである。ここでは、これらの調査成果を踏まえて豊地城跡の構造について検討をおこなう。

#### 【調査成果】

今回の調査では次のことが明らかになった。①古屋敷を囲む堀1の時期と性格が判明したこと。②西側の堀（SD6）出土土器群から16世紀前半の城郭の様子（依藤氏段階）が明らかにされた。③戦国時代後半の遺物が2～6区に出土することから、全域に当時の生活痕跡が残されていることが確認された。④瓦の出土は2・3区に多いが、中世瓦に関しては2区に集中することから、織豊期の主郭は城烟周辺を想定できる。⑤2～4区の郭内部と思われる場所から建物などの施設が検出されないことから、近世以降の開墾に伴う削平が広範囲かつ大規模であったことが推測された。⑥一方で同遺跡も含めて広い範囲で中世前半の集落が確認された。などの点があげられる。

出土遺物は土器類・備前焼・丹波焼・中国産磁器・瀬戸焼などの製品が出土した。この中で一括性が高く、多くの出土量を持つのがSD6である。この堀からは既述のように京都系土器類小皿・皿を中心とする土器・陶磁器と共に、文明年間の年号を持つ木簡などが出土している。特に遺物群は、堀南半の下層遺物である、腐食土の堆積が顯著な③・④からのものが多くを占める。これらのうち京都系土器類小皿・皿や、備前焼標の年代記からすると下層の遺物は16世紀前半のものと考えられる。ただし、土器類には15世紀台後半のものが含まれ、幅を持って考える必要も残されている。これに対して堀の上層出土遺物は16世紀中ごろ～後半のものが含まれるので、SD6が埋没したのは16世紀の中ごろ以降と考えられる。さらに、最上層の堀周辺では16世紀後半の遺物や瓦などが理立てに使われているため、戦国時代後半まで軟弱な場所ないし窪んだ場所であったと考えられる。

一方、堀1では戦国時代の遺物も多く含まれるが、17世紀前半の唐津焼や初期の伊万里焼、さらに江戸時代後半の遺物も多い。特に堀下層では戦国時代と17世紀代の遺物が混在するので、堀の堆積が進むのは江戸時代初期と考えられるが、完全に埋まるのではなく、近年までその痕跡は留めていたと思われる。

一方、土器・陶磁器全体を通してみると、戦国時代の遺物では丹波焼のほかに、備前焼の出土量が多いことが注目され、両者は量的には拮抗するとみてよいだろう。さらに、備前焼は豪・徳利など比較的器種が豊富なことに比べると丹波焼はやや地味な印象を持つ。ただし、本城が立地する東条谷を流れる東条川は源流が丹波焼の生産地である立杭に発する。このことから見ると丹波焼の产地に直近の場所であるものの備前焼の浸透力が優っているとみたほうがいいだろう。

ただし、土器組成全体から見ると貿易陶磁器や瀬戸焼は少なく、バラエティーに富んだ器種構成とは

言えない。また、高級品や嗜好品の類が殆ど含まれず城跡の中核部としてはやや違和感の残される状況である。調査箇所の位置づけを考えるうえでも今後の検討が必要であろう。

中世瓦は、軒丸瓦中世Aタイプ、軒平瓦中世Aタイプがセットで、豊地城跡の時代の中心となるものと考えられる。中世瓦はSK9などから出土しているが、小野市教委1985調査cでは東西方向の堀内から瓦が出土するが、今回検出されたSD5はこの延長上にあるものと推測される。堀内部からは瓦こそ出土していないが閲通性は高い。SK9もまたこの堀に近い場所に位置すると考えると、瓦は宮田逸民氏（宮田逸民1996）が指摘する通り、北側（城煙）で葺かれた瓦が散布したものと考えられる。一方、豊地城跡の瓦についてはすでに田中幸夫氏が検討している。それによれば同文の瓦が瑞應寺三重塔や、書写山円教寺の「(橘)甚六作」銘を持つ採取瓦にみられる。橘甚六は水掛前半に名乗りを変えるため円教寺採取瓦はこの時期以前のものとなる。ただ豊地城跡の資料は周縁の幅が狭いので、田中氏は本城跡のものを後出しとし、コピキAであることなどから天正8年の廢城時までに位置付けている。

城郭において瓦葺建物が登場するのは天正年間（1573～1591）以後とされ、主に織豊系城郭が導入を主導したとされ、織豊政権のかかわりと瓦導入は相関を持つとされる。しかし、播磨では三木城・置塙城などの拠点城郭では早くから瓦導入が進んでおり豊地城跡もその1つである。ただし、この時期の瓦葺き建物は城郭の一部の建物（主として櫓）に限られ、豊地城跡でも今回の分析によって中世瓦が出土した地点が城烟南側に限られているので、特定の建物のものと考えられる。以上からすると三木に在住した橘氏は別所氏との関係から永禄年間～天正年間の初めごろに、豊地城跡で瓦を葺いたものと考えられる。

#### 【城跡の構造】

城跡の構造については宮田逸民氏の検討（宮田1996）をもとに、これまでの概要を整理しておきたい。① それによれば城跡は次の5ヶ所に散在的に痕跡を残すという。①現存土壘の北側、庄屋屋敷周辺、②隣接する西側の観音堂周辺の土壘・堀、③城煙・牛馬周辺（地元で城跡と伝承する場所）、④八幡神社・みやま保育園周辺、⑤豊地村南側の短冊形水田地形などがあげられる。このうち、現在遺構が確認できるのは①の現存土壘および堀（堀は東と南辺で東辺は堀景觀を残すが南辺は凹地である）、②の堀（水田）、④の外堀（東辺のみで溜池）のみである。

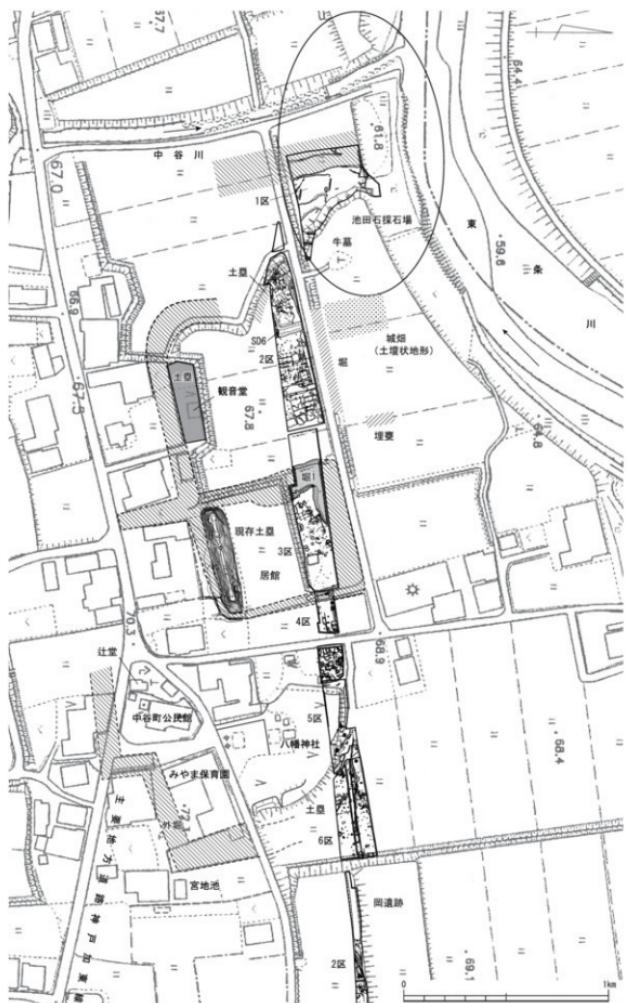
①では現存土壘を南辺とする区画は戦国期の方形館とされる。この方形館は1辺70mほどの規模で、南辺に土壘、南・東辺に堀が存在するが、村絵図<sup>12</sup>によれば、ほぼ四周を巡っていたことが推測でき、この場所が江戸時代の庄屋屋敷となっていた。

②は、方形館の南西隅から堀が西と南に伸び、西へ伸びる堀は、現在は観音堂が建つ土壘とセットで城郭西側の郭を画す防御ラインとなる。

③は方形館（庄屋屋敷）の西北、東条川に近い場所で、かつて「城煙」と呼ばれた土壘状地形地があったが、この周辺を城跡の主郭とする。城煙の南側では小野市教委1980年度c調査によって堀と石垣が検出され、戦国時代後半の瓦が出土した。宮田氏は付近に多聞櫓の存在を指摘し、堀が主郭南限を画すことを提起した。

④は現在の八幡神社周辺で、みやま保育園の東・西側にL字系の土壘・堀が存在したとして外郭と評価する。土壘については第2章で述べた通り写真資料によって確認できる。

以上から宮田氏は③周辺が主郭となり、重複期に瓦葺きの多聞櫓や石垣構造の城郭が築城されたとする。そして①の方形館は城郭内部の武家屋敷の1つで、八幡神社周辺は東への外郭ラインで、消失した



第35図 豊地城跡概念図

土塁や外堀がかつては巡っていたと推定している。ただし、これらの遺構相互の構造的な関係については明確な言及を避けしており、点在する遺構の痕跡をどのように結びつけるのかは今後の大きな課題となっている。この点は、今回の発掘調査でも回答を得ることができていない。その大きな原因は次に述べる近世の農地村が置かれた状況が深くかかわる。

#### 【中世集落について】

城郭とは直接関連しないが今回の調査では同跡も含めて13~14世紀前後の集落が遺跡全体に渡って検出された。削平のために遺存状況の悪い地点（2区東・3~5区全体など）もあるが、概ね広範にわたって集落域に含まれていることが判明した。これは築城以前からこの場所が拠点として利用されたことを示すものもある。

農地周辺にはとともに吉田新莊に位置するが、大規模な集落の存在からは城跡周辺が同莊園の拠点の一つであった可能性が推測される。また、“といち”という地名名称から市の存在がいわれ、東条谷の要衝であったことが指摘されている。一方、東北2kmにある安国寺は守護にかかわりの深い寺院であるが、これは吉田新莊周辺が早くから守護権の及ぶ場所であったことを窺わせてくれる。これらのことから東条谷において拠点を形成する場所として城跡周辺は適地とみられていたことが推測され、守護被官として台頭した依藤氏にとっては拠点を置く場所として農地は都合がよかったと思われる。

#### 2. 江戸時代と豊地城跡

農地城では庵城後、家老であった栗山家が住屋として帰農し、前述の方形館を庄屋屋敷とした。村絵図では方形館は北を正面とし北辺中央に土橋が架かる。屋敷内部は北側半分が1段低く、南側が屋敷本体となる。北側は調査区の3区にあたるが、調査によって埋植群や井戸などが多数検出され庄屋屋敷の営農に関連した施設が置かれた場所と推測されている。

この庄屋屋敷は明治以降に退転し、その後は耕作地（当初は畠？）となり古屋敷と呼ばれるようになったのであろう。ただ屋敷の退転によって開墾が進められ、土塁の切り崩しや堀の埋没、もしくは溜池への転用などが進んだ。たとえば土塁の東辺については昭和初期まで残されていたが昭和10年頃に削平された。一方、堀の北・西辺は埋土からすると上層（石組構の深さまで）が近年まで残されていた可能性が高い。

農地城が庵城となった江戸時代になると農地村は農村になっている。時期によって変遷があるものの大坂城代領地であった時期が長く、基本的に代々の大坂城代の領地となっていた。正保3年（1646）の「播磨国知行高辻郷帳」によれば高63.178石で「但屋敷畠方斗」とされ水田の記載がない村とされる。戸数も村絵図でみると20軒未満で、明治期に1つの村となる隣接の屋口村・貝野村に比べるとかなり小規模である。ちなみに屋口村は同郷帳によれば田方232.48石、畠方15.15石、高247.63石、同じく貝野村が田方157.03石、畠方4.424石、高161.454石で、その後の元禄期・天保期には両村とも石高が増加するが、農地村だけは変化がない。

水利に関しては農地村は不利であった。谷奥に位置する屋口村が谷中の溜池を所有し、溝井井・中谷などの谷水源を確保していた。このため屋口村の用水は比較的安定していたといわれる。これに比べ、農地村は屋口村の落水が中心で、恒常に水不足が続いたという。このため宝永3年（1706）宇「寺谷」に幕府代官より銀3貫目を拝借して新池（屋口村地内）を築造している（『口上書』栗山家文書）。

東条谷の拠点城郭として勢威を振った場所としては近世の状況に驚くが、この点について「村の大部分を古城跡が占める特殊な状況」が影響した（宮田逸民1996）といわれている。いずれにしても周辺の

水利慣行から除外され長く耕作地を保有しなかったことが、近世に有力農村への道を辿れなかつたことの原因となったことは疑いないようである。ただし、その際に注意されるのは戦豊期から江戸初期の豊地村の状況である。廢城後ただちに栗山家が豊地に帰農したのであれば、政治的な立場が異なつた可能性が高い。戦国末期に廃城となつたとはいえ、織豊系大名へと転身した家臣の末裔にとって在地における立場は大きいはずである。このことから見ると、栗山家は江戸初期に帰農するものの、17世紀中頃～後半まで在地から離れた可能性が高い。この時間的な問題が豊地村の立場に反映されたと推測される。その後、豊地村は明治9年に隣村の屋口村・貝野村と合併し中谷村となる。出土遺物から見ても17世紀後半段階に遺物量が増加する点や、瓦も同様の時期的な空白期を持つことからみると、廃城となつた豊地城は古城として放置された期間が存在した可能性が高いと推測される。

### 3. 豊地の生産遺跡

#### 【採石場跡】

池田石と呼ばれる石材の採石が西側の池田村でおこなわれるが、この採石場跡が既述のように1区周辺にも及んでいた。現在も東条川左岸には切り出し面と思われる崖地形が池田地区に残され、豊地側には板状の石材が川の中に残されている。

採石は岩盤を切り出すもので、1区でも報告したとおり、その切り出し面は高さ数mに及ぶものもある。採石場跡の広がりは東条川と中谷川の合流点周辺一帯に及ぶが、1区の調査成果からすると中谷川の両岸でもかなりの範囲に広がっていることが推測される。今回の調査はこの採石場の一部を調査したことになるが、1区の東側崖地形や中谷川の護岸周辺はすべて石切り場となっていたと考えてよい。さらに、東条川の左岸で1区の北東側に隣接する畠周辺は採石による地形改変が大きいといわれ、さらに隣接する牛幕やかつて存在した城煙もこの採石の影響を受けたことが、地元の記憶に残され、小野市教委1980年度a調査でもその可能性が指摘されている。

宮田氏の検討や今回の調査結果からすると、戦国時代末期の豊地城跡の中心は城煙から東条川に面した周辺に比定されるが、周辺は圃場整備前の段階ですでに城郭遺構が見えなくなっていたのではないだろうか。このことも城跡遺構が採石によって大きく改変されたことを考へるうえで重要であろう。

#### 【瓦生産と粘土採掘土坑】

2区の東端、4・2区西端には粘土採掘を目的とした長方形ないし方形の採掘土坑が集中して検出された。これらは豊地村内で操業した瓦生産のためのものであるという。操業は近代以降から昭和初期までとされる。粘土採掘土坑のほかに方形館東辺の土塁についても採土をおこない、昭和10年頃に土塁を崩したという。2区の粘土採掘土坑では池田石を用いた礎石建物を破壊するが、この建物は明治初期に存在した屋敷と考えられるので、このことからも採掘は明治初期以降であることがわかる。

#### 註

1. このほか、屋口村境に城下の存在が指摘されるが、検討材料がないため今回は検討を割愛した。
2. 村莊図は豊地城跡に伝わるもので、江戸期のものと明治期に書き写して新たに地番などを記入したものがある。この絵図では庄屋屋敷は中心部から城外まで土橋から通路が伸びるが、3区で通路の痕跡は検出できなかった。これは3区が屋敷廃絶後大きく削平されたためと推測される。

#### 参考文献

- 田中幸夫2004「播磨の中世史」  
宮田義民1996「小野市史 別巻 文化財編」小野市  
小野市2003「小野市史 第2巻」

遺物観察表1

No	地 区	出土遺構	種 別	器 様	法 量 (cm)			残 存 部 分	形 成・調整方法の特徴・文様
					口 径	體 厚	底 厚		
1	216	SD 2	箱型部	瓶	(14.6)	(2.3)	—	1/4 前	両面が削鉗、底部手切り。13世紀代
2	216	SD 2	箱型部	瓶	(17.2)	(4.6)	(7.0)	3/4 前	両面が削鉗、底部手切り。13世紀代
3	216	SD 4	箱型部	瓶	(7.8)	—	(4.1)	1/2	両面が削鉗、底部手切り。
4	216	SD 4	箱型部	瓶	(10.8)	(2.0)	—	1/6	口部端部
5	216	SD 4	箱型部	瓶	(2.9)	—	—	—	底部端部
6	216	SD 7	箱型部	高脚瓶	—	(1.5)	(7.8)	1/4	底部
7	216	SD 7	箱型部	高脚瓶	—	(1.9)	(6.8)	—	1/4 底部
8	216	SK 7	上輪部	台付瓶	—	(1.9)	5.3	—	1/4は完全 両面
9	216	SK 7	上輪部	台付瓶	—	(4.1)	5.0	—	中央欠損 両面
10	216	SK 7	上輪部	小瓶	7.9	1.3	5.5	—	変形
11	216	SK 7	上輪部	杯	—	(2.6)	7.9	—	1/4は完全 両面
12	216	SK 7	上輪部	瓶	(15.5)	4.6	6.25	1/5	完全
13	216	SK 7	上輪部	瓶	15.85	4.75	6.85	5/6	1/4は完全
14	216	SK 7	上輪部	瓶	15.7	4.7	6.7	—	1/4は完全
15	216	SK 7	上輪部	瓶	14.85	4.6	4.3	—	1/4は完全
16	216	SK 7	上輪部	瓶	16.4	4.8	7.4	—	完全
17	216	SD 10	箱型部	瓶	(28.0)	8.6	27.0	—	1/4は完全 両面が削鉗、底部手切り。13世紀代
18	216	SD 9	箱型部	瓶	(7.0)	—	(7.0)	1/4	底部
19	216	SD 9	箱型部	瓶	—	(6.0)	—	—	底部
20	216	SK 9	上輪部	瓶	(18.0)	(7.6)	—	1/8は完全	両面が削鉗、外側右上上がりの平行タケキ。
21	216	SK 9	上輪部	瓶	(26.3)	(7.4)	—	1/8	—
22	216	SK 17	箱型部	瓶	—	(1.85)	(4.4)	—	—
23	216	SK 17	箱型部	瓶	—	(6.6)	—	—	手すり
24	216	SK 17	箱型部	瓶	—	(7.1)	(18.0)	—	1/8は完全 両面が削鉗、底部手切り。13世紀代
25	216	SK 17	上輪部	瓶	(23.6)	(3.7)	—	1/8は完全	手すり
26	216	SK 17	上輪部	瓶	(26.0)	(4.35)	—	小片	口部端部
27	216	SK 23	上輪部	瓶	(18.9)	(3.9)	—	1/8は完全	口部端部
28	216	SK 22	上輪部	瓶	(7.2)	(12.0)	—	1/4	底部
29	216	P137	不明部	不明	—	(2.3)	—	—	底部小片
30	216	P23	箱型部	瓶	(16.5)	(1.6)	—	1/8	口部端部
31	216	P92	上輪部	瓶	(15.0)	(2.35)	—	1/8は完全	手すりね、京都市立美術館
32	216	P93	上輪部	瓶	(15.6)	(4.1)	—	1/8は完全	口部端部
33	216	P97	上輪部	瓶	(25.1)	8.8	—	1/8は完全	口部端部
34	216	P72	上輪部	瓶	(24.4)	(4.3)	—	1/8は完全	口部端部
35	216	SD 6	上輪部	小瓶	(8.9)	(1.6)	—	1/8は完全	手すりね、京都市立美術館、外側上層
36	216	SD 6	上輪部	小瓶	(8.0)	(1.1)	—	1/8は完全	手すりね、京都市立美術館、外側上層
37	216	SD 6	上輪部	小瓶	(1.7)	—	(4.7)	2/5	1/8は完全
38	216	SD 6	上輪部	小瓶	(16.8)	2.3	—	1/8は完全	手すりね、京都市立美術館、外側上層
39	216	SD 6	上輪部	小瓶	(11.6)	4.7	—	1/8は完全	口部端部
40	216	SD 6	上輪部	小瓶	(19.6)	(4.2)	—	1/8は完全	口部端部
41	216	SD 6	上輪部	小瓶	(19.6)	(4.7)	—	1/8	口部端部
42	216	SD 6	上輪部	小瓶	(20.2)	(9.8)	(22.2)	1/6	1/8は完全
43	216	SD 6	上輪部	小瓶	(25.0)	(4.8)	—	1/8は完全	手すり
44	216	SD 6	上輪部	小瓶	(22.1)	(6.7)	—	1/8は完全	手すり
45	216	SD 6	瓦質部	瓦質	(35.0)	(2.65)	—	1/8は完全	斜面平滑、口部端部に凹み有る、外側上層
46	216	SD 6	瓦質部	瓦	(4.3)	—	(4.3)	—	口部端部
47	216	SD 6	瓦質部	瓦	(36.2)	(2.1)	—	1/8は完全	手すりね、京都市立美術館、外側上層
48	216	SD 6	瓦質部	瓦	(1.6)	(5.4)	—	1/2	内側代文・中國紋様、外側上層
49	216	SD 6	上輪部	小瓶	7.5	1.75	3.95	1/2	手すりね、京都市立美術館、外側上層
50	216	SD 6	上輪部	小瓶	(8.2)	1.7	(4.0)	1/2	手すりね、京都市立美術館、外側上層
51	216	SD 6	上輪部	小瓶	(12.1)	1.9	—	1/8は完全	手すりね、京都市立美術館、外側上層
52	216	SD 6	上輪部	小瓶	(14.2)	2.0	(7.6)	1/6	手すりね、京都市立美術館、外側上層
53	216	SD 6	上輪部	小瓶	(21.6)	(5.1)	—	1/6	口部端部
54	216	SD 6	上輪部	小瓶	(26.0)	(8.9)	(26.9)	小片	壁面上半段部、底部
55	216	SD 6	上輪部	小瓶	(28.4)	(5.0)	—	1/5	手すりねによる痕跡、外側上層
56	216	SD 6	上輪部	小瓶	(32.0)	(5.5)	—	小片	手すりねによる痕跡、体部・底部に平行タケキ、外側上層
57	216	SD 6	上輪部	小瓶	(33.4)	(4.6)	—	—	口部端部
58	216	SD 6	上輪部	小瓶	—	(2.4)	—	—	口部端部
59	216	SD 6	上輪部	小瓶	—	(2.1)	(5.0)	—	1/2 回 両側端部
60	216	SD 6	上輪部	小瓶	(7.0)	1.6	(2.8)	3/4	手すりね、京都市立美術館、外側上層
61	216	SD 6	上輪部	小瓶	(8.8)	(1.8)	—	2/5	手すりね、京都市立美術館、外側上層
62	216	SD 6	上輪部	小瓶	7.5	1.9	4.05	6/7	1/4は完全
63	216	SD 6	上輪部	小瓶	(14.6)	(2.8)	(10.2)	1/7	1/8は完全
64	216	SD 6	上輪部	小瓶	(19.3)	(10.4)	—	—	底部1/4前
65	216	SD 6	上輪部	小瓶	(8.0)	(1.2)	—	1/8は完全	体部下半 1/8
66	216	SD 6	上輪部	小瓶	(16.0)	(3.6)	若干	—	中国紋様、外側上層
67	216	SD 6	上輪部	小瓶	7.45	1.8	3.8	6/7	1/4は完全
68	216	SD 6	上輪部	小瓶	7.45	1.8	4.1	—	変形
69	216	SD 6	上輪部	小瓶	7.5	1.7	3.7	1/4は完全	手すりね、京都市立美術館、外側上層
70	216	SD 6	上輪部	小瓶	7.5	1.7	3.7	1/4は完全	手すりね、京都市立美術館、外側上層

遺物観察表2

No.	地	出土遺構	種別	器種	法 量 (cm)			残存		成形・調整方法の特徴・文様
					口 径	器 高	底 径	口 線	底 部	
71	216	SD 6	上部断	小瓶	7.6	1.5	4.05	3/5	1/8	手づくね、京都市立上部断、南側下層
72	216	SD 6	上部断	小瓶	7.6	1.5	4.05	5/6	1/8	手づくね、京都市立上部断、南側下層
73	216	SD 6	上部断	小瓶	7.6	1.7	3.65	—	—	手づくね、京都市立上部断、北側下層
74	216	SD 6	上部断	小瓶	7.6	1.7	3.0	—	—	手づくね、京都市立上部断、北側下層
75	216	SD 6	上部断	小瓶	7.05	1.65	3.05	—	—	手づくね、京都市立上部断、北側下層
76	216	SD 6	上部断	小瓶	(7.7)	1.8	4.2	1/2	2/3	手づくね、京都市立上部断、南側下層
77	216	SD 6	上部断	小瓶	7.7	1.8	3.9	13/16 完存	13/16 完存	手づくね、京都市立上部断、南側下層
78	216	SD 6	上部断	小瓶	(7.8)	1.7	4.5	1/2	3/4	手づくね、京都市立上部断、南側下層
79	216	SD 6	上部断	小瓶	7.8	1.7	3.95	7/8	13/16 完存	手づくね、京都市立上部断、南側下層
80	216	SD 6	上部断	小瓶	7.9	1.85	3.9	—	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
81	216	SD 6	上部断	小瓶	8.0	1.85	4.0	7/8	13/16 完存	手づくね、京都市立上部断、南側下層
82	216	SD 6	上部断	小瓶	(8.2)	1.4	(3.6)	1/4	1/4	手づくね、京都市立上部断、南側下層
83	216	SD 6	上部断	瓶	(11.2)	2.0	(4.8)	1/8	1/8	手づくね、京都市立上部断、南側下層
84	216	SD 6	上部断	瓶	(11.4)	0	(2.5)	—	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
85	216	SD 6	上部断	瓶	(11.4)	0	(2.5)	—	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
86	216	SD 6	上部断	瓶	(15.6)	(1.9)	(7.2)	1/2	1/8	手づくね、京都市立上部断、南側下層
87	216	SD 6	上部断	瓶	(14.0)	(1.6)	—	—	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
88	216	SD 6	上部断	瓶	(14.2)	(2.0)	—	1/2	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
89	216	SD 6	上部断	瓶	(14.2)	(2.2)	—	—	1.823	手づくね、京都市立上部断、南側下層
90	216	SD 6	上部断	瓶	22.0	—	—	—	—	手づくねで形成、体部に右上平行タッキ、南側下層
91	216	SD 6	上部断	瓶	22.8	10.9	28.6	6/7	1/2(中)	手づくねで形成、体部に右上平行タッキ、南側下層
92	216	SD 6	上部断	瓶	26.6	15.9	30.8	13/16 完存	1/2(中)	手づくねで形成、底部は手に平行タッキ、南側下層
93	216	SD 6	上部断	瓶	26.6	15.9	30.8	13/16 完存	1/2(中)	手づくねで形成、底部は手に平行タッキ、南側下層
94	216	SD 6	側面焼	利休型	(15.9)	13.6	—	—	—	手づくねで形成、底部は手に平行タッキ、南側下層
95	216	SD 6	側面焼	利休型	(22.6)	13.3	(14.4)	1/2	1/8	手づくねで形成、底部は手に平行タッキ、南側下層
96	216	SD 6	白磁	杯	(6.0)	3.95	3.05	1/8	—	手づくねで形成、底部は手に平行タッキ、南側下層
97	216	SD 6	上部断	小瓶	7.0	1.8	3.7	3/4	13/16 完存	手づくね、京都市立上部断、南側下層
98	216	SD 6	上部断	小瓶	7.2	1.8	3.8	13/16 完存	1/8	手づくね、京都市立上部断、南側下層
99	216	SD 6	上部断	小瓶	7.4	1.8	4.05	13/16 完存	13/16 完存	手づくね、京都市立上部断、南側下層
100	216	SD 6	上部断	小瓶	(7.3)	1.8	(3.8)	1/4	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
101	216	SD 6	上部断	小瓶	(7.5)	1.7	(4.1)	1/3	1/8	手づくね、京都市立上部断、南側下層
102	216	SD 6	上部断	小瓶	7.55	1.9	4.25	7/8	1/8	手づくね、京都市立上部断、南側下層
103	216	SD 6	上部断	小瓶	7.6	1.8	4.2	6/7	1/8	手づくね、京都市立上部断、南側下層
104	216	SD 6	上部断	小瓶	(7.6)	1.8	(3.8)	1/2	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
105	216	SD 6	上部断	小瓶	7.6	1.8	4.05	13/16 完存	13/16 完存	手づくねで形成、底部は手に平行タッキ、南側下層
106	216	SD 6	上部断	小瓶	7.65	1.2	4.0	13/16 完存	13/16 完存	手づくね、京都市立上部断、南側下層
107	216	SD 6	上部断	小瓶	7.7	1.6	4.1	13/16 完存	13/16 完存	手づくね、京都市立上部断、南側下層
108	216	SD 6	上部断	小瓶	7.7	1.8	4.0	7/8	13/16 完存	手づくね、京都市立上部断、南側下層
109	216	SD 6	上部断	小瓶	8.0	1.7	4.4	2/3	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
110	216	SD 6	上部断	小瓶	8.0	1.75	3.7	7/8	13/16 完存	手づくね、京都市立上部断、南側下層
111	216	SD 6	上部断	小瓶	9.05	2.1	5.1	6/7	3/4	手づくね、京都市立上部断、南側下層
112	216	SD 6	上部断	小瓶	9.6	1.9	5.5	13/16 完存	13/16 完存	手づくね、京都市立上部断、南側下層
113	216	SD 6	上部断	小瓶	9.6	1.9	5.1	4.5	5/6	手づくね、京都市立上部断、南側下層
114	216	SD 6	上部断	小瓶	9.95	2.2	5.0	6/7	3/4	手づくね、京都市立上部断、南側下層
115	216	SD 6	上部断	瓶	(18.0)	(2.3)	—	—	1.813	手づくね、京都市立上部断、南側下層
116	216	SD 6	上部断	瓶	(18.2)	(2.05)	—	1/2	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
117	216	SD 6	上部断	瓶	(18.2)	(2.2)	(7.0)	1.813	1/2(中)	手づくね、京都市立上部断、南側下層
118	216	SD 6	上部断	瓶	(18.2)	(2.2)	—	—	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
119	216	SD 6	上部断	瓶	(18.2)	(2.2)	—	—	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
120	216	SD 6	上部断	瓶	(18.2)	(2.2)	—	—	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
121	216	SD 6	上部断	瓶	(18.2)	(2.1)	—	—	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
122	216	SD 6	上部断	瓶	(18.2)	(2.2)	—	—	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
123	216	SD 6	上部断	瓶	13.4	2.3	7.05	13/16 完存	13/16 完存	手づくね、京都市立上部断、南側下層
124	216	SD 6	上部断	瓶	(13.4)	1.9	(9.0)	1.813	1/8	手づくね、京都市立上部断、南側下層
125	216	SD 6	上部断	瓶	(13.7)	(2.15)	—	1/4	—	手づくね、京都市立上部断、南側下層
126	216	SD 6	上部断	瓶	13.65	2.1	7.3	13/16 完存	13/16 完存	手づくね、京都市立上部断、南側下層
127	216	SD 6	上部断	瓶	(15.2)	2.1	(9.0)	2/5	1/4	手づくね、京都市立上部断、南側下層
128	216	SD 6	上部断	瓶	11.5	5.8	6.5	4/5	完存	直角底上部断成形のハリヤタケ繊維、南側下層
129	216	SD 6	上部断	瓶	(38.0)	14.9	(27.5)	1/4	1/3	手づくねで成形、底部下に石上平行タッキ、北側上層
130	216	SD 6	上部断	小瓶	(9.4)	1.7	(4.8)	1/5	1/4	手づくね、京都市立上部断、北側上層
131	216	SD 6	上部断	瓶	(13.2)	(1.7)	—	1/6	—	手づくね、京都市立上部断、北側上層
132	216	SD 6	上部断	瓶	13.3	2.2	7.55	2/3	1/3	手づくね、京都市立上部断、北側上層
133	216	SD 6	上部断	瓶	13.4	2.3	7.65	1/4	7/8	手づくね、京都市立上部断、北側上層
134	216	SD 6	上部断	瓶	(26.2)	(6.8)	—	—	—	手づくねで成形、底部下に石上平行タッキ、北側上層
135	216	SD 6	上部断	瓶	(25.1)	(4.45)	—	1/8	—	手づくねで成形、底部下に石上平行タッキ、北側上層
136	216	SD 6	内面焼	團體	—	(6.5)	—	—	—	本箱の約1/2
137	216	SD 6	内面焼	團體	—	(2.7)	4.6	—	—	本箱の約1/2
138	216	SD 6	上部断	小瓶	7.5	1.9	3.05	7/8	13/16 完存	手づくね、京都市立上部断、北側上層
139	216	SD 6	上部断	小瓶	7.7	1.7	4.1	13/16 完存	13/16 完存	手づくね、京都市立上部断、北側上層
140	216	SD 6	上部断	小瓶	(7.6)	1.6	(3.8)	2/3	1/2	手づくね、京都市立上部断、北側上層

遺物観察表3

No.	地 区	出土遺構	種 別	器 様	法 量 (cm)				残 存	成形・調整方法の特徴・文様
					口 径	底 高	底 傾	口 線		
141	216	SD 6	上脚器	小鉢	7.7	1.3	3.5	6.7	完存	手づくり、京都系上脚器、北朝下層。
142	216	SD 6	上脚器	小鉢	8.1	2.0	3.8	11.0	完存	手づくり、京都系上脚器、北朝下層。
143	216	SD 6	上脚器	小鉢	8.45	2.0	4.0	11.0	完存	手づくり、京都系上脚器、北朝下層。
144	216	SD 6	上脚器	皿	(13.25)	(2.3)	(6.4)	1/4	1/4	手づくり、京都系上脚器、北朝下層。
145	216	SD 6	上脚器	皿	13.55	2.2	7.6	5/6	1/2	手づくり、京都系上脚器、北朝下層。
146	216	SD 6	上脚器	皿	(21.6)	(8.5)	—	1/4	—	西日本で作成、底面に舟底と平行なアーチ、北朝下層。
147	216	SD 6	上脚器	皿	21.6	(10.3)	23.8	1/2	若干	全体7.8 西日本で作成、底面に舟底と平行なアーチ、北朝下層。
148	216	SD 6	脚形器	鉢	23.4	(7.6)	—	1/2	—	全体2.5 内側板ナジ直脚、片口を持つ。16世紀代、北朝下層。
149	134	匂合桶	上脚品	管状	長さ 4.5	直径 1.3	厚み 0.3	—	—	はり完形 管脚上脚。
150	216	匂合桶	上脚品	皿	(24.8)	(8.0)	厚み 0.5	4/9	—	門なし、外周平行タキ、内側板ナジ調整。
151	216	匂合桶	上脚品	皿	(24.8)	(10.0)	—	小片	—	奈良時代。
152	216	匂合桶	上脚品	皿	(22.4)	6.65	—	1/9	—	型壓の痕、外周に舟上がりの平行タキ。
153	216	匂合桶	上脚品	皿	(28.3)	3.85	—	小片	—	少しき縫合強化付ける。
154	216	匂合桶	上脚品	鉢	(20.0)	(5.0)	—	若干	—	ナビゲーション表示、内側にいたナビ路跡。
155	216	匂合桶	上脚器	皿	(20.4)	(5.3)	脚形 (22.1)	1/6	—	門なし、外周平行タキ、内側板ナジ調整。
156	216	匂合桶	上脚器	皿	(24.8)	(8.0)	厚み 0.5	4/9	—	門なし、外周平行タキ、内側板ナジ調整。
157	216	匂合桶	上脚器	皿	(23.8)	(6.55)	脚形 (26.6)	1/6	—	門なし、外周平行タキ、内側板ナジ調整。
158	216	匂合桶	脚形器	皿	(16.0)	(3.6)	—	1/9	—	—
159	216	匂合桶	脚形器	鉢	(3.9)	(14.0)	—	—	—	口脚部を舟底に立ち上げ、小さな木栓を持つ。
160	216	匂合桶	脚形器	鉢	(22.0)	(6.4)	—	小片	—	木栓本体の約半分を持つ。
161	216	匂合桶	脚形器	鉢	(42.0)	(7.7)	—	小片	—	中世6脚形脚。
162	216	匂合桶	内脚	脚形	(36.0)	(7.4)	—	小片	—	口脚部を立ち上げる。1本縫きの脚目。
163	216	匂合桶	内脚	脚形	(34.0)	(6.0)	—	小片	—	口脚部を立ち上げる。1本縫きの脚目。
164	216	匂合桶	内脚	脚形	(32.9)	(9.05)	—	1/8	—	口脚部を立ち上げる。1本縫きの脚目。直目
165	216	匂合桶	内脚	脚形	(4.3)	4.1	—	完存	全体1/3	肥厚系直脚。
166	216	匂合桶	内脚	皿	(18.0)	3.8	7.3	7.0	1/4	1/3 直脚
167	216	匂合桶	内脚	皿	(1.3)	(6.0)	—	—	1/3	肥厚系直脚。
168	216	匂合桶	内脚	皿	(9.7)	2.15	6.2	8.85	7	1/2
169	216	匂合桶	内脚	皿	(10.0)	5.5	—	—	1/2	中世6脚形脚の脚部の脚目、14-15世紀。
170	216	匂合桶	内脚	皿	(11.0)	(2.1)	—	—	—	新規出、(クライ)の縫で、外周に舟底。
171	216	匂合桶	内脚	皿	(16.0)	(5.4)	—	—	—	舟底を丸くする。
172	216	匂合桶	内脚	皿	(9.2)	2.6	4.9	1/2 縫	完存	内側に舟底を削る。
173	216	匂合桶	内脚	皿	(5.45)	(11.4)	—	1/4	—	脚部の曳引跡で内側タキ調整。
174	216	匂合桶	内脚	皿	(1.9)	(8.0)	—	小片	脚部下小片	脚部の曳引跡で内側タキ調整。
175	216	匂合桶	内脚	皿	(20.0)	(4.4)	—	小片	—	門なしによる舟底の表現。
176	216	匂合桶	内脚	皿	(27.0)	2.05	—	小片	—	西日本による舟底表現。直脚。
177	216	匂合桶	内脚	皿	(32.0)	(4.1)	—	小片	—	口脚部を立ち上げる。1本縫きの脚目。
178	216	匂合桶	内脚	皿	(35.0)	(5.9)	—	小片	—	口脚部を立ち上げる。1本縫きの脚目。
179	216	匂合桶	内脚	皿	(7.2)	(14.2)	—	小片	脚部下小片	1本縫きの脚目。
180	216	匂合桶	内脚	皿	(6.7)	—	—	—	脚部下小片	1本縫きの脚目。
181	216	匂合桶	内脚	皿	(7.6)	(10.2)	—	—	2/7	肥厚系直脚。
182	216	匂合桶	内脚	皿	(18.0)	3.5	—	1/7	—	脚部下小片を丸める。
183	216	匂合桶	内脚	皿	(9.8)	(7.1)	—	1/5	—	脚部1/6 口脚部を丸める。
184	216	匂合桶	内脚	皿	(3.6)	(12.5)	—	小片	脚部1/5	小さく2つ以上の5脚脚部をもつ。
185	216	匂合桶	内脚	皿	(32.8)	(5.5)	—	小片	—	中世6脚形脚、口脚部、11本縫きの脚目。
186	216	匂合桶	内脚	皿	(5.7)	—	—	—	脚部下小片	脚部曳引跡。
187	216	匂合桶	内脚	皿	(3.1)	(13.0)	—	完存	脚部下小片1/2	直脚。
188	216	匂合桶	内脚	皿	(38.7)	(4.6)	—	小片	—	中世6脚形脚。
189	216	匂合桶	内脚	皿	(12.8)	3.1	(5.3)	1/2 縫	2/5	初期伊万里。
190	216	匂合桶	内脚	皿	(11.0)	(2.6)	4.0	1/2 縫	—	砂目。
191	216	匂合桶	内脚	皿	(12.2)	6.8	(4.9)	2/7	2/5	西日本に特有。
192	216	匂合桶	内脚	皿	(12.1)	(6.3)	(4.5)	1/4 縫	—	砂目。
193	216	匂合桶	内脚	皿	(—)	(2.4)	(3.5)	—	1/2 縫	砂目。
194	216	匂合桶	内脚	皿	(2.3)	3.35	—	—	—	肥厚系直脚丸底。
195	216	匂合桶	内脚	皿	(0.9)	(2.1)	—	1/3	—	肥厚系直脚丸底。
196	216	匂合桶	内脚	皿	(—)	(4.9)	—	—	—	肥厚系直脚丸底。
197	216	匂合桶	内脚	皿	(10.0)	(4.2)	—	1/6	—	肥厚系直脚丸底。
198	216	匂合桶	内脚	皿	(10.0)	5.3	(4.7)	1/5	3/4	肥厚系直脚丸底。
199	216	匂合桶	内脚	皿	(—)	(5.1)	(4.6)	—	完存	脚部丸底。
200	216	匂合桶	内脚	皿	(—)	(5.1)	4.4	—	1/2 縫	肥厚系直脚丸底。
201	216	匂合桶	内脚	皿	(10.2)	7.45	(4.3)	1/5	1/2	肥厚系直脚丸底。
202	216	匂合桶	内脚	皿	(—)	(4.15)	4.6	—	1/4 縫完存	肥厚系直脚丸底。
203	216	匂合桶	内脚	皿	(—)	(2.2)	3.74	—	1/4 縫完存	西日本に特有。
204	216	匂合桶	内脚	皿	(—)	(9.55)	(7.6)	—	1/6	肥厚系。
205	216	匂合桶	内脚	皿	(14.0)	(2.9)	7.1	1/8	完存	—
206	216	匂合桶	内脚	皿	(10.0)	(5.6)	—	小片	—	内側に五花形のスタンプ文。
207	216	匂合桶	内脚	皿	(10.6)	7.5	(4.4)	1/4 縫	1/2 縫	脚部2/2脚。
208	216	匂合桶	内脚	皿	(11.2)	7.85	5.15	小片	完存	直脚。
209	216	匂合桶	内脚	皿	(10.0)	7.5	(4.9)	1/4 縫	2/9	丸底。
210	216	匂合桶	内脚	皿	(—)	(3.6)	5.1	—	完存	西日本在用。

遺物観察表4

No	地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			残存度		成形・調整方法の特徴・文様
					口徑	器高	底径	口径	縁	
211	3-16	船1西造	陶器	甌	—	(1.5)	5.35	—	完全	直腹式。
212	3-16	船1西造	陶器	甌	—	(7.8)	8.4	—	完全	側部半片
213	3-16	船1西造	陶器	甌	(28.2)	5.1	(24.6)	1/6	1/6	輪軸。
214	3-16	船1西造	陶器	甌	(30.6)	(4.2)	—	小片	—	受け蓋を持つ。
215	3-16	船1西造	陶器	小甌	(13.5)	(4.6)	(11.8)	—	1/4強	側部半片で丸く
216	3-16	船1西造	土師器	焰燒	(20.0)	(3.0)	—	小片	—	体部に穴孔を持つ。
217	3-16	船1西造	土師器	焰燒	(29.6)	(5.75)	—	1/6	—	体部1/6
218	3-16	船1西造	土師器	焰燒	(30.0)	(5.5)	(26.5)	小片	—	17世紀後半～18世紀前半
219	3-16	船1西造	土師器	焰燒	(29.0)	(4.3)	—	1/5	—	17世紀後半～18世紀前半
220	3-16	船1西造	陶器	鉢	(31.0)	—	13.1	(15.0)	1/6弱	1/5
221	3-16	船1西造	陶器	鉢	(33.0)	—	14.6	(15.0)	小片	17世紀前半
222	3-16	船1西造	陶器	鉢	(32.1)	—	15.8	小片	—	17世紀前半
223	3-16	船1西造	陶器	鉢	(29.7)	—	(18.0)	—	—	17世紀後半～18世紀前半
224	3-16	船1西造	陶器	鉢	(25.5)	—	—	—	1/4強	17世紀後半～18世紀前半
225	3-16	船1西造	陶器	鉢	(32.0)	(11.0)	—	小片	—	17世紀後半～18世紀前半
226	3-16	船1西造	陶器	鉢	(31.2)	(8.2)	—	1/6弱	—	側部1/6弱
227	3-16	船1西造	陶器	鉢	(33.0)	(10.7)	—	1/8	—	17世紀後半～18世紀前半
228	3-16	船1西造	陶器	鉢	(34.0)	(6.3)	—	1/7弱	—	17世紀後半～18世紀前半
229	3-16	船1西造	陶器	鉢	(31.8)	(4.9)	—	小片	—	18世紀。
230	3-16	船1西造	陶器	鉢	—	(9.6)	(14.0)	—	1/5弱	体部2/11
231	3-16	船1西造	陶器	甌	(34.8)	(13.0)	—	小片	—	頭部小片
232	3-16	船1西造	陶器	甌	(43.0)	(12.7)	—	1/5強	肩部すり	18世紀。
233	3-16	船1西造	陶器	甌	(50.1)	(18.1)	—	1/8	—	側部1/6弱
234	3-16	船1西造	陶器	甌	(47.4)	(37.0)	(21.2)	小片	3/4	18世紀。
235	3-16	船1西造	陶器	甌	(47.4)	(69.85)	(25.6)	1/4	3/4	18世紀。
236	3-16	SG20	白陶器	甌	(35.2)	36.2	18.2	1/6	完全	体部1/4
237	3-16	P70	土師器	甌	—	(5.45)	—	手付	—	跨ナギによる凹凸で表現。
238	3-16	SK1	陶器	甌	(8.2)	2.3	(4.2)	1/3	1/2	—
239	3-16	SK1	白陶器	甌	—	(1.4)	—	—	1/4	中国唐、14世紀代
240	3-16	SG1	白陶器	甌	—	(5.15)	—	1/8以下	—	17世紀後半
241	3-16	SG3	青磁	甌	—	(7.15)	—	手付	—	17世紀前半
242	3-16	SG2	青磁	甌	—	(2.2)	—	—	5/6	高台欠頭
243	3-16	SG3	青磁	小甌	(6.8)	(1.5)	(4.3)	1/6	1/4	14世紀後半
244	3-16	SG3	青磁	小甌	(9.3)	(1.5)	(5.5)	2/3	1/3	手付なし。直腹式土師器
245	3-16	SG3	青磁	小甌	(25.2)	—	(8.8)	—	—	手付なし。内面側面下部に上りがりの平行タテキ
246	3-16	SG3	青磁	小甌	(6.8)	—	手付	—	—	内面底をやや尖らせる。16世紀代
247	3-16	SG3	青磁	小甌	(6.6)	—	手付	—	—	底付なし。
248	3-16	SG3	青磁	小甌	(7.2)	(4.2)	—	—	1/2	底付なし。
249	3-16	SG3	青磁	小甌	(10.6)	(4.5)	—	1/8以下	—	肩部に波文。
250	3-16	SG3	青磁	小甌	(35.0)	(8.9)	—	1/8以下	—	口縁部を削り曲げ。底部が高くなる物。
251	3-16	SG3	青磁	甌	—	(4.2)	(4.6)	—	—	中国唐、模製の製品。
252	3-16	SG3	青磁	上盤品	上盤	(55.5)	160.2	厚さ1.5	—	12世紀
253	3-16	SG3	青磁	上盤品	上盤	(11.3)	1.7	(8.0)	1/2	腹底不規則。近代以降
254	3-16	SG3	青磁	上盤品	其	直径4.8	600.1	厚さ1.4	—	12世紀
255	3-16	SG3	青磁	上盤品	其	直径7.15	600.6	厚さ2.05	—	腹底不規則。
256	3-16	SG3	青磁	上盤品	其	直径6.7	600.6	厚さ2.0	—	腹底不規則。
257	3-16	SG3	青磁	上盤品	其	直径7.15	600.35	厚さ2.0	—	12世紀
258	3-16	SG3	青磁	上盤品	其	—	(7.6)	—	若干	内面に板ナギ波文が側面。
259	3-16	SG3	青磁	上盤品	其	(22.0)	(6.5)	—	1/7	内面に板ナギ波文が側面。
260	3-16	SG3	青磁	上盤品	其	—	(11.5)	—	—	脚部若干。鏡面。続日。
261	3-16	SG3	青磁	上盤品	其	—	(4.9)	5.0	—	底部をハラクリ成形。
262	3-16	SG3	青磁	上盤品	其	—	(2.05)	4.7	—	砂目。
263	3-16	SG3	青磁	上盤品	其	(11.3)	3.2	5.15	1/3	完全
264	3-16	SG3	青磁	上盤品	其	(15.2)	(1.7)	—	1/8	完全。直腹式土器。
265	3-16	SG3	青磁	上盤品	其	(16.6)	(5.95)	4.15	1/2弱	完全。圓底。
266	3-16	SG3	青磁	上盤品	其	—	—	—	完全	側部3/10。
267	3-16	SG3	青磁	上盤品	其	(8.3)	0.60	(3.6)	1/4	直腹式。
268	3-16	SG3	青磁	中盤	中盤	(11.0)	6.5	(5.2)	1/8	脚部細。直腹式。
269	3-16	SG3	青磁	中盤	中盤	(9.7)	2.8	5.1	2/5	完全。
270	3-16	SG3	青磁	中盤	中盤	(11.4)	6.2	4.2	1/4	完全。外周に舟形文。内面に四方彫文。
271	3-16	SG3	青磁	中盤	中盤	(21.4)	(12.7)	—	3/10	有波沿面。
272	3-16	SG3	青磁	中盤	中盤	7.05	2.75	4.9	3/10	急傾斜の蓋。内面に波文が付く。
273	3-16	SG3	青磁	中盤	中盤	(35.0)	(5.1)	—	1/8	1本書きの折目。16世紀後半。
274	3-16	SG3	青磁	中盤	中盤	(35.0)	(9.9)	—	小片	1本書きの折目。16世紀後半。
275	3-16	SG3	青磁	中盤	中盤	(30.3)	(8.4)	—	1/8	1本書きの折目。16世紀後半。
276	3-16	SG3	青磁	中盤	中盤	(34.3)	(8.1)	—	1/7	—
277	3-16	SG3	青磁	中盤	中盤	(29.0)	(6.8)	—	小片	1本書きの折目。16世紀後半。
278	3-16	SG3	青磁	中盤	中盤	(29.2)	(5.1)	—	小片	脚部若干。17世紀前半。
279	3-16	SG3	青磁	中盤	中盤	(37.0)	(8.5)	—	小片	脚部若干。17世紀前半。
280	3-16	SG3	青磁	中盤	中盤	(31.8)	(7.9)	—	1/7	脚部若干。17世紀後半。

遺物観察表 5

No	地	出土遺構	種類	器種	法量 (m)				残存	成形・調整方法の特徴・文様
					口徑	器高	底径	口縁		
281	4-15C	廻上遺構	円筒形	鉢	—	5.00	(15.0)	—	1/3	1本巻きの細口、16世紀後半
282	4-15C	廻上遺構	鉢	—	(6.0)	—	—	1.85±T	細口の細口、17世紀前半	
283	4-15C	廻上遺構	円筒形	鉢	(29.0)	(14.7)	(11.6)	1/4	1/8	細口の細口、18世紀後半
284	4-25A	SK1	円筒形	鉢	(30.0)	(5.5)	—	1/12	—	1本巻きの細口、16世紀後半
285	4-25A	瓦質上層	火鉢	火鉢	(14.65)	7.65	(11.35)	1/5	1/4	小型の火鉢
286	4-25A	SK2	上解縫	小鉢	8.4	1.45	3.75	1/5	1/4	薄い上解縫
287	4-25A	SK2	舟形縫	小鉢	(7.3)	3.85	3.5	1/5	1/4	舟形のズリ成形
288	4-25A	SK2	前田細縫	鉢	(9.7)	7.15	4.9	1/6	完存	肥前系手組目、外削り章文
289	4-25A	SK2	前田細縫	鉢	(13.25)	2.65	(7.6)	1/4	1/4	肥前系手組目、内削り模文
290	4-25A	SK2	前田細縫	皿	11.6	3.78	4.1	—	—	14世紀成形
291	614	SH11	円筒形	鉢	—	(3.5)	—	若干	—	内削りの細口、16世紀後半
292	614	SH11	円筒形	皿	(10.0)	(4.4)	—	1/6	—	肥前国時代
293	4-25A	SK3	傘形	鉢	(10.0)	9.05	—	2/7	—	肥前系
294	4-25A	SK3	陶器	鉢	(22.7)	(10.35)	御印	—	1/2	施釉陶器
295	616	SH11	上解縫	皿	(28.0)	(5.1)	—	小片	—	内削りのアザ跡が留め書き
296	616	SH11	円筒形	鉢	(28.0)	(6.1)	—	小片	—	1本巻きの細口、16世紀後半
297	4-25A	SD2	陶器	鉢	(22.4)	9.45	—	3/7	—	产地不明
298	616	SH11	円筒形	皿	(12.3)	7.5	厚み 2.9	—	約1/4	円盤状の跡形
299	616	SD5	窓器	皿	(8.1)	2.3	4.6	1/2弱	8/9	肥前系切り
300	4-25A	SD2	傘形	鉢	(9.9)	(4.9)	(4.0)	若干	1/3	肥前系手組目、丸窓、二重手
301	4-25A	SD2	傘形	皿	(9.0)	(3.85)	—	1/4	—	肥前系
302	4-25A	SE6	陶器	皿	7.2	6.9	7.3	完存	4/5	产地不明
303	4-25A	SK2	瓦質上層	瓦	5.8	(16.8)	—	完存	先欠	外削り丁寧な1ギタ調査
304	4-15C	SE1	上解縫	皿	27.0	8.4	26.1	2/3	2/3	17世紀後半、鋸歯に2カ所づつの2カ所の穿孔
305	4-15C	SE4	上解縫	皿	27.4	(9.1)	29.4	完存	—	体部充実、底部2穿孔
306	4-15C	SE4	上解縫	火鉢	21.0	11.2	11.7	1/2弱	1/2強	近代
311	4-15C	SE4	上解縫	鉢	(31.4)	12.2	(16.6)	1/8±T	1/8±T	17世紀中頃、4本単足の脚目
312	4-15C	包合縫	円筒形	鉢	(35.7)	7.75	—	1/8	—	17世紀中頃、8本単足の脚目
313	616	包合縫	圓筒形	鉢	(7.0)	—	若干	—	—	中削り、本巻きの細口、口周部を突起気味におよぶ。
314	616	包合縫	円筒形	鉢	(19.2)	(6.7)	—	1/7	—	中削り前半、片口縫
315	616	包合縫	圓筒形	鉢	(6.0)	—	—	—	—	片部切端、肩部に波浪文
316	616	包合縫	圓筒形	皿	(27.3)	(8.6)	—	小片	—	15世紀代、他の器と接続り付け。
317	616	包合縫	圓筒形	皿	(19.9)	9.5	—	小片	—	13世紀、要望の形、外側に右上がりの平行テクテ
318	616	包合縫	上解縫	皿	(24.0)	(10.9)	(22.9)	小片	—	13世紀、要望の形、外側に右上がりの平行テクテ
319	616	包合縫	圓筒形	皿	(3.2)	4.8	—	完存	—	静日、削り出し両面
320	616	包合縫	圓筒形	皿	(10.9)	5.95	4.35	2/5	完存	外削り花文、内削り四方彌。肥前系
321	SD1	SD1	上解縫	小皿	7.6	1.95	—	5/6	完存	手(く)ね、相撲目
322	516	包合縫	圓筒形	皿	(—)	(10.0)	—	若干	—	口周部を斜めに口済する。
323	516	包合縫	圓筒形	皿	(—)	(9.95)	—	若干	—	口周部を反対する。
324	516	包合縫	圓筒形	皿	(33.0)	9.5	(23.6)	1/8	わざか	产地不明
325	516	包合縫	圓筒形	皿	(31.0)	(6.3)	—	1/10	—	17世紀後半、半型造り成形
326	516	包合縫	圓筒形	皿	(11.2)	(5.1)	—	1/7	—	肥前系手組目、内削り四方彌
327	516	包合縫	上解縫	皿	(31.5)	(7.85)	—	1/4弱	—	肥前系手組目、内削り四方彌
328	516	包合縫	傘形	皿	(9.6)	3.5	—	—	—	つまみ完存 肥前系手組目
329	516	包合縫	圓筒形	皿	9.6	7.35	(4.7)	7/8	1/3	—
330	516	包合縫	圓筒形	皿	13.6	7.5	(5.65)	1/2	1/2	产地不明
331	516	包合縫	圓筒形	皿	(6.0)	—	若干	—	—	17世紀後半。半型造り成形
332	516	包合縫	圓筒形	皿	(32.5)	11.8	(12.8)	1/2	1/4弱	18世紀代
333	516	包合縫	圓筒形	皿	31.95	13.1	16.65	2/5少缺	完存	18世紀代
334	516	包合縫	圓筒形	皿	(26.1)	(21.0)	—	若干	—	体部丸判の18世紀代
B1	314	廻上西周	圓筒形 (底)	ハラ	長さ (底)	2.95	厚み 2.25	—	—	紙を握るためのハラ
<b>岡跡</b>										
335	11C	SD3	上解縫	皿	22.9	17.2	—	7/8	1/2	13世紀、壘型の形、外削りに平行タキテ
336	11C	SD3	上解縫	皿	(23.5)	(17.0)	—	5/7	—	13世紀上半期、13世紀、壘型の形、外削りに平行タキテ
337	11C	SD3	窓器	皿	(14.75)	(3.3)	—	1/7	—	13世紀
338	216	SK1	上解縫	皿	(18.6)	(3.9)	—	1/4	—	13世紀1/9
339	216	SK1	上解縫	皿	(16.9)	(5.8)	—	小片	—	14世紀代
340	216	包合縫	円筒形	皿	—	(5.2)	—	小片	—	中削り、1本巻きの細口。
341	216	包合縫	青磁	皿	—	(2.2)	5.3	—	—	中心両台完存 磁片部、16世紀代
342	216	SK1	上解縫	皿	(21.2)	(6.4)	—	1/8	—	16世紀、青はナガによる凸凹で表現。
343	11C	包合縫	窓器	身舟	—	(3.5)	—	1/9	—	口周部欠損 古墳時代
344	216	包合縫	白磁	皿	(14.0)	(3.4)	—	1/3	—	底部半完存 古墳の白磁瓶

遺物觀察表 6

射丸															
No	出土地区	通 横	種 別	器 種	直当 径cm	内区 径cm	巴文 径cm	珠文 径cm	周縁 幅cm	周縁 高cm	瓦当 厚cm	全長cm (保存長)	預存番	備 考	
T 1	214	SK 9	中世瓦	射丸瓦	(15.6)	(11.3)	7.6	0.8	1.45	1.0	1.75	(3.35)	瓦当下半のみ	射丸瓦中世Aタイプ	
T 2	214	SK 9	中世瓦	射丸瓦	(14.8)	(11.0)	8.0	0.9	1.9	1.0	1.5	(6.2)	瓦当左側2/3	射丸瓦中世Aタイプ	
T 3	214	SK 9	中世瓦	射丸瓦	(14.4)	(10.8)	7.9	0.8	1.6	1.0	1.5	(3.7)	瓦当右2/3	射丸瓦中世Aタイプ	
T 4	214	SK 9	中世瓦	射丸瓦	(14.6)	(10.7)	7.95	0.85	1.83	1.2	2.2	(3.6)	瓦当は保存	射丸瓦中世Aタイプ	
T 5	214	SK 9	中世瓦	射丸瓦	(14.7)	11.2	(8.0)	1.0	1.6	1.2	1.75	(8.1)	瓦当2/3は保存	射丸瓦中世Aタイプ	
T 6	214	SK 9	中世瓦	射丸瓦	(15.0)	(10.8)	8.1	0.8	1.9	1.1	1.95	(3.4)	瓦当右1/3	射丸瓦中世Aタイプ	
T 7	214	SK 9	中世瓦	射丸瓦	15.1	11.0	8.0	0.7	2.1	1.5	1.55	(11.65)	瓦当3/4	射丸瓦中世Aタイプ	
T 8	214	SK 9	中世瓦	射丸瓦	14.4	11.1	7.9	0.8	1.6~ 1.7	1.4	1.9	(8.4)	瓦当は保存	射丸瓦中世Aタイプ	
T 9	214	SK 9	中世瓦	射丸瓦	(15.3)	(11.8)	8.0	0.7	1.8	1.2	1.8	(3.8)	瓦当・周縁1/4	射丸瓦中世Aタイプ	
T 10	314	廟1西面	中世瓦	射丸瓦	(9.6)	(9.25)	(7.8)	0.9	1.8	1.2	1.8	(3.5)	瓦当下1/2	射丸瓦中世Aタイプ	
T 11	214	廟品	中世瓦	射丸瓦	(14.4)	(10.4)	(7.6)	0.7	1.9	1.1	1.5	(3.2)	瓦当1/4	射丸瓦中世Aタイプ	
T 12	214	SK 9	中世瓦	射丸瓦	—	—	—	—	—	—	—	(31.50) 側厚2.3 側長3.75	側厚2.3 側長3.75	射丸瓦中世Aタイプ コスモ人、瓦当は破片。	
T 60	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	15.0	10.3	7.5	0.75	1.9~ 2.3	0.8	2.1	(11.1)	瓦当保存	射丸瓦近世Aタイプ	
T 61	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	(15.0)	(10.8)	(7.4)	0.7	2.3	0.65	1.5	(5.75)	瓦当上半	射丸瓦近世Aタイプ	
T 62	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	15.25	11.7	9.2	1.0	2.7	0.7	1.4	(7.9)	瓦当は保存	射丸瓦近世Bタイプ	
T 63	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	(13.3)	(13.0)	9.0	1.0	1.75	0.7	2.3	(13.7)	瓦当1/3	射丸瓦近世Bタイプ	
T 64	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	15.5	12.9	9.15	0.9	1.85	0.85	1.6	(4.8)	瓦当は保存	射丸瓦近世Bタイプ	
T 65	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	(13.2)	(11.1)	9.1	0.85	2.1	0.9	1.65	(3.15)	瓦当下半	射丸瓦近世Bタイプ	
T 66	314	SE 3	近世瓦	射丸瓦	15.8	11.9	9.2	0.8	1.8~ 2.1	0.7	1.35	(16.9)	瓦当右側9.10 側厚1.31	射丸瓦近世Bタイプ	
T 67	314	SE 3	近世瓦	射丸瓦	15.7	11.85	9.1	0.9	1.95	0.75	1.3	(11.95)	瓦当周縁9.4	射丸瓦近世Bタイプ	
T 68	314	SE 3	近世瓦	射丸瓦	(15.6)	(11.9)	9.3	0.9	1.85	0.65	1.2	(10.95)	瓦当2/3	射丸瓦近世Bタイプ	
T 69	214	SK 9	中世瓦	射丸瓦	(15.4)	11.5	9.1	0.95	1.9	0.75	1.4	(3.6)	周縁1/2	射丸瓦近世Bタイプ	
T 70	314	SE 3	近世瓦	射丸瓦	(15.4)	(11.4)	(9.8)	0.9	2.0	0.7	1.4	(3.1)	瓦当左側9.10 側厚1.31	射丸瓦近世Bタイプ	
T 71	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	(14.6)	(10.9)	7.6	0.9	1.4	0.6	1.5	(2.7)	瓦当下3/4	射丸瓦近世2タイプ	
T 72	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	(14.9)	(11.25)	7.7	0.8	1.6	0.7	1.8	(2.4)	瓦当左半分	射丸瓦近世2タイプ	
T 73	—	—	近世瓦	射丸瓦	(14.8)	11.8	8.0	0.85	1.45	0.65	1.7	(4.8)	瓦当5/6	射丸瓦近世2タイプ	
T 74	—	—	近世瓦	射丸瓦	(14.4)	9.6	6.8	0.75	2.2	0.7	1.3	(3.4)	瓦当2/3	射丸瓦近世2タイプ	
T 75	314	—	近世瓦	射丸瓦	(14.0)	(10.8)	(7.0)	0.8	2.15	0.6	1.4	(2.2)	瓦当1/2弱	射丸瓦近世Dタイプ	
T 76	314	—	近世瓦	射丸瓦	(14.6)	10.2	7.0	0.85	2.1	0.65	1.5	(3.45)	瓦当3/4	射丸瓦近世Dタイプ	
T 77	314	—	近世瓦	射丸瓦	(14.4)	10.8	7.0	0.7	2.35	0.6	1.1	(2.9)	瓦当3/5	射丸瓦近世Dタイプ	
T 78	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	(14.4)	(10.0)	(5.5)	0.6	1.9	0.7	1.3	(7.5)	瓦当1/2弱	射丸瓦近世Dタイプ	
T 79	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	(9.5)	(5.85)	(4.0)	0.85	1.45	0.7	45 1.25	(9.05)	瓦当上半	射丸瓦近世Eタイプ	
T 80	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	14.15	10.6	7.8	0.6	1.6	0.7	1.7	(21.00)	側厚2.3/ 1.9	側厚2.3/ 1.9	射丸瓦近世Eタイプ
T 81	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	12.85	10.25	(9.0)	—	1.0~ 1.25	0.55	1.7	(3.2)	瓦当2/3	射丸瓦近世Eタイプ	
T 82	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	(14.6)	(10.3)	7.0	0.8	2.3	0.65	1.4	(30.5)	周縁剥離 瓦当左側 瓦当1/3	射丸瓦近世Eタイプ 剥離1.4cm	
T 83	4-2	私1經羅 瓦片	中世瓦	射丸瓦	(15.0)	(10.8)	(4.9)	0.8	2.2	0.6	1.65	(2.0)	瓦当1/4	射丸瓦中世Aタイプ	
T 84	514	—	中世瓦	射丸瓦	(15.0)	(11.0)	(7.4)	0.8	1.5~ 1.6	1.15	1.7	(6.55)	瓦当2/5	射丸瓦中世Aタイプ かえり 瓦片	
T 85	314	廟1西面	中世瓦	射丸瓦	(11.5)	(8.5)	(6.8)	0.5	1.4	0.8	2.0	(3.5)	瓦当1/3弱	射丸瓦中世Bタイプ	

## 七) 他の物

No	出土地区	通 横	種 別	器 種	直当 径cm	内区 径cm	巴文 径cm	珠文 径cm	周縁 幅cm	周縁 高cm	瓦当 厚cm	全長cm (保存長)	預存番	備 考
T 99	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	(4.0)	(3.3)	—	—	1~ 1.7	1~ 1.7	0.55	(1.5)	瓦当1/4	
T 100	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	(7.25)	5.0	—	—	1~ 1.5	1~ 1.5	1.1	(4.1)	瓦当は保存	
T 101	314	廟1西面	近世瓦	射丸瓦	(7.4)	5.0	—	—	1.2	0.3	1.0	(3.0)	瓦当保存	

遺物観察表7

No	出土 地区	道 橋	種 別	器 物	瓦当面 タブ	瓦当面 ヨコ幅 cm	内区 タブ cm	内区 ヨコ幅 cm	高様 タブ cm	周様 タブ cm	瓦当 厚cm	全長 cm	保存率	備 考
T25	216	-	中世瓦	新平瓦	4.3	25.0	2.2	19.7	1.1.2 7.0.9	1.0.7 7.0.9	1.95	(22.45)	後頭右側	軒平瓦中嵌Aタイプ
T26	216	SK9	中世瓦	新平瓦	4.5	(9.3)	2.4	(6.6)	1.1.3 7.0.9	1.0.0 7.0.9	1.75	(13.7)	瓦当左側1/3	軒平瓦中嵌Aタイプ
T27	216	SK9	中世瓦	新平瓦	3.9	(11.5)	2.0	(8.0)	1.1.0 7.0.9	1.0.8 7.0.9	1.35	(7.75)	瓦当左側1/3	軒平瓦中嵌Aタイプ
T28	216	-	中世瓦	新平瓦	4.3	(14.3)	2.7	(13.5)	1.0.8 7.0.9	1.0.85 7.0.9	1.8	(14.4)	瓦当面1/3	軒平瓦中嵌Aタイプ
T29	216	私 住 戸 上地	中世瓦	新平瓦	4.5	16.2 16.2 (28.4)	2.6	12.5	1.1.2 7.0.9	1.1.7 7.0.9	2.1	(16.0)	瓦当1/2弱 側面1/4	軒平瓦中嵌Aタイプ
T30	216	SK9	中世瓦	新平瓦	4.6	(10.3)	2.7	(10.3)	1.1.0 7.0.9	1.0.85 7.0.9	1.4	(7.0)	瓦当右側1/2	軒平瓦中嵌Aタイプ
T31	216	SK9	中世瓦	新平瓦	4.2	(12.2)	2.5	(9.2)	1. 1.0.5 7.0.9	1.0.9 7.0.9	1.95	(10.3)	瓦当右側の1/2	軒平瓦中嵌Aタイプ
T32	216	SK9	中世瓦	新平瓦	3.9	17.05	2.4	(24.7)	1.0.8 7.0.7	1.0.8 7.0.9	1.9	20.5	瓦当左側1/3	軒平瓦中嵌Aタイプ
T33	216	SK9	中世瓦 (瓦留)	新平瓦	3.9	(10.5)	2.0	(8.55)	1.1.05 7.0.9	1.0.95 7.0.9	2.1	(11.15)	瓦当中心のみ	軒平瓦中嵌Aタイプ
T34	216	SK9	中世瓦	新平瓦	4.4	26.55	2.6	20.7	1.0.7 7.0.9	1.0.7 7.0.9	2.1	(10.75)	瓦当は瓦留	軒平瓦中嵌Aタイプ
T35	216	SK9	中世瓦	新平瓦	3.9	25.5	1.8	19.1	1.1.1 7.0.9	1.0.7 7.0.9	1.65	(16.8)	1/2弱 瓦当 (瓦留)	軒平瓦中嵌Aタイプ
T36	216	SK9	中世瓦	新平瓦	4.2	(15.55)	2.4	(12.7)	1.0.9 7.0.9	1.0.8 7.0.9	1.5	(15.9)	瓦当左側1/2	軒平瓦中嵌Aタイプ
T37	216	SK9	中世瓦	新平瓦	4.5	(24.7)	2.5	(18.55)	1.1.2 7.0.9	1.0.8 7.0.9	1.7	(28.5)	瓦当3/4 半柱3/4	軒平瓦中嵌Aタイプ
T38	216	SK9	中世瓦	新平瓦	3.85	26.4	20.15	20.15	1.0.0 7.0.9	1.0.0 7.0.9	2.0	29.5	瓦当右側2/3	軒平瓦中嵌Aタイプ
T39	216	SK9	中世瓦	新平瓦	4.35	(15.3)	2.0	(12.2)	1.1.2 7.0.9	1.0.8 7.0.9	1.9	(8.8)	瓦当左側1/2	軒平瓦中嵌Aタイプ
T40	216	SK9	中世瓦	新平瓦	4.35	(12.65)	2.6	(9.1)	1.0.7 7.0.9	1.0.7 7.0.9	2.25	(14.3)	瓦当右側1/3	軒平瓦中嵌Aタイプ
T41	216	SK9	中世瓦	新平瓦	4.25	(10.1)	2.5	(7.9)	1.0.6 7.0.9	1.0.8 7.0.9	1.7	(19.7)	瓦当左側1/3	軒平瓦中嵌Aタイプ
T42	216	SK9	中世瓦 (瓦留)	新平瓦	4.0	(12.4)	2.4	(9.9)	0.9 7.0.9	0.6 7.0.9	1.8	(11.1)	瓦当右側1/3	軒平瓦中嵌Aタイプ, 開軒 瓦
T43	216	-	中世瓦	新平瓦	3.7	(10.9)	2.16	(10.62)	1.0.9 7.0.8	1.0.7 7.0.8	2.1	(13.9)	瓦当左側2/3	軒平瓦中嵌Aタイプ
T44	216	SK9	中世瓦	新平瓦	4.1	(7.55)	2.5	(7.5)	1.0.75 7.0.85	1.0.85 7.0.9	1.25	(8.8)	瓦当左側1/3	軒平瓦中嵌Aタイプ
T45	216	SK9	中世瓦	新平瓦	4.5	(8.4)	2.6	(11.8)	1.1.0 7.0.9	1.0.9 7.0.9	2	(12.0)	瓦当右側1/3	軒平瓦中嵌Aタイプ
T46	216	SK9	中世瓦	新平瓦	4.3	(9.5)	2.7	(7.0)	1.0.9 7.0.9	1.0.9 7.0.9	2.1	(7.7)	瓦当左側1/4	軒平瓦中嵌Aタイプ
T47	216	SK9	中世瓦	新平瓦	4.2	(9.2)	2.6	(7.7)	1.0.65 7.0.9	1.0.65 7.0.9	1.9	(5.4)	瓦当左側1/3	軒平瓦中嵌Bタイプ
T48	314	廻1西沿	近世瓦	新平瓦	5.1	(13.8)	3.1	(8.6)	1.1.25 7.0.8	1.0.7 7.0.8	2.1	(9.2)	瓦当右側1/3 半柱1/3	軒平瓦近世Aタイプ
T49	314	廻1西沿	近世瓦	新平瓦	4.1	(19.8)	3.1	(15.4)	1.0.65 7.0.8	1.0.65 7.0.9	1.3	31.15	瓦当右側2/3 半柱2/3	軒平瓦近世Aタイプ
T50	314	廻1西沿	近世瓦	新平瓦	5.15	(13.8)	3.2	(8.5)	1.1.15 7.0.8	1.0.8 7.0.9	1.25	(10.2)	瓦当左側1/3	軒平瓦近世Aタイプ
T51	314	SE3	近世瓦	新平瓦	3.7	17.9	2.4	(8.5)	1.1.0 7.0.6	1.0.6 7.0.5	1.0	(21.4)	瓦当1/2弱 側面1/4	軒平瓦近世Bタイプ
T52	314	廻1西沿	近世瓦	新平瓦	3.9	25.4	2.0	(16.0)	0.9 7.0.65	0.9 7.0.65	1.1	28.4	瓦当右側1/3 半柱1/3	軒平瓦近世Bタイプ
T53	314	廻1西沿	近世瓦	新平瓦	4.4	(17.6)	3.0	(13.2)	1.0.7 7.0.5	1.0.8 7.0.8	1.3	(10.0)	瓦当右側1/2	軒平瓦近世Cタイプ
T54	314	廻1西沿	近世瓦	新平瓦	4.5	(13.2)	2.8	(9.7)	1.0.9 7.0.6	1.0.6 7.0.7	1.65	(8.4)	瓦当左側1/2	軒平瓦近世Dタイプ
T55	314	-	中世瓦	新平瓦	-	(10.8)	2.0	(10.2)	1. 1.0.5	1. 1.0.5	2.1	(3.3)	瓦当左1/2	軒平瓦中嵌Aタイプ 複瓦
T56	314	廻1西沿	近世瓦	新平瓦	4.6	(17.1)	2.8	(12.4)	1.0.9 7.0.7	1.0.7 7.0.7	1.4	(12.7)	瓦当左1/2 複瓦	軒平瓦近世Dタイプ 複瓦
T57	314	廻1西沿	近世瓦	新平瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	焼瓦・写真のみ	

遺物觀察表 8

No.	出土 地點	道 構	様 別	器 種	全長 cm	鋒部 長cm	玉頭 長cm	鋒部 外側扁 度cm	鋒部 内側扁 度cm	玉頭部 外側扁 度cm	玉頭部 内側扁 度cm	鋒部 厚cm	残存率	備 考	
T13	2区C	SK9	中直瓦	瓦瓦	(28.9) (25.6)	3.3	(6.4)	(4.3)	(15.3)	(9.4)	5.3	11.0	2.1	玉頭完 成、鋒部 有目模・瓦集模	
T14	2区C	SD6	中直瓦	瓦瓦	31.65	28.55	3.1	7.0	5.8	13.25	11.4	5.6	11.3	2.2	鋒部外側扁 度1/3 鋒部内側扁 度1/2 1.6mm 完形
T15	2区C	SD6	中直瓦	瓦瓦	31.4	28.4	3.0	7.1	5.0	14.2	-	5.2	11.2	2.2	12.0mm 完形
T16	2区C	SD6	中直瓦	瓦瓦	32.5	28.9	3.6	(6.5)	-	13.3	11.0	5.6	12.0	2.8	12.0mm 完形
T17	2区C	SD6	中直瓦	瓦瓦	(29.8) (36.45)	3.35	7.15	-	(14.05)	-	5.5	11.4	1.9	鋒部1/4欠損 コビアA・瓦集模	
T18	2区C	SD6	中直瓦	瓦瓦	31.6	28.3	3.3	6.9	5.7	14.3	-	5.3	11.0	2.0	12.0mm 完形
T19	2区C	SD6	中直瓦	瓦瓦	32.25	28.5	3.75	7.6	6.6	14.9	12.3	6.3	11.2	2.7	12.0mm 完形
T20	2区C	SD6	中直瓦	瓦瓦	31.8	28.25	3.55	6.8	5.9	15.55	-	5.8	10.6	2.2	12.0mm 完形
T21	2区C	SD6	中直瓦	瓦瓦	32.25	28.9	3.35	7.1	5.9	15.2	9.0	5.4	11.6	2.4	完形
T22	2区C	SD6	中直瓦	瓦瓦	32.0	28.65	3.35	7.4	6.5	13.5	12.0	5.9	11.0	2.4	12.0mm 完形
T23	2区C	SD6	中直瓦	瓦瓦	32.25	28.9	3.95	7.2	6.4	13.6	-	5.8	12.0	2.3	12.0mm 完形
T24	2区C	SD6	中直瓦	瓦瓦	31.7	27.2	3.6	6.3	5.6	14.9	12.4	5.3	12.6	2.25	完形
T25	3区C	施1西面	直瓦	瓦瓦	28.1	24.4	3.7	6.6	5.7	(7.6)	(5.6)	5.3	12.0	1.8	玉頭完存 コビアB・布目机
T26	3区C	施1西面	直瓦	瓦瓦	(27.8)	23.5	4.3	6.4	4.9	14.4	-	5.5	12.2	1.9	1.6mm 3/5欠損 コビアB・布目机
T27	3区C	—	直瓦	瓦瓦	(25.9)	(22.0)	3.9	6.8	5.0	(14.7)	(10.4)	5.25	(11.6)	1.9	鋒部弧度失 コビアB・布目机
T28	3区C	SE3	直瓦	瓦瓦	28.35	24.85	3.5	6.6	5.8	14.3	-	5.0	11.8	1.45	12.0mm 完形
T29	3区C	SE3	直瓦	瓦瓦	28.7	25.0	3.7	6.8	5.8	15.0	9.9	5.2	11.3	2.6	鋒部1/9欠損 コビアB・布目机
平瓦、面瓦、鬼瓦															
No.	出土 地點	道 構	様 別	器 種	様面部 幅cm	弧面部 幅cm	最大 幅cm	厚み cm	全長 cm	残存率	備 考				
T40	3区K	SK9	中直瓦	平瓦	(10.0)	(4.6)	(24.6)	2.15	(30.1)	—	鋒部右側1/2 鋒部左側1/2				
T49	3区K	SK9	中直瓦	平瓦	(18.2)	25.3	25.3	2.9	29.8	—	鋒部右側1/2 鋒部左側1/2				
T50	3区K	SK9	中直瓦	平瓦	—	(16.15)	(17.5)	2.9	(13.0)	—	鋒部左側1/3 鋒部右側1/3				
T51	2区C	SK9	中直瓦	平瓦	—	(20.3)	25.55	2.5	(13.5)	—	鋒部左側1/3 鋒部右側1/2				
T52	2区C	SK9	中直瓦	平瓦	23.0	—	24.2	2.35	(21.4)	—	鋒部左側1/2 鋒部右側1/2				
T53	2区C	SK9	中直瓦	平瓦	—	(21.55)	25.0	2.3	(26.0)	—	鋒部左側1/2 鋒部右側1/2				
T54	3区C	施1西面	中直瓦	平瓦	—	23.8	23.8	2.0	(26.3)	—	鋒部左側1/2				
T55	3区C	施1西面	中直瓦	平瓦	(6.9)	(10.8)	(12.5)	1.9	28.05	—	左側1/4				
T56	3区C	施1西面	中直瓦	平瓦	25.2	27.2	27.2	2.0	29.8	—	鋒部左側1/4				
T57	3区C	施1西面	中直瓦	平瓦	—	26.4	26.4	1.6	(25.4)	—	鋒部左側 全側1/3				
T58	3区C	SE3	直瓦	平瓦	23.15	(14.2)	24.1	1.7	28.05	—	鋒部左側 全側1/3				
T59	3区C	SE3	直瓦	平瓦	(19.9)	24.7	24.7	1.65	26.0	—	12.0mm 完形				
T60	3区C	SE3	直瓦	平瓦	23.0	24.75	24.75	2.1	27.4	—	12.0mm 完形				
T61	6区K	SK1	直瓦	平瓦	—	(13.0)	(16.1)	2.35	(23.0)	—	鋒部左側1/4				
T62	6区K	SK1	直瓦	平瓦	(1.4)	(14.5)	(14.5)	3.05	(25.15)	—	鋒部左側1/4				
T63	6区K	SK1	直瓦	平瓦	(10.3)	(4.8)	(13.2)	2.6	29.7	—	鋒部左側 全側1/3				
T64	6区K	SD1	直瓦	平瓦	(17.5)	—	(17.5)	2.25	(18.25)	—	鋒部左側2/5				
T65	4 - 1区	P1	直瓦	平瓦	22.2	(23.8)	(23.8)	1.9	28.9	—	鋒部左側1/5 鋒部右側1/5				
T66	5区	SD1	直瓦	平瓦	(10.2)	—	(11.6)	2.25	(16.8)	—	鋒部左側1/2				
T67	2区C	粘土耐熱 瓦	中直瓦	瓦瓦	(5.0)	—	(8.6)	2.5	(7.9)	—	鋒部左側1/2				
T68	3区C	施1西面	直瓦	平瓦	7.15	10.4	10.4	1.65	13.6	—	瓦面需要有				
T69	2区C	SK9	中直瓦	鬼瓦	10.9	4.5	10.4	3.6	—	—	—				
T70	—	—	直瓦	瓦瓦	(12.4)	(8.2)	(12.4)	2.25	—	石磚一部残存	—				

遺物觀察表 9

金屬製品								
No	出 土 地 区	出土遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)		保 存	備 考
					長さ	幅	厚み	その他
M 1	4 - 1 IX	木槧	鉄製品	和打	(3.5)	0.4~ 0.2	0.3	頭部欠損 頭部・下 端大抵
M 2	4 - 1 IX	木槧	鉄製品	圓筒形	(3.6)	4.00±28 0.1	0.3	頭部下端 先端欠損
M 3	4 - 1 IX	木槧	鉄製品	圓筒形	3.9	0.3	3.9	頭部缺 頭部欠損
M 4	4 - 1 IX	木槧	鉄製品	神押形	全長5.5 0.5	4.00±13 0.35	0.13~ 0.25	ほぼ完存 部分材
M 5	2 IX	SK	鉄製品	圓筒形	現存 (3.15)	頭部1.1 0.35	頭部5 0.42	頭部欠損
M 6	4 - 1 IX	木槧	鉄製品	圓筒形	4.7	4.00±3 0.1	0.38	頭部一部 欠損
M 7	3 IX	廟 1 西邊	鉄製品	圓筒形	現存 (0.0)	頭部1.1 0.35	頭部5 0.42	完形
M 8	2 IX	P63	鉄製品	和打	(9.3)	1.15~ 0.25	0.8	頭部・下 端欠損
M 9	2 IX	P14	鉄製品	不明	頭部5.3	1.0	本体5.75 有底鐵盤 0.25	頭部・部 分材
M10	2 IX	SD-6	鉄製品	不明	6.7	7.5	0.4	完形
M11	2 IX	SD-7	鉄製品	不明	現存 (9.45)	7.0	0.8	?
M12	4 - 1 IX	廟 1 東邊	鉄製品	キセロ	3.9	1.25	0.95	完形
M13	4 - 2 IX	SE 6	鉄製品	全長 身をなす 形	(12.05) (11.90)	頭部0.75	~	吸い口の 内側に附 着した形
M14	2 IX	SD-6	鉄製品	丸棒	6.2	0.5~1~ 0.2	~	M 9 と同一個体
M15	2 IX	SD-6	鉄製品	丸棒	~	~	~	元施道資
M16	2 IX	SD-6	鉄製品	スリップ	~	~	~	瓦集から出土
M17	2 IX	P28	鉄製品	スリップ	~	~	~	~
M18	2 IX	SK 9	鉄製品	スリップ	~	~	~	~
石製品								
No	出 土 地 区	出土遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)		保 存	備 考
					長さ	幅		
S 1	2 IX	P66	石製品	火輪	~	24.7	16.6	
S 2	2 IX	P151	石製品	火輪	~	27.0	17.2	
S 3	3 IX	P251	石製品	火輪	12.7	23.0	9.8	
S 4	3 IX	廟 1 西邊	石製品	火輪	22.4	15.1	9.5	
S 5	3 IX	廟 1 西邊	石製品	火輪	28.5	17.6	11.8	
S 6	2 IX	P183	石製品	方柄火輪	27.4	22.0	19.7	塊田石 灰輪
S 7	3 IX	廟 1 西邊	石製品	方柄火輪	27.0	26.0	14.5	塊田石
S 8	3 IX	廟 1 西邊	石製品	火輪	9.7	6.0	1.2	
S 9	6 IX	SE11	石製品	台座	23.4	29.8	23.2	宝鏡山略
S10	4 - 2 IX	SE 5	石製品	火輪	~	26.3	20.9	
S11	4 - 1 IX	SE 4	石製品	火輪	32.5	19.0	17.2	
S12	6 IX	SE11	石製品	火輪	29.7	29.7	9.5	
S13	6 IX	SE10	石製品	火輪	29.0	12.5	9.9	
S14	6 IX	SE10	石製品	火輪	17.4	12.9	10.6	
S15	6 IX	SE11	石製品	方柄火輪	30.5	24.5	19.0	塊田石
S16	6 IX	SE11	石製品	方柄火輪	36.7	25.5	17.8	塊田石
S17	6 IX	SE11	石製品	方柄火輪	30.9	20.0	11.5	塊田石
S18	6 IX	SE11	石製品	方柄火輪	25.7	24.8	15.5	塊田石 灰輪
S19	~	~	石製品	方柄火輪	25.8	25.9	18.5	塊田石
S20	4 - 2 IX	火輪	石製品	火輪	~	11.3	9.0	
S21	2 IX	P79	石製品	火輪	18.7mm	12.9mm	2.5mm	0.6g
S22	2 IX	SD12	石製品	火輪	23.0mm	20.2mm	2.6mm	1.1g
S23	2 IX	SK 9	石製品	火輪	23.5mm	23.0mm	2.7mm	1.62g
回 陶 - 全國 製品 / 石製品								
No	出 土 地 区	出土遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)		保 存	備 考
					長さ	幅		
M 8	2 IX	SX 1	鉄製品	盤	全長4.05	0.95	本体 0.64 脚 0.72	ほぼ完存
M11	2 IX	無標	鉄製品	不明	現存 (4.25)	0.92	0.42	殆のみ残 存
S20	2 IX	-	石製品	方柄火輪	24.2	23.7	12.3	

遺物觀察表10

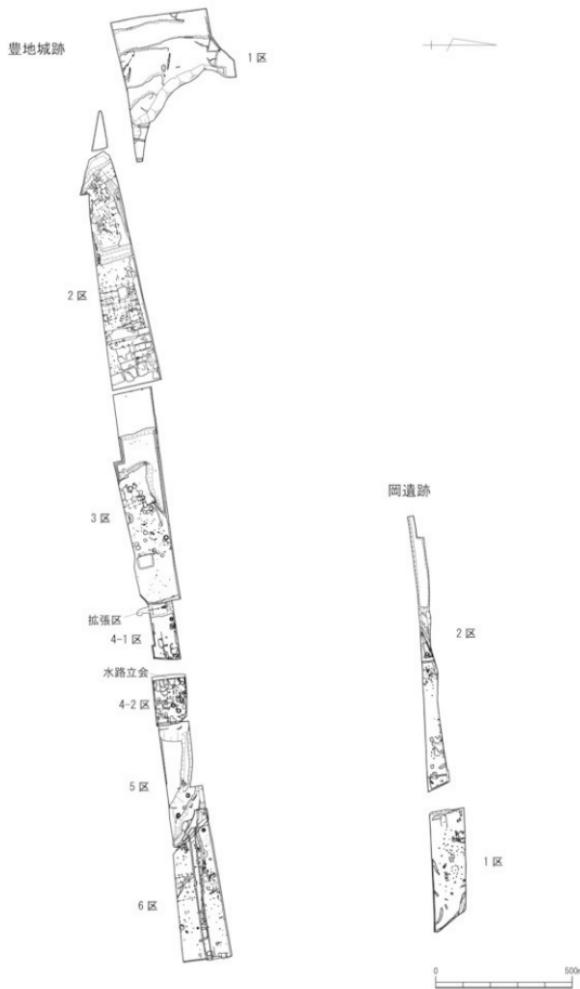
品名	地区	構造	種別	器種	法量(㎤)						残存	種類	
					口 徑	器 高	底 径	長さ	幅	厚み	その他		
W1 2区 SK9 木製品 細のくれ板	-	-	-	(48.25)	1.55	1.8	-	-	-	-	光面底欠損	スギ	
W2 2区 SK9 木製品 細のくれ板	-	-	-	21.7	3.35	0.9	-	-	-	-	下端欠損	スギ	
W3 2区 SK9 木製品 細のくれ板	-	-	-	21.8	3.35	0.9	-	-	-	-	光面底欠損	スギ	
W4 2区 SK9 木製品 細のくれ板	-	-	-	(10.00)	3.8	1.0	-	-	-	-	光面底欠損	スギ	
W5 2区 SK9 木製品 木端	-	-	-	7.4	6.4	1.1~1.5	-	-	-	-	マツ属根管保存率		
W6 2区 SK9 木製品 角材	-	-	-	7.6	5.3	2.5	-	-	-	-	光面下端欠損	マツ属根管保存率	
W7 3区 SE2 木製品 純桐	-	-	-	35.7	W12.20	W10.8~11.6	-	-	-	-	約の深さと柄は直角	アセビ	
W8 3区 SE2 木製品 ?	-	-	-	18.1	4.4	1.4	W5.0~W6.0	-	-	-	光面底欠損	ムクノキ	
W9 3区 SE3 木製品 純桐	-	-	-	(2.37)	-	-	W0.0	-	-	-	コナラ属アカゼヒ葉		
W10 3区 SE2 木製品 純桐	-	-	-	23.5	(9.5)	(3.0)	-	-	-	-	コナラ属アカゼヒ葉		
W11 3区 SE3 木製品 角材	-	-	-	(23.0)	2.6	0.9	-	-	-	-	光面底欠損	スギ	
W12 3区 SE3 木製品 大丸材	-	-	-	21.3	5.0	2.3~2.5	W2.5~W3.0	-	-	-	マツ属根管保存率		
W13 3区 帽1西迎 木製品 建築用材	-	-	-	199.1	9.7	10.25	-	-	-	-	2部品あり	リムジン	
W14 3区 帽1西迎 木製品 薄板	-	-	-	(18.7)	5.6	0.28	-	-	-	-	下端欠損	ツガ属	
W15 3区 帽1西迎 木製品 薄板	-	-	-	(29.6)	11.5	0.3	-	-	-	-	光面底欠損	マツ属根管保存率	
W16 3区 帽1西迎 木製品 薄板	-	-	-	45.0	11.5	0.25~0.33	-	-	-	-	光面底欠損	マツ属根管保存率	
W17 3区 帽1西迎 木製品 材か?	-	-	-	77.0	11.9	1.1	-	-	-	-	1/4欠損	ツガ属	
W18 3区 帽1西迎 木製品 薄板	-	-	-	(20.25)	(2.65)	0.2	-	-	-	-	?	ニノキ	
W19 3区 帽1西迎 木製品 薄板材 (楕)	-	-	-	(16.85)	3.3	0.2	-	-	-	-	?	ニノキ	
W20 3区 帽1西迎 木製品 薄板材 (楕)付木か?	-	-	-	(9.3)	4.0	1.5~1.8	W0.38	-	-	-	同一側欠損	ニノキ	
W21 3区 帽1西迎 木製品 薄板	-	-	-	5.1	3.2	5.1	0.7	-	-	-	?	ツガ属	
W22 3区 帽1西迎 木製品 ?	-	-	-	6.9	2.6	1.2	-	-	-	-	光面底欠損	マツ属根管保存率	
W23 3区 帽1西迎 木製品 薄板材の調査	-	-	-	-	32.3	10.15	0.6	-	-	-	光面底欠損	マツ属根管保存率	
W24 3区 帽1西迎 木製品 薄板	-	-	-	-	(49.25)	4.0	0.35	-	-	-	?	ニノキ	
W25 3区 帽1西迎 木製品 木端材 (楕)	-	-	-	-	17.35	3.8	3.6	-	-	-	光面(?)	マツ属根管保存率	
W26 3区 帽1西迎 木製品 角材	-	-	-	-	12.7	4.9	2.85	-	-	-	1/4欠損	コナラ属アカゼヒ葉	
W27 3区 帽1西迎 木製品 角材	-	-	-	-	13.4	4.8~6.2	3.5	-	-	-	1/3欠損	マツ属根管保存率	
W28 3区 帽1西迎 木製品 角材	-	-	-	-	(15.2)	5.7	4.65	-	-	-	梢円形の輪郭	マツ属根管保存率	
W29 3区 帽1西迎 木製品 小丸材	-	-	-	-	8.8	2.2	2.2	-	-	-	?	マツ属根管保存率	
W30 3区 帽1西迎 木製品 小丸材	-	-	-	-	3.0	(2.2)	1.25	-	-	-	?	マツ属根管保存率	
W31 3区 帽1西迎 木製品 角材	-	-	-	-	11.7	12.0	6.0	-	-	-	1/2欠損	マツ属根管保存率	
W32 3区 帽1西迎 木製品 大丸材 (楕)	-	-	-	-	(17.0)	3.25	3.5	-	-	-	光面底欠損	マツ属根管保存率	
W33 3区 帽1西迎 木製品 半丸丸材 (楕)か?	1.8	-	-	-	14.3	1.8	1.15	-	-	-	1/4欠損	半丸丸材	
W34 3区 帽1西迎 木製品 角材	-	-	-	-	14.0	8.4	1.85	-	-	-	右斜め欠損	マツ属根管保存率	
W35 3区 帽1西迎 木製品 ?	-	-	-	-	(11.75)	7.5	7.5	-	-	-	上端欠損	スギ	
W36 3区 帽1西迎 木製品 ?	-	-	-	-	(13.45)	7.5	1.3	-	-	-	上端欠損	スギ	
W37 3区 帽1西迎 木製品 ?	-	-	-	-	(13.35)	4.45	1.2	-	-	-	上端欠損	スギ	
W38 3区 帽1西迎 木製品 角材	-	-	-	-	7.0	-	0.95	-	-	-	?	ニノキ	
W39 3区 帽1西迎 木製品 建築用材	-	-	-	-	2.15	17.1	0.7	-	-	-	一部端欠損	ニノキ	
W40 3区 帽1西迎 木製品 角手	-	-	-	-	-	16.3	2.65	2.3	W2.45	W1.85	-	中間端欠損	マツ属根管保存率
W41 2区 SD5 木製品 板材	-	-	-	-	(15.85)	3.75	1.7	-	-	-	?	シノダ	
W42 2区 SD5 木製品 板材	-	-	-	-	6.5	2.0	1.8	-	-	-	光面底欠損	マツ属根管保存率	
W43 2区 SD5 木製品 板材	-	-	-	-	66.9	12.3	1.95	-	-	-	マツ属根管保存率		
W44 2区 SD5 木製品 大丸材	-	-	-	-	(43.65)	8.25	7.25	-	-	-	コナラ属アカゼヒ葉		
W45 2区 SD5 木製品 カタケ	-	-	-	-	(28.2)	10.8	13.6	-	-	-	?	マツ属根管保存率	
W46 2区 SD5 木製品 建築用材	-	-	-	-	-	63.3	9.4	9.6	-	-	-	中間端欠損	マツ属根管保存率
W47 2区 SD5 木製品 カタケ	-	-	-	-	-	27.7	11.5	11.8	-	-	-	?	マツ属根管保存率
W48 2区 SD5 木製品 棒	-	-	-	-	(12.4)	4.1	4.0	W1.05	W1.85	W1.85	上端欠損	マツ属根管保存率	
W49 2区 SD6 木製品 木端	-	-	-	-	64.75	6.6~7.65	0.45	-	-	-	上端欠損	スギ	
W50 2区 SD6 木製品 建築用材	(9.2)	(3.95)	(4.5)	-	-	-	-	-	-	-	口端1/2欠損	カマシダ属イヌシダ	
W51 2区 SD6 木製品 建築用材	14.2?	7.5	7.2	-	-	-	-	-	-	-	口端1/4欠損	クリ	
W52 2区 SD6 木製品 建築用材	(16.0)	(5.4)	(7.4)	-	-	-	-	-	-	-	口端1/2欠損	クリ	
W53 2区 SD6 木製品 建築用材	6.1	4.3	5.1	-	-	-	-	-	-	-	?	ニノキ	
W54 2区 SD6 木製品 被着材	-	-	-	-	-	26.5	5.0	0.18	-	-	?	?	
W55 2区 SD6 木製品 被着材	-	-	-	-	-	26.4	4.05	0.2	-	-	?	?	
W56 2区 SD6 木製品 被着材	-	-	-	-	-	26.4	4.35	0.2	-	-	?	?	
W57 2区 SD6 木製品 被着材	-	-	-	-	-	26.5	4.05	0.17	-	-	?	?	
W58 2区 SD6 木製品 被着材	-	-	-	-	-	22.0	4.95	0.17	-	-	?	?	
W59 2区 SD6 木製品 板材	-	-	-	-	-	21.8	3.75	0.8	-	-	?	ニノキ	
W60 2区 SD6 木製品 板材	-	-	-	-	(11.2)	4.7	0.15~0.25	-	-	-	?	?	

遺物觀察表11

No.	地区	遺 横	種 別	器 種	遺 量 (m)						残 存	種 様	
					口 径	器 高	底 径	長 度	幅	厚 み			
W58	2 区 SD-6	木製品	樹脂	—	—	4.9	—	2.1	0.85	—	当 古代用 火把	マツ属樹脂管束巻	
W59	2 区 SD-6	木製品	足形折色脚	—	5.1	—	—	—	7	0.85	—	一部欠損 毛 素	
W60	2 区 SD-6	木製品	板材	—	—	—	13.7	5.3	1.7	0.95	—	光澤浮彫 桃	
W61	2 区 SD-6	木製品	板材	—	—	—	(15.07)	4.02	1.7	—	—	光澤浮彫 桃	
W62	2 区 SD-6	木製品	板	—	—	—	16.2	7.65	1.2	—	—	光澤欠損 桃	
W63	2 区 SD-6	木製品	板	—	—	—	16.4	7.6	0.9	—	—	光澤欠損 桃	
W64	2 区 SD-6	木製品	板	—	—	—	16.5	8.1	1.5	—	—	光澤欠損 桃	
W65	2 区 SD-6	木製品	板	—	—	—	16.7	8.05	0.95	—	—	光澤欠損 桃	
W66	2 区 SD-6	木製品	板	—	—	—	(17.2)	11.7	5.6	0.9	—	—	光澤欠損 桃
W67	2 区 SD-6	木製品	板	—	—	—	17.05	3.1	0.39	—	—	光澤欠損 桃	
W68	2 区 SD-6	木製品	板	—	—	—	47.3	4.1	0.17	—	—	光澤欠損 桃	
W69	2 区 SD-6	木製品	角材	—	—	—	11.4	7.8	0.35	—	—	光澤欠損 桃	
W70	2 区 SD-6	木製品	角材	—	—	—	(7.2)	10.2	10.2	0.2	—	—	光澤欠損 桃
W71	2 区 SD-6	木製品	角材	—	—	—	(11.8)	2.45	2.0	—	—	光澤欠損 桃	
W72	2 区 SD-6	木製品	角材	—	—	—	54.1	3.1	0.51	—	—	光澤欠損 桃	
W73	2 区 SD-6	木製品	角材	—	—	—	62.3	2.7	3.0	—	—	光澤欠損 桃	
W74	2 区 SD-6	木製品	丸材	—	—	—	109.3	8.2	8.1	—	—	光澤欠損 桃	
W75	2 区 SD-6	木製品	丸材	—	—	—	128.9	30.3	14.3	—	—	光澤欠損 桃	
W76	2 区 SD-6	木製品	角材	—	—	—	—	—	—	—	—	—	光澤 條
W77	2 区 SD-6	木製品	漆器	—	(8.9)	(1.8)	(5.17)	—	—	—	—	—	口徑 1/2 底径 3/4
W78	2 区 SD-6	木製品	漆器	—	1.2	35.0	—	—	1.2	—	—	—	漆板 1/8
W79	2 区 SD-6	木製品	漆の玉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	カキノキ
W80	2 区 SD-6	木製品	極のくれ板	(17.0)	—	(17.5)	12.15	7.2	0.85	—	下端欠損	ヒノキ	
W81	2 区 SD-6	木製品	板	—	—	—	(10.8)	4.55	1.2	—	—	—	光澤欠損 桃
W82	2 区 SD-6	木製品	板	—	—	—	9.8	8.9	1.8	—	—	—	光澤欠損 桃
W83	2 区 SD-6	木製品	板材	—	—	—	(22.2)	(3.5)	1.0	—	—	—	光澤欠損 桃
W84	2 区 SD-6	木製品	板材	—	—	—	(15.3)	(7.6)	1.8	—	—	—	光澤欠損 桃
W85	2 区 SD-6	木製品	板材	—	—	—	(17.3)	8.1	6.5	—	—	—	光澤欠損 桃
W86	2 区 SD-6	木製品	角材	—	—	—	(8.7)	8.1	5.75	—	—	—	光澤欠損 桃
W87	2 区 SD-6	木製品	建築部材	—	—	—	(9.1)	(6.4)	(3.4)	—	—	—	丸太のみ 丸既存
W88	2 区 SD-6	竹	竹筒	—	2.8	—	—	—	2.8	3.2	—	—	竹筒
W89	4~5 区 SE-4	木製品	圓筒の底板	—	—	—	11.7	11.5	0.3	—	—	—	ヒノキ等の木質
W90	4~5 区 SE-4	木製品	圓筒の底板	—	—	—	12.68	11.6	0.45	—	—	—	ヒノキ等の木質
W91	6 区 SE10	木製品	板	—	—	—	93.2	11.5	6.0	—	—	—	マツ科マツ属(二重板)
W92	6 区 SE10	木製品	板	—	—	—	91.1	6.3	6.0	—	—	—	マツ科マツ属(二重板)
W93	6 区 SE10	木製品	板	—	—	—	91.35	5.0	4.8	—	—	—	マツ科マツ属(二重板)
W94	6 区 SE10	木製品	板	—	—	—	91.1	6.3	4.9	—	—	—	マツ科マツ属
W95	4~5 区 建築 3	木製品	極の底板	—	—	—	26.5	9.3	0.8	—	—	—	スギ材スギ属
W96	6 区 SD-1	木製品	漆桶	(13.6)	(2.4)	—	—	—	—	—	—	—	漆桶 1/3 口付クリ属
W97	6 区 SD-1	木製品	野地桶	—	—	—	20.0	6.8	0.4	—	—	—	ヒノキ科ヒノキ属
W98	6 区 SD-1	木製品	野地桶	—	—	—	8.3	1.8	0.3	—	—	—	ヒノキ科ヒノキ属
W99	4~5 区 建築 1	木製品	板の面板	—	—	—	9.3	9.4	0.8	—	—	—	マツ科マツ属(二重板)
W100	4~5 区 建築 1	木製品	板面	—	—	—	28.2	(13.0)	0.8	—	—	—	ヒノキ科ヒノキ属
W101	4~5 区 建築 1	木製品	釘子	—	—	—	22.3	7.2	0.8	—	—	—	ヒノキ科ヒノキ属
W102	4~5 区 建築 1	木製品	漆桶	—	—	—	24.5	6.0	0.6	—	—	—	ヒノキ科ヒノキ属
W103	4~5 区 建築 1	木製品	漆桶	—	—	—	22.8	8.8	2.55	—	—	—	漆桶と漆 の一部欠損
W104	4~5 区 建築 1	木製品	中ぐりの下	—	—	—	22.1	7.2	2.2	—	—	—	ヒノキ科ヒノキ属
W105	4~5 区 建築 1	木製品	漆桶	—	—	—	(5.8)	10.55	2.0	—	—	—	1/2
W106	4~5 区 建築 1	木製品	漆桶	—	—	—	17.1	12.2	0.9	—	—	—	ヒノキ科ヒノキ属
W107	4~5 区 建築 1	木製品	板材	—	—	—	14.6	1.2	0.5	—	—	—	スギ材スギ属
W108	4~5 区 建築 1	木製品	板材	—	—	—	33.4	2.4~	0.7	—	—	—	スギ材スギ属
W109	4~5 区 建築 1	木製品	漆	—	—	漆	44.2+	10.7	漆板 2.1	—	—	—	漆板の一部 漆の一部欠損
W110	3 区 P2H1	木製品	漆	—	—	漆	—	—	漆板 2.1	—	—	—	漆板の一部 漆の一部欠損
W111	3 区 P2H1	木製品	漆	—	—	漆	—	—	漆板 2.1	—	—	—	漆板の一部 漆の一部欠損

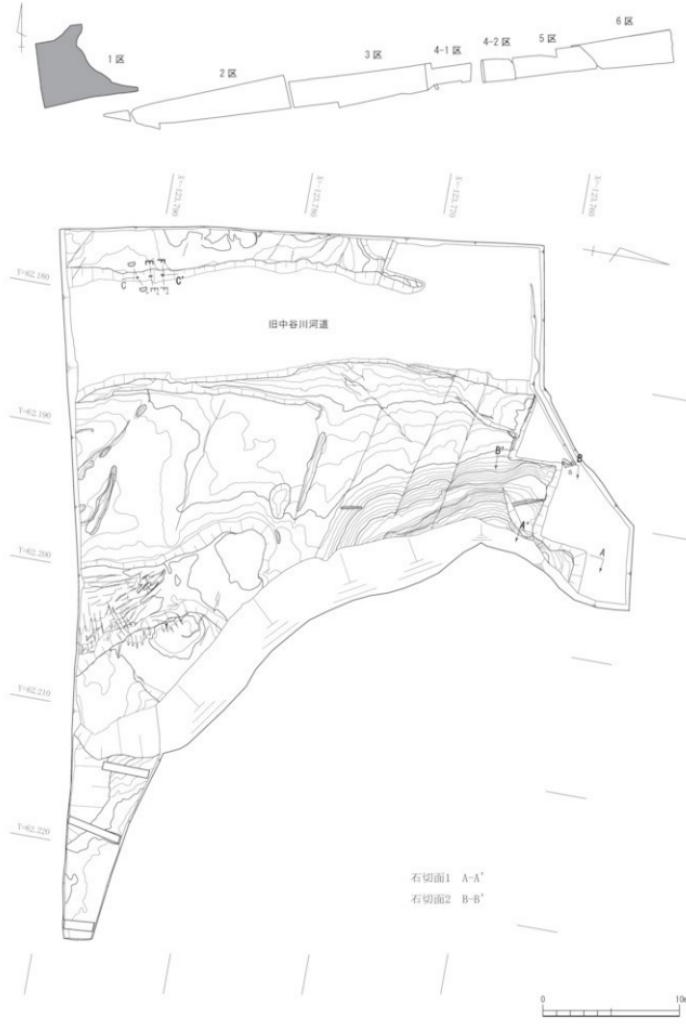
# 図 版



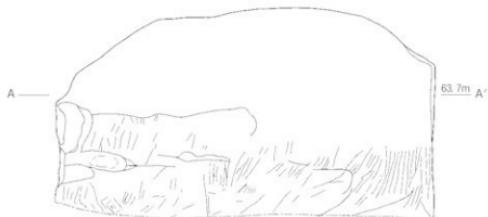


豊地城跡・岡遺跡 調査区全体図

图版 2



石切面 1



石切面 2



豊地域路 1 区 遺構平・断面図

図版 4

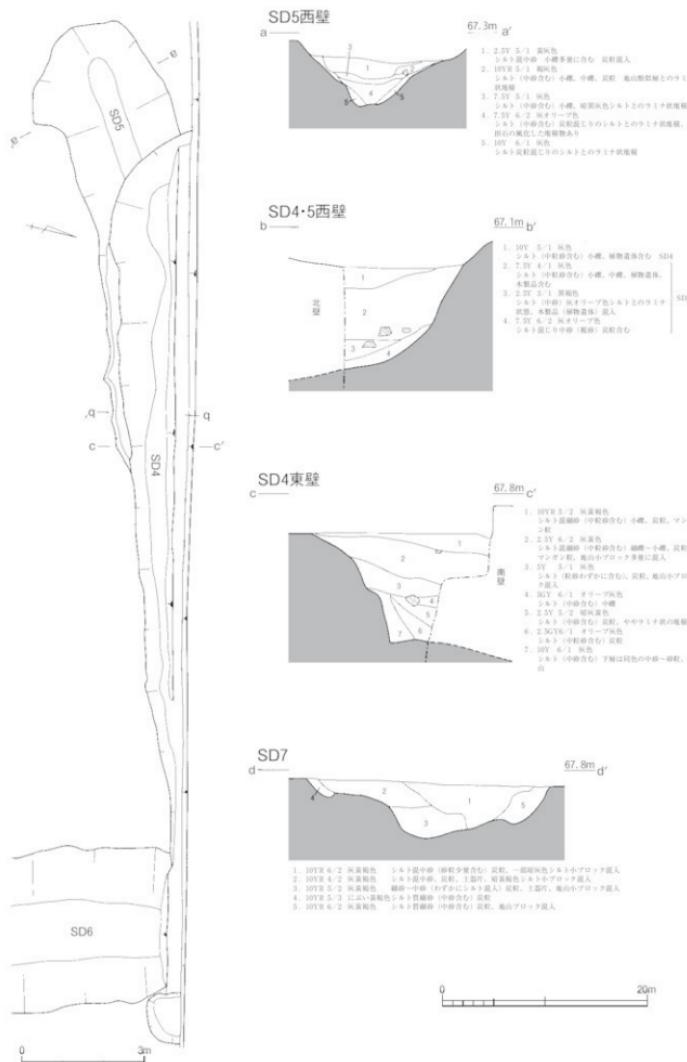


豊地城跡 2区 全体図

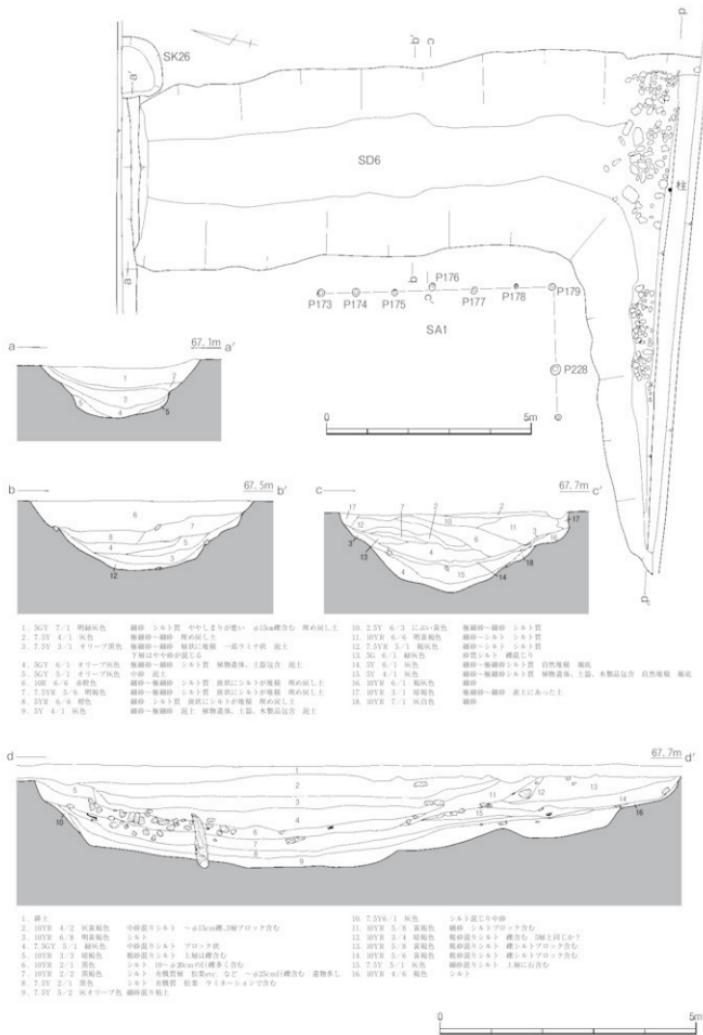


豊地城跡 2区 西半遺構配置図

圖版 6

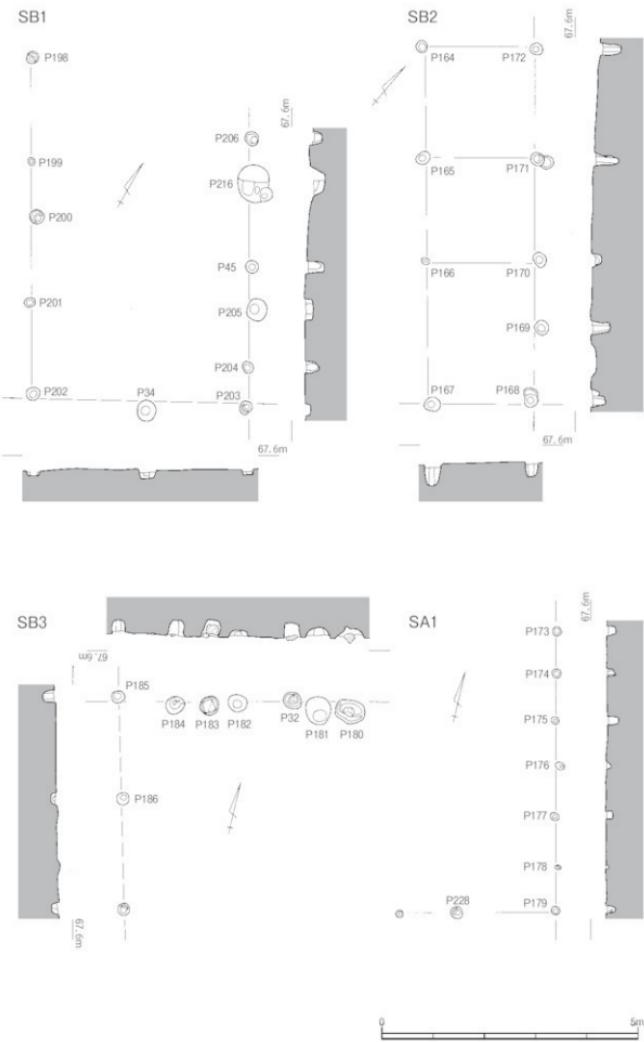


豊地城跡 2 区 遺構平・断面図



豊地城跡 2 区 道構平・断面図

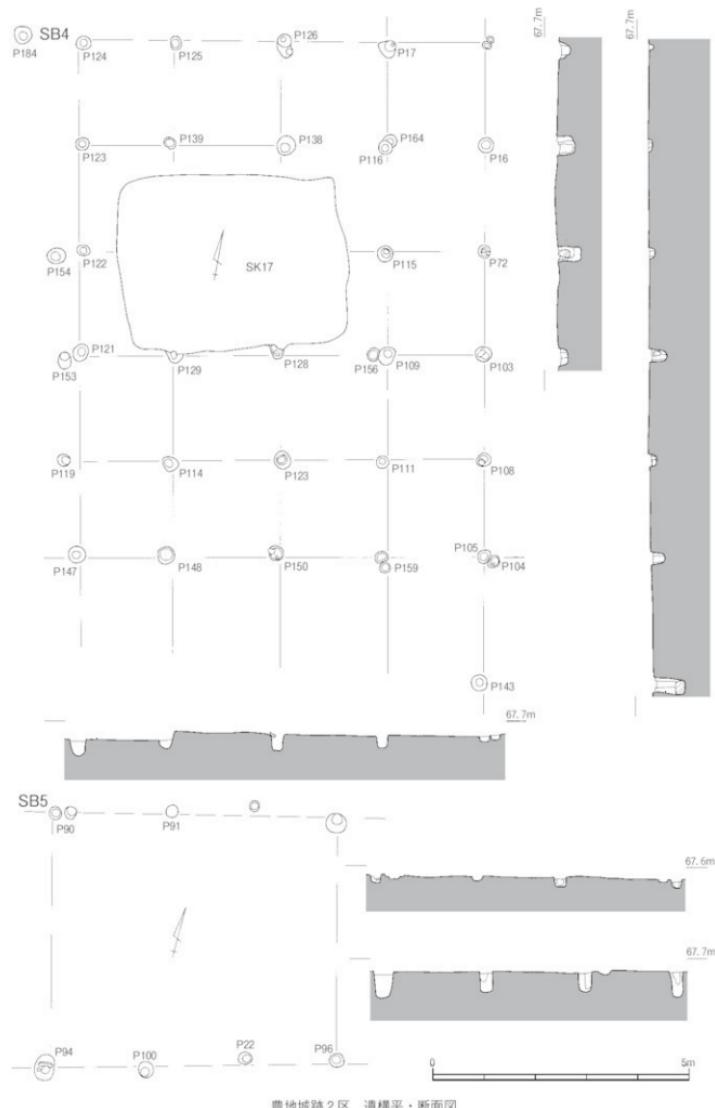
図版 8



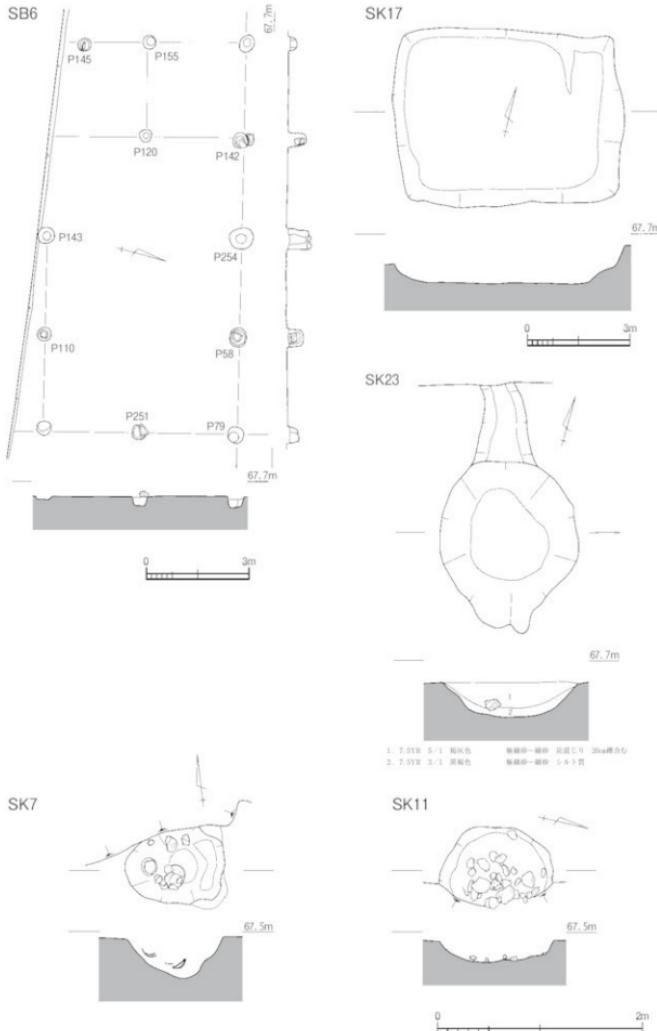
豊地域路 2 区 遺構平・断面図



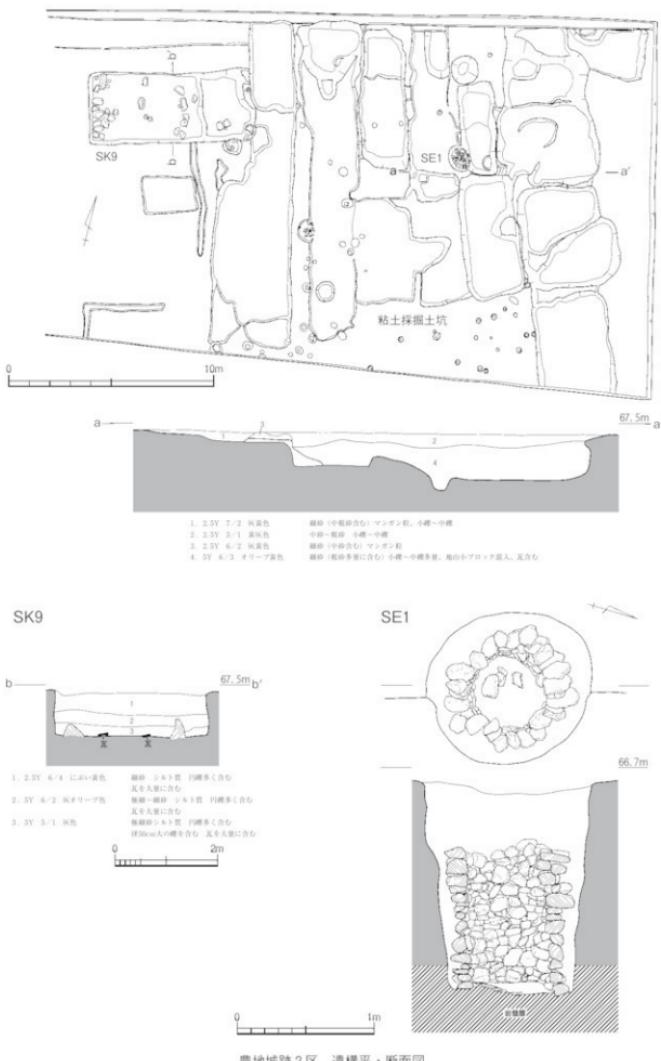
図版10



豊地域路2区 遺構平・断面図

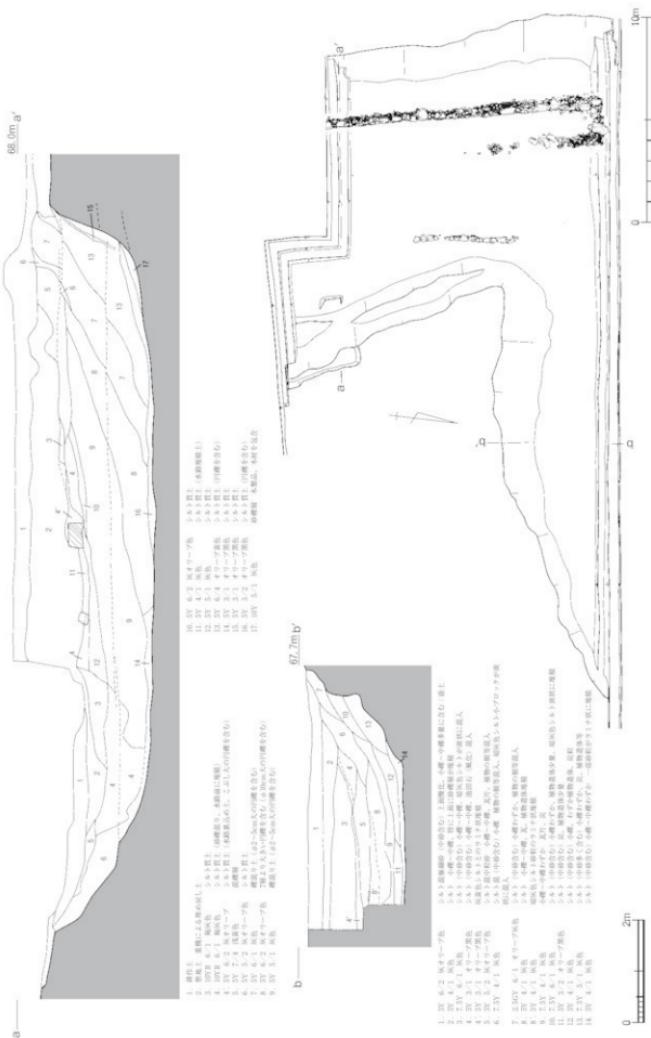


豊地域路2区 遺構平・断面図





丰地城跡3区 全体図

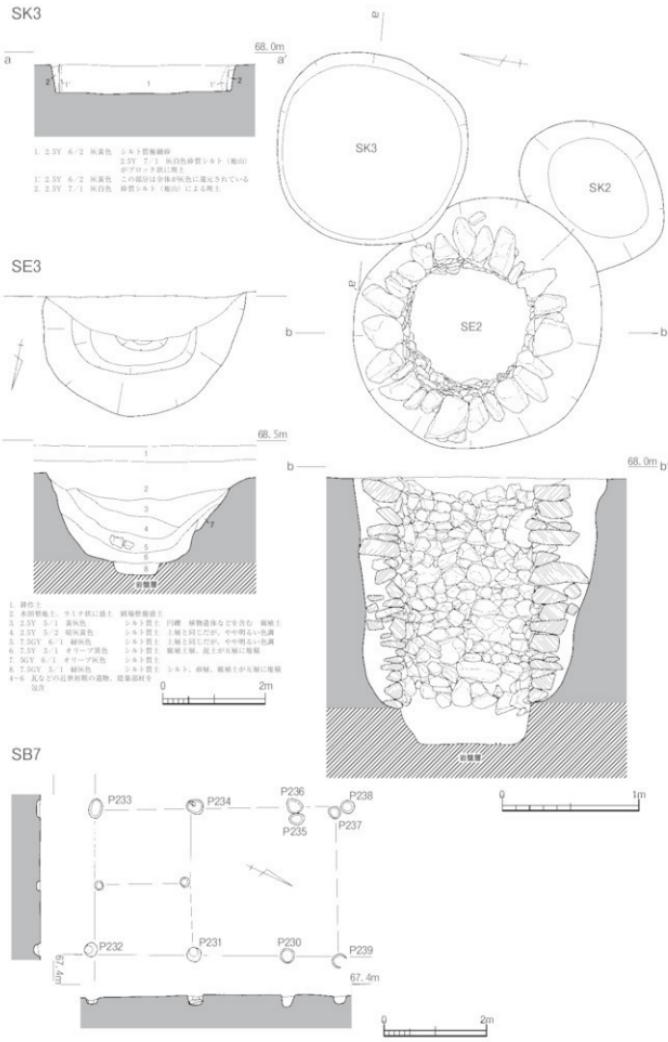


### 豊地城跡3区 遺構平・断面図

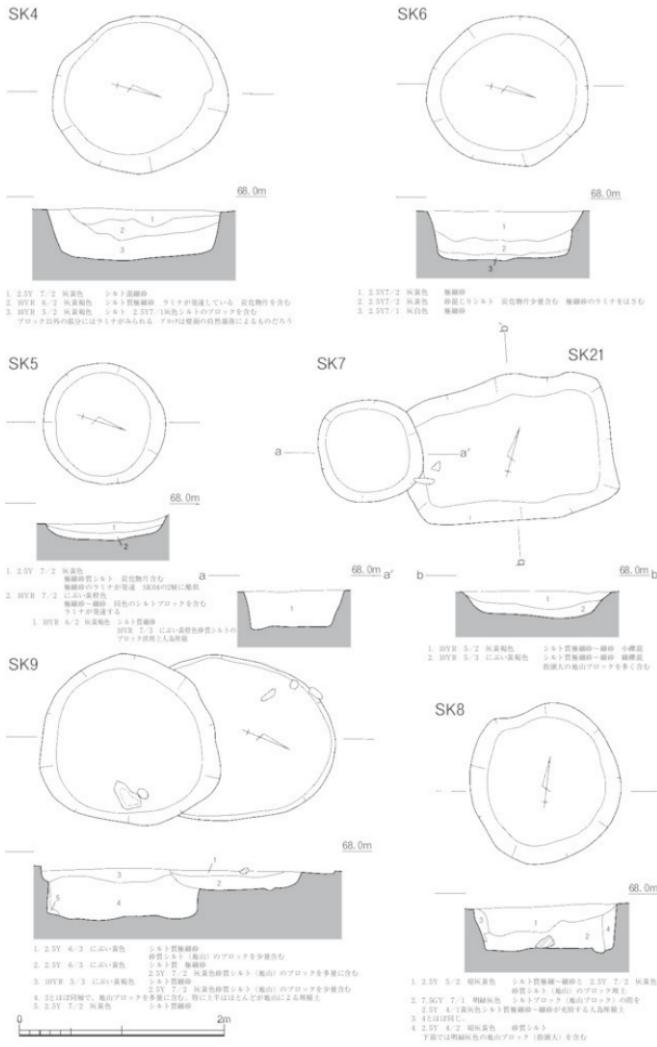


丰地城路3区 遗构平·断面图

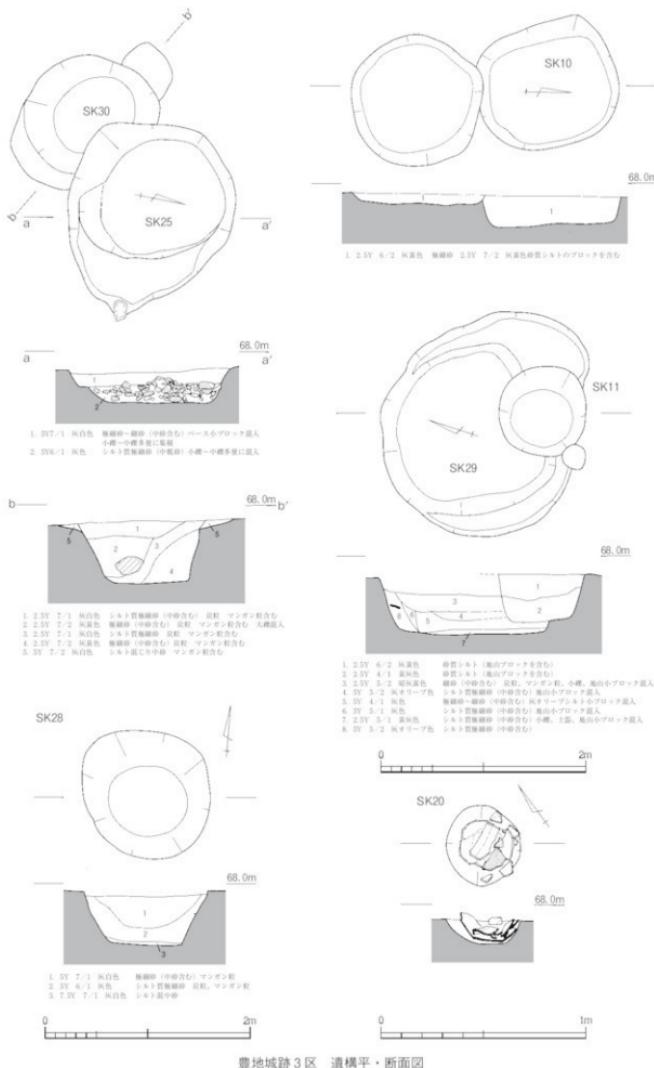
図版16

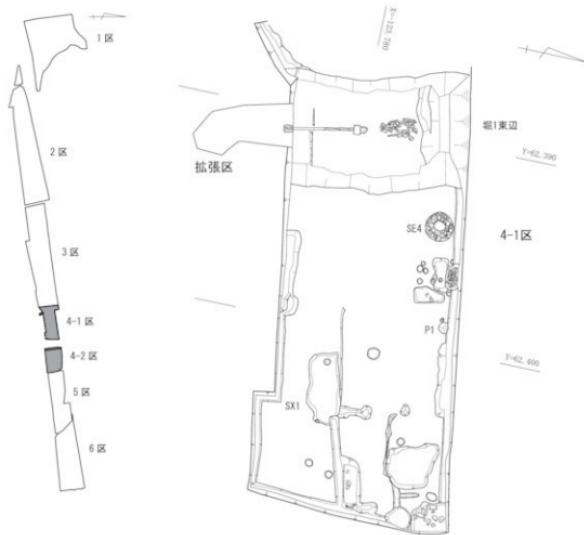


豊地域路3区 遺構平・断面図

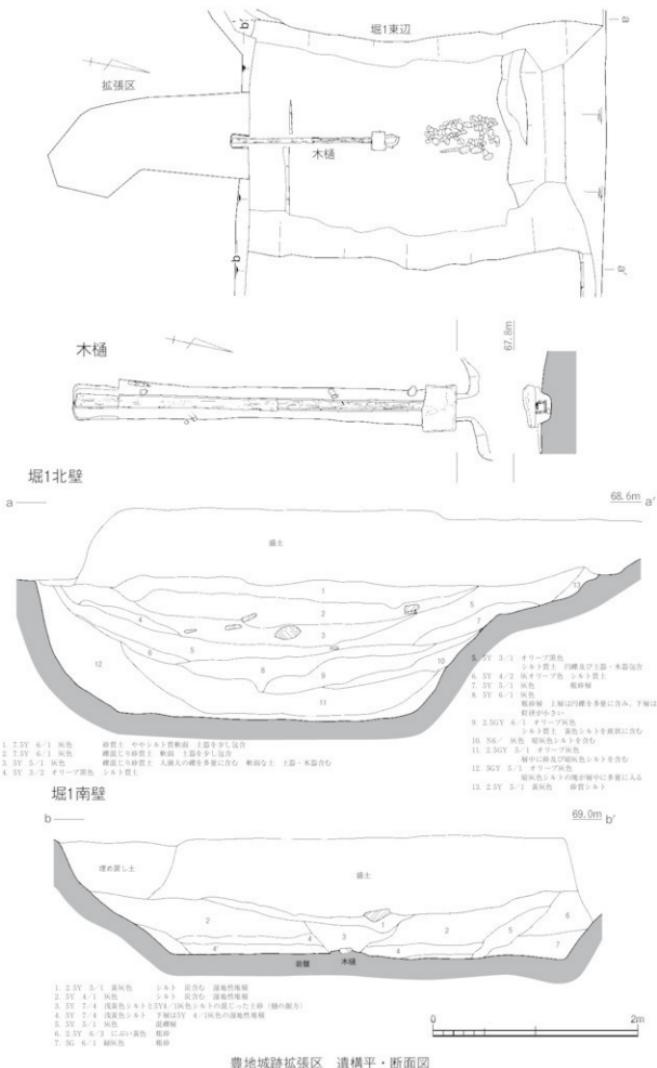


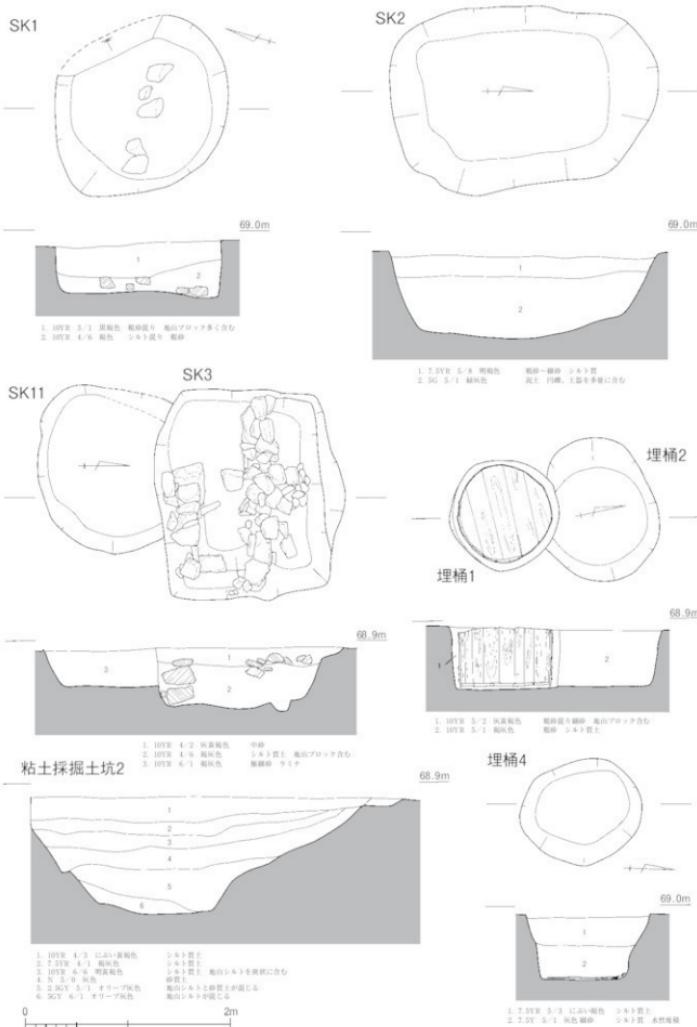
豊地域路3区 構造平・断面図





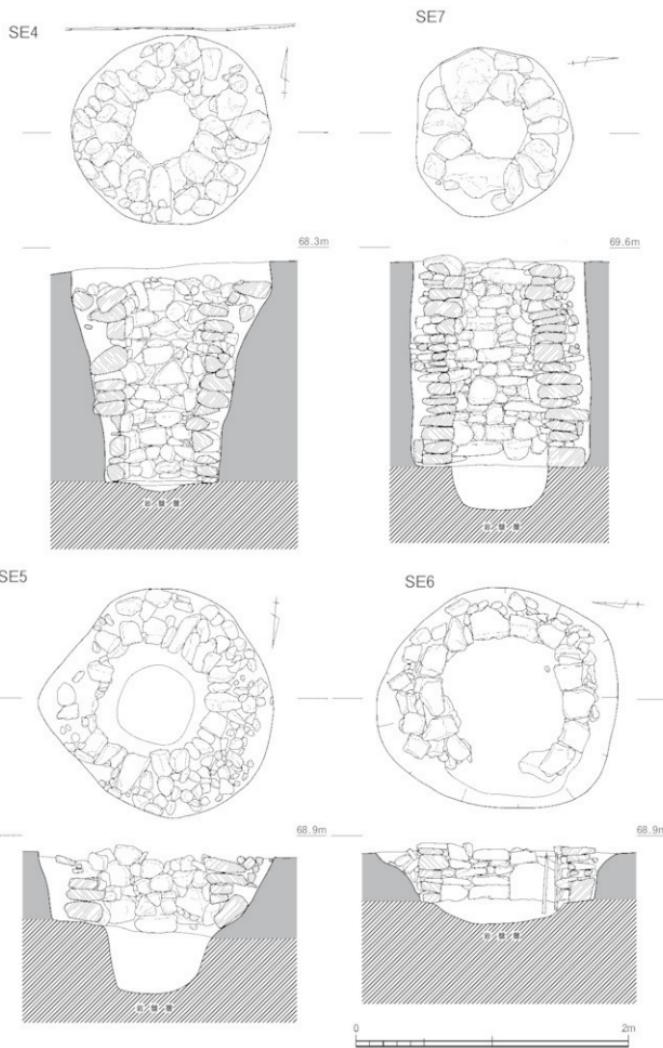
豊地域跡 4 区 全体図



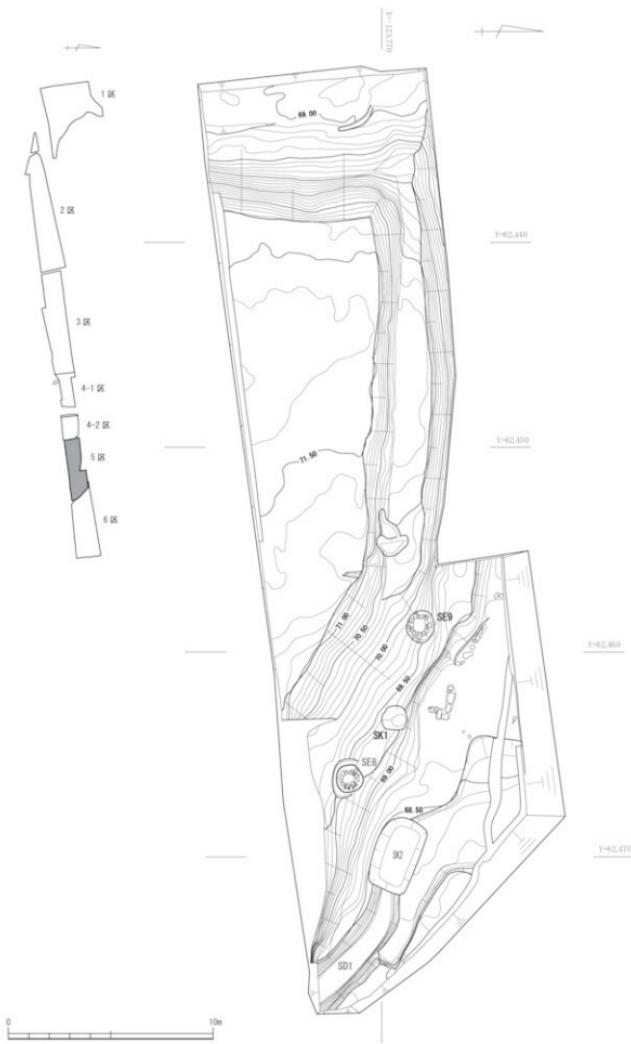


豊地域路4区 遺構平・断面図

図版22

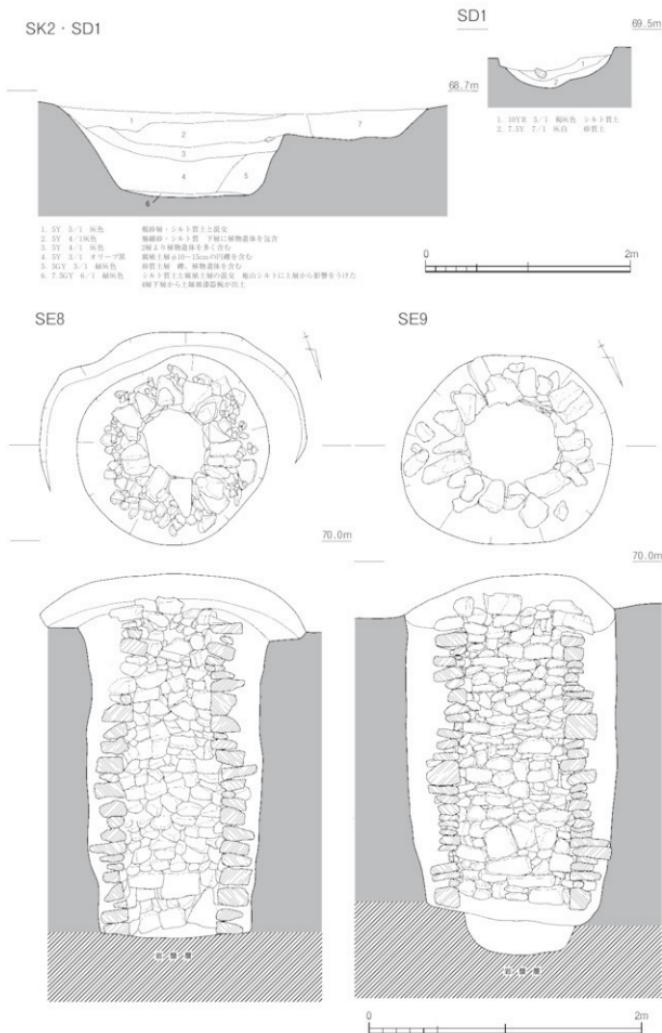


豊地域路4区 遺構平・断面図

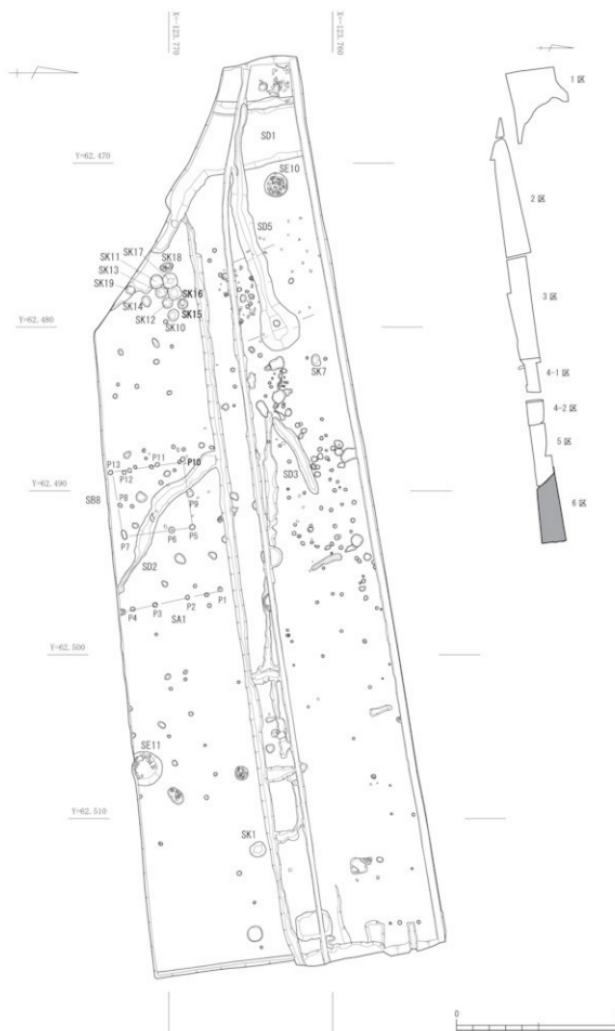


豊地城跡 5区 全体図

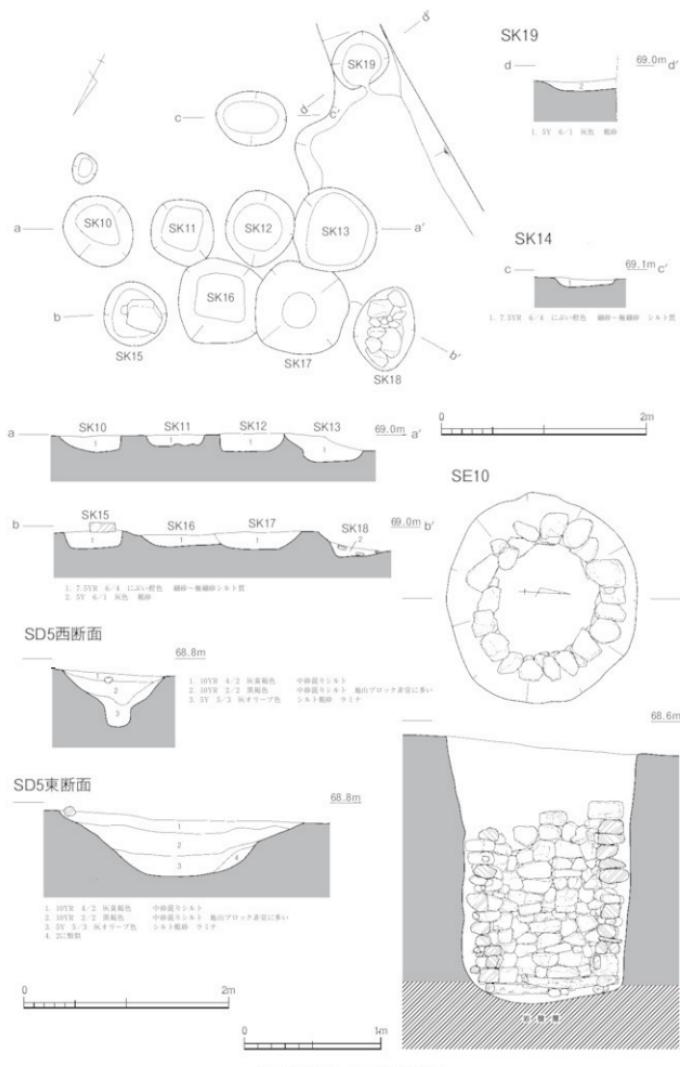
図版24



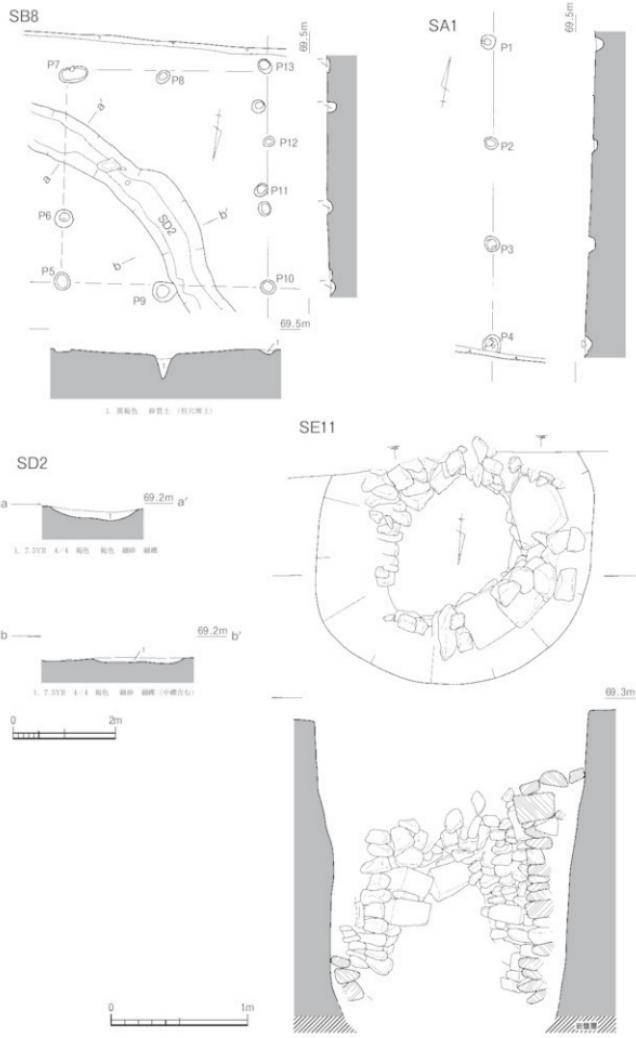
### 豊地城跡 5区 遺構平・断面図



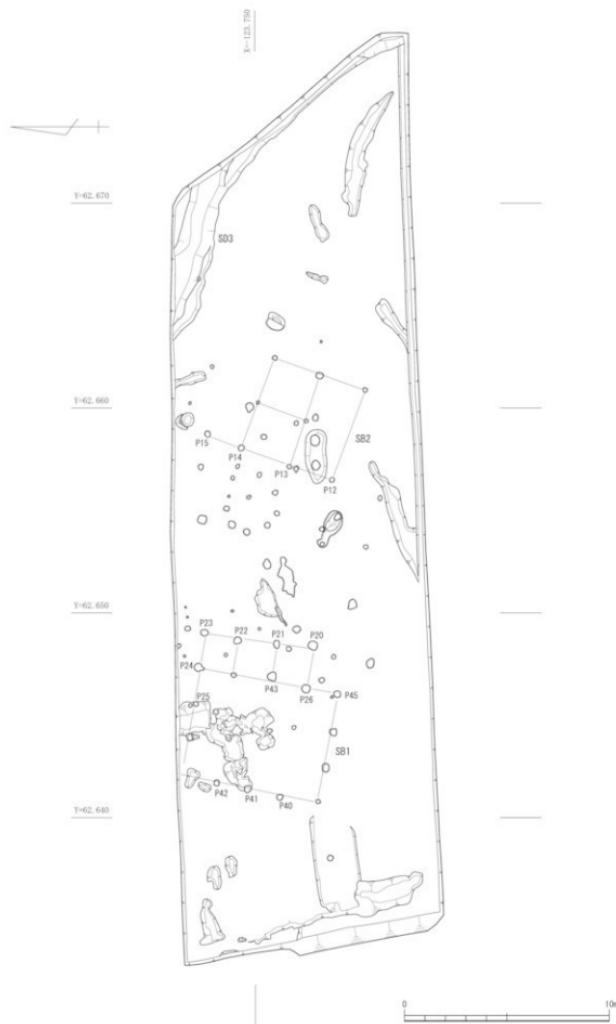
丰地城跡 6 区 全体図



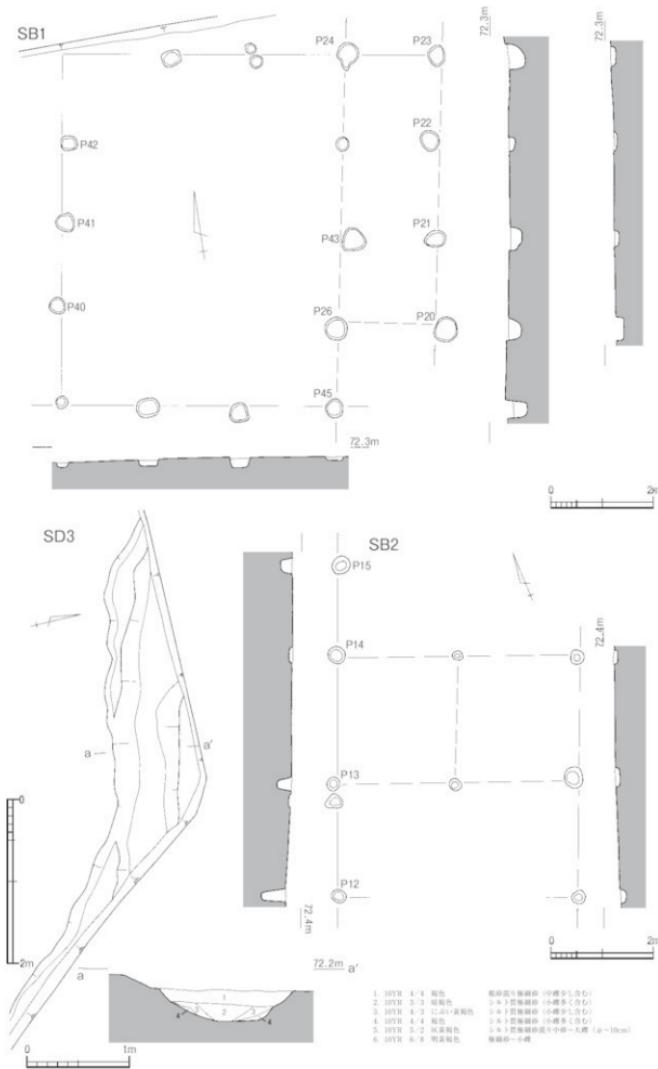
豊地域路6区 遺構平・断面図



### 豊地城跡 6区 遺構平・断面図



岡遺跡1区 全体図

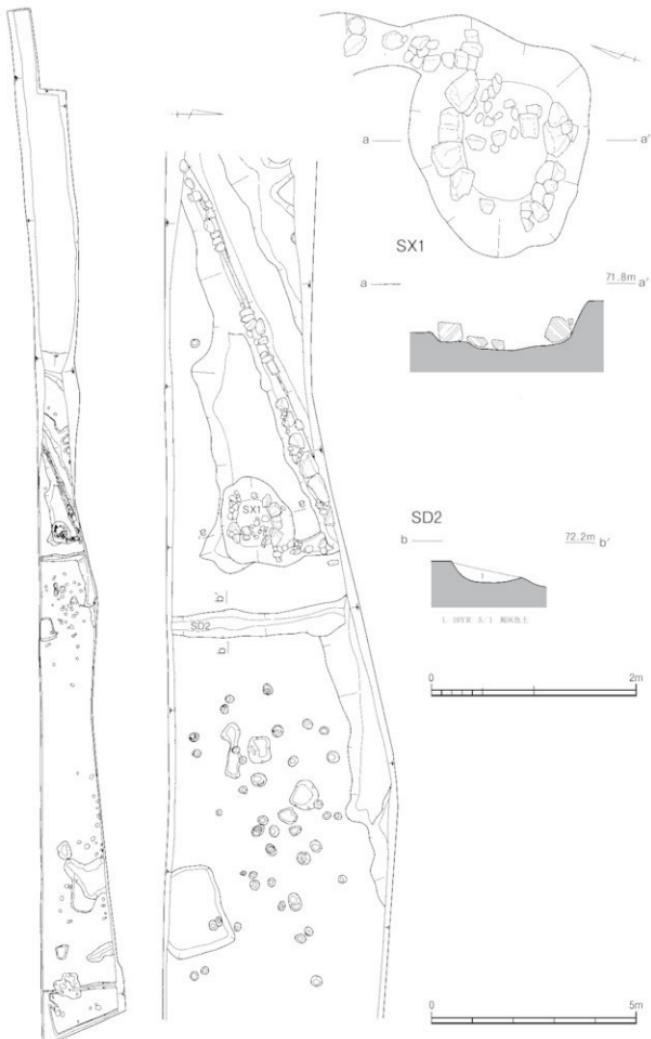


岡遺跡 1区 遺構平・断面図

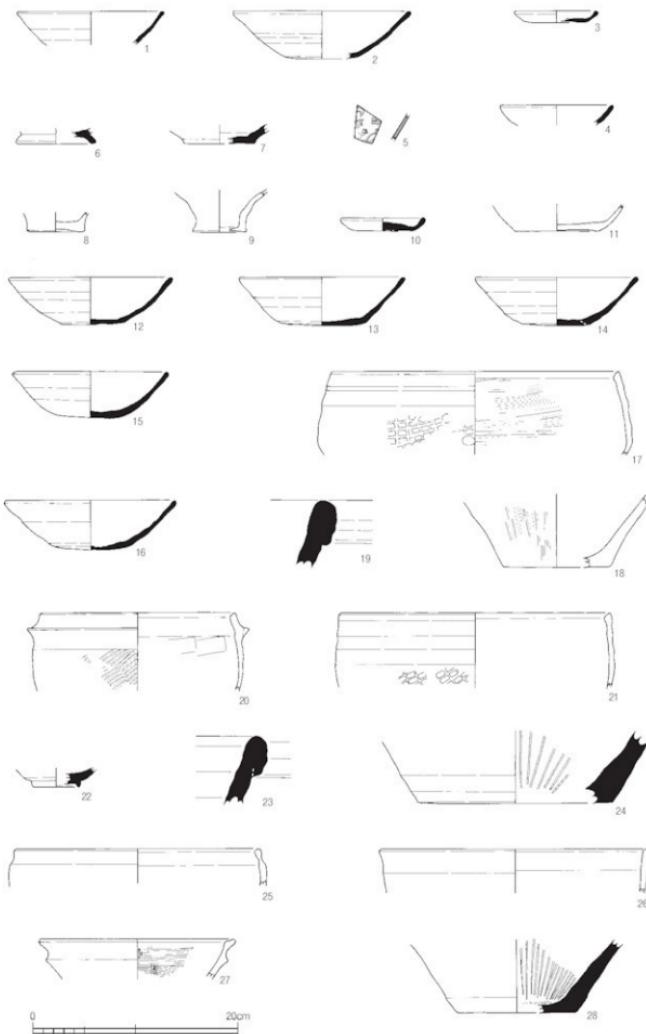
图版30



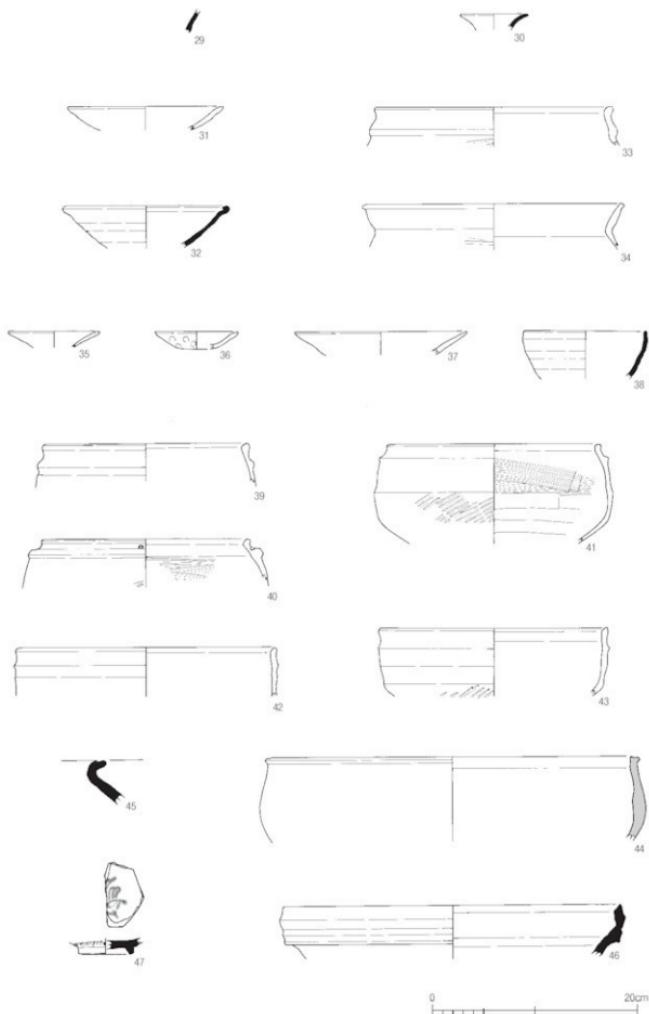
岡遺跡2区 全体図



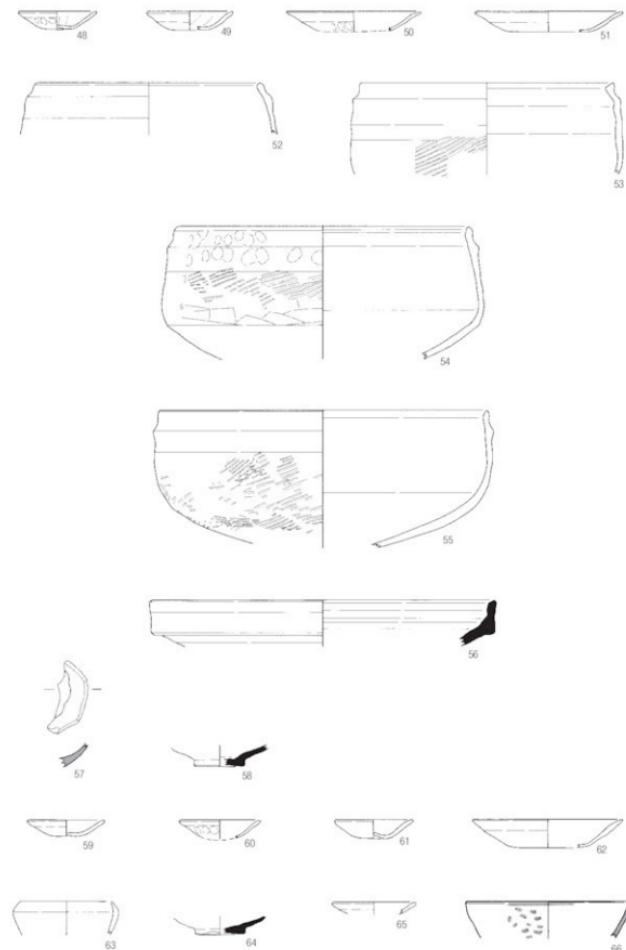
岡遺跡 2区 遺構横・断面図



豐地城跡2区 出土遺物（1）

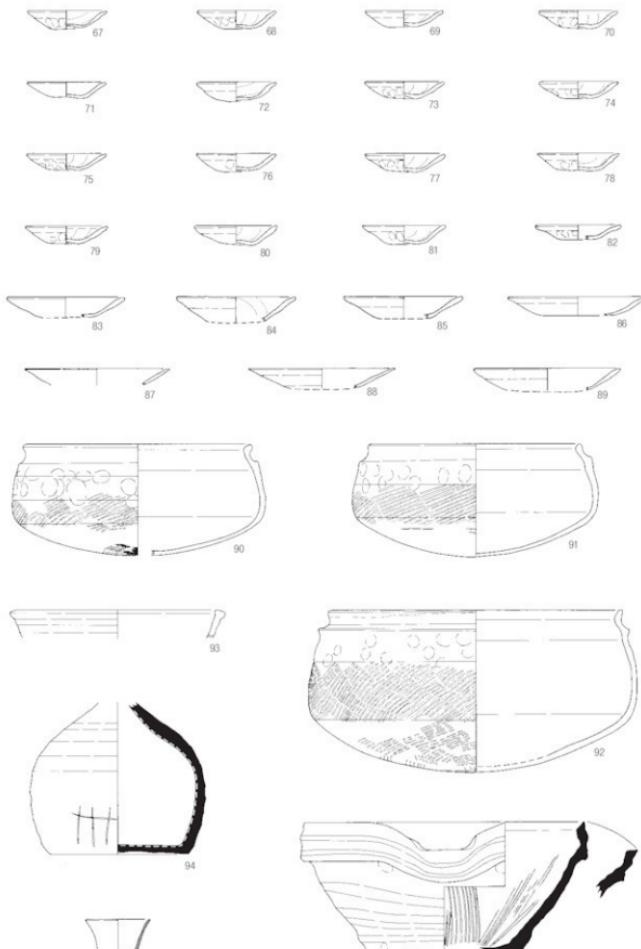


豐地城跡 2 区 出土遺物 (2)



0 20cm

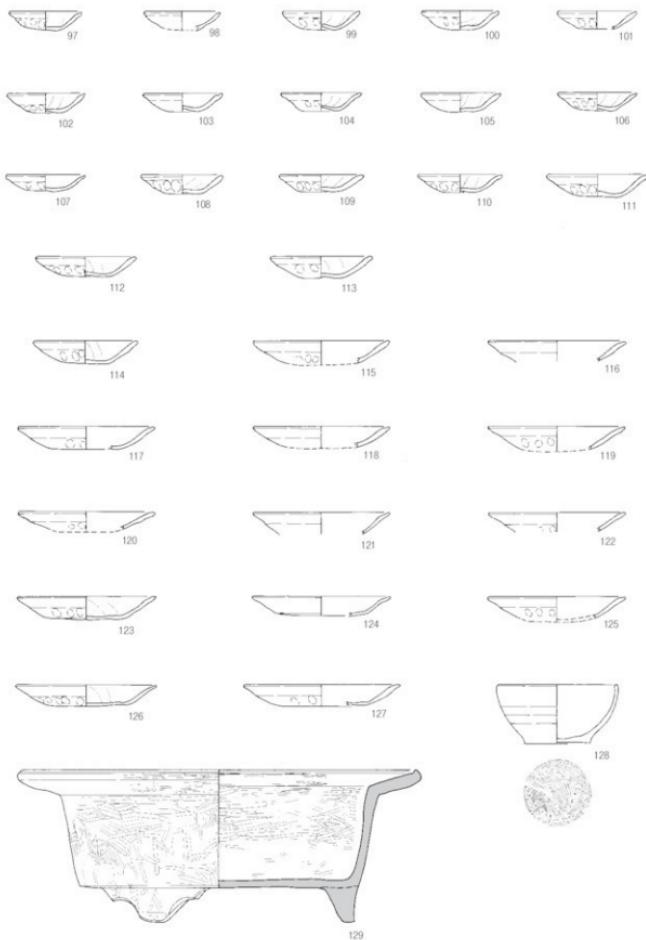
豐地城跡 2 区 出土遺物 (3)



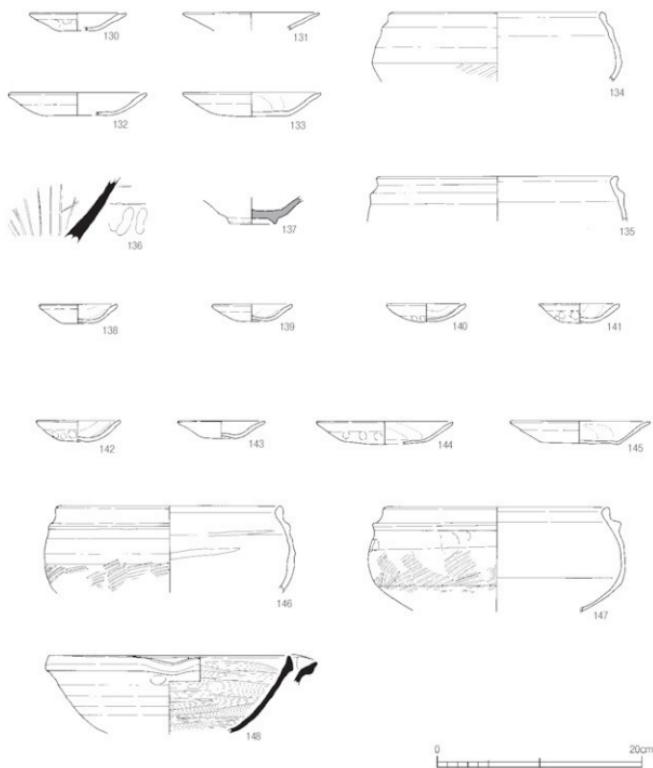
0 20cm

豐地城跡2区 出土遺物（4）

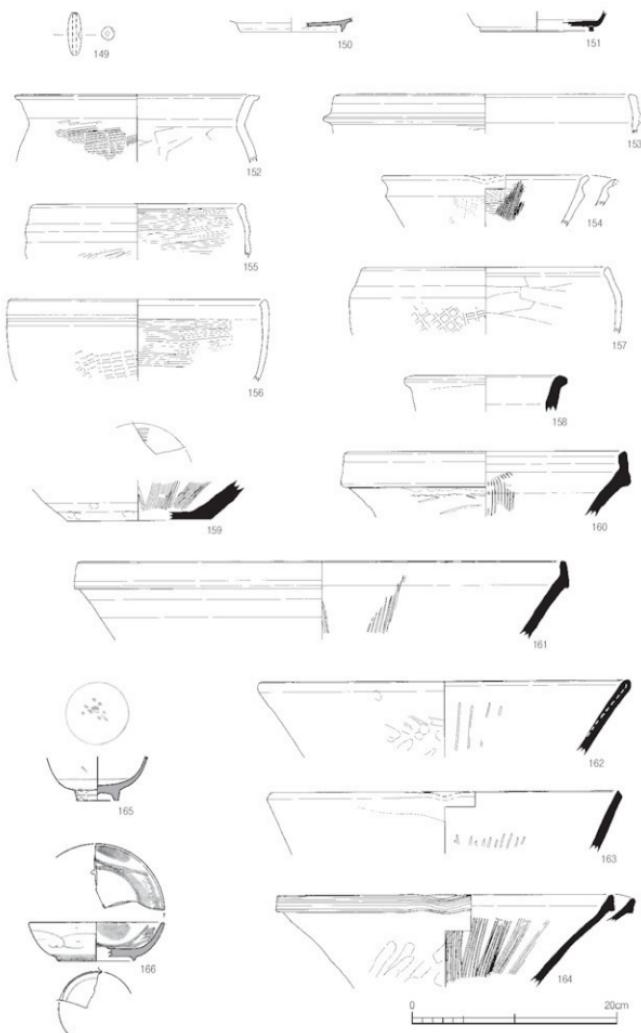
图版36



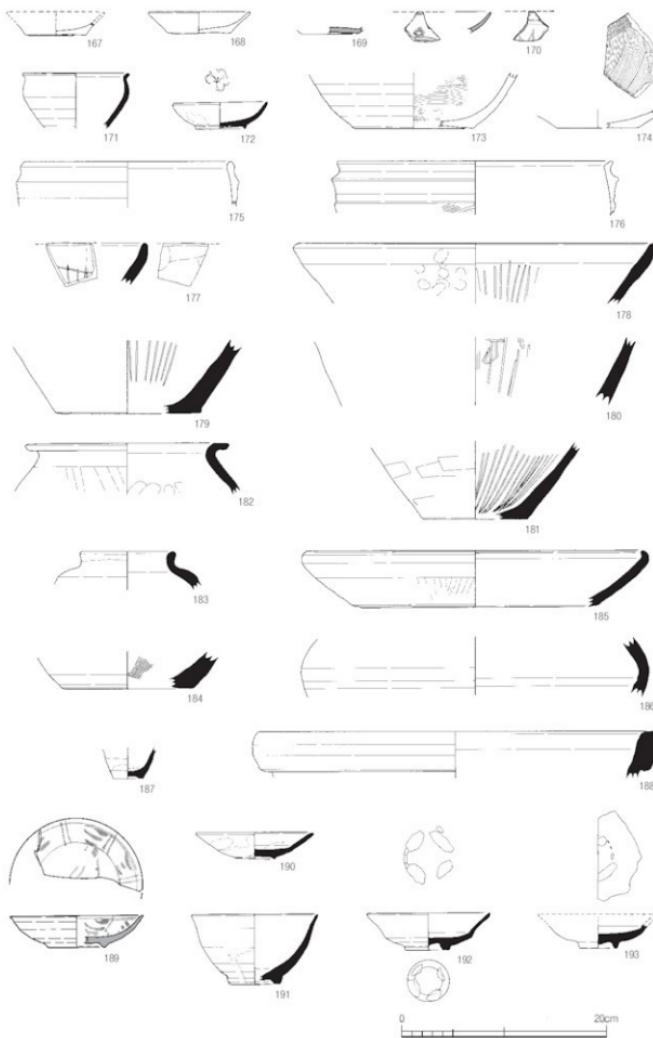
豐地城跡2区 出土遺物 (5)



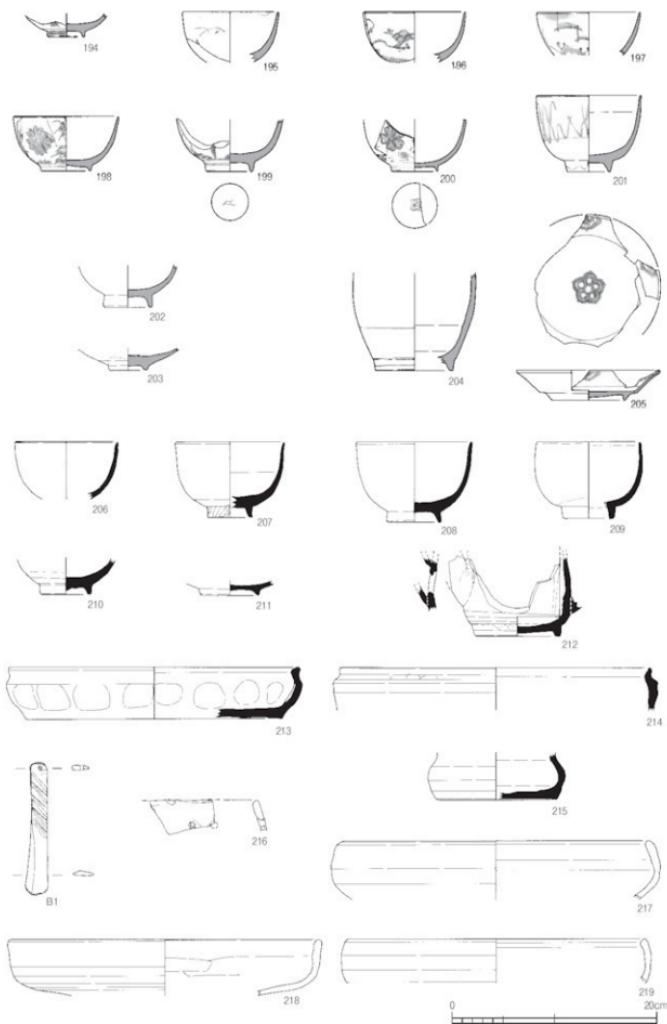
豐地城跡2区 出土遺物（6）



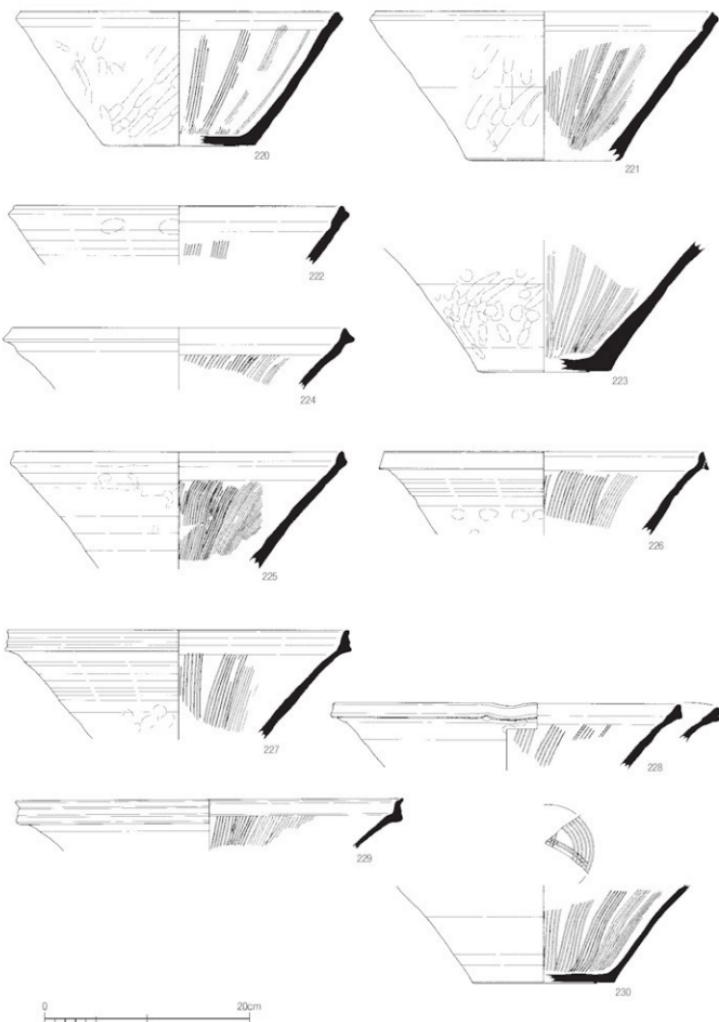
豐地城跡1・2区 出土遺物



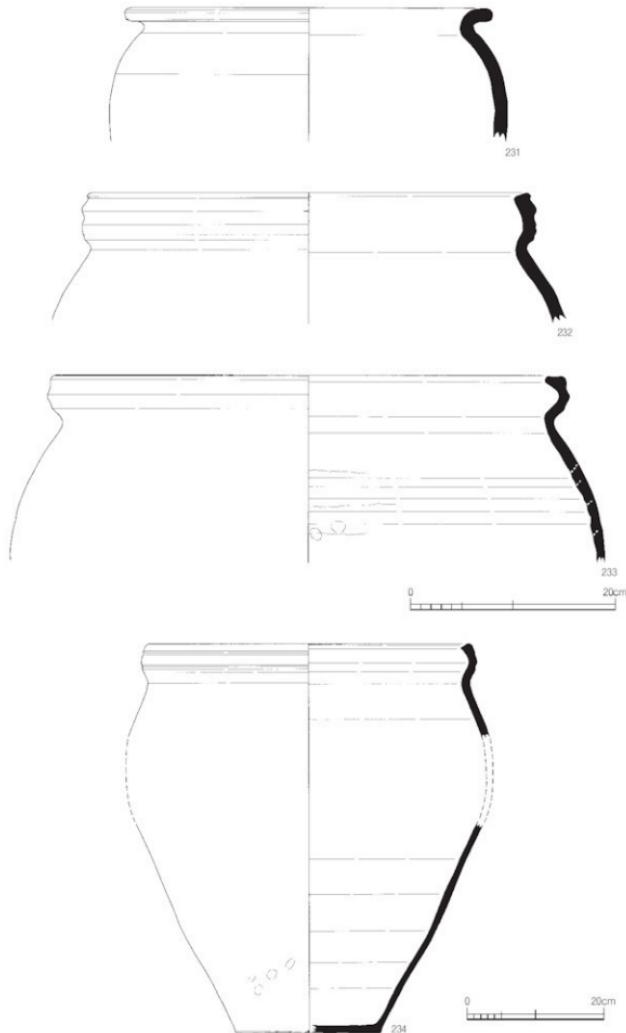
豐地城跡3区 出土遺物（1）



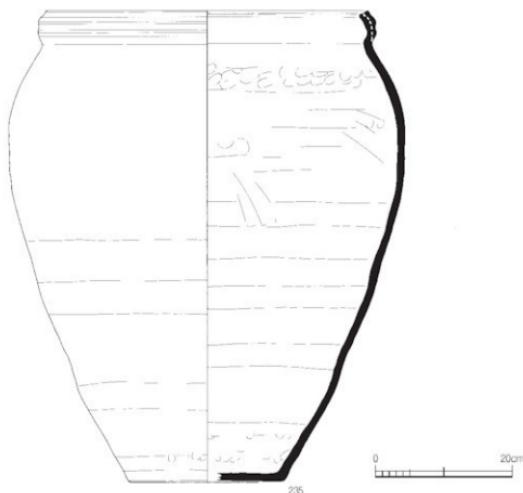
豊地城跡3区 出土遺物（2）



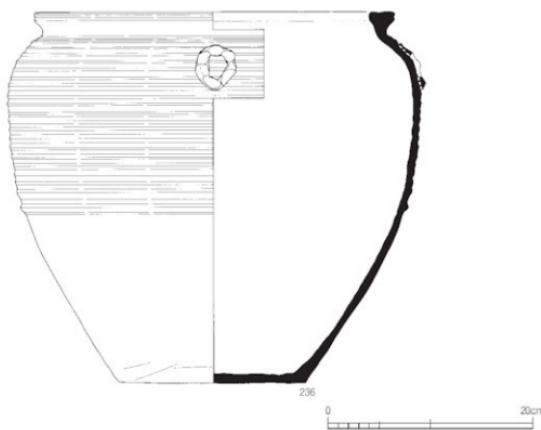
豐地城跡3区 出土遺物（3）



豐地城跡3区 出土遺物（4）



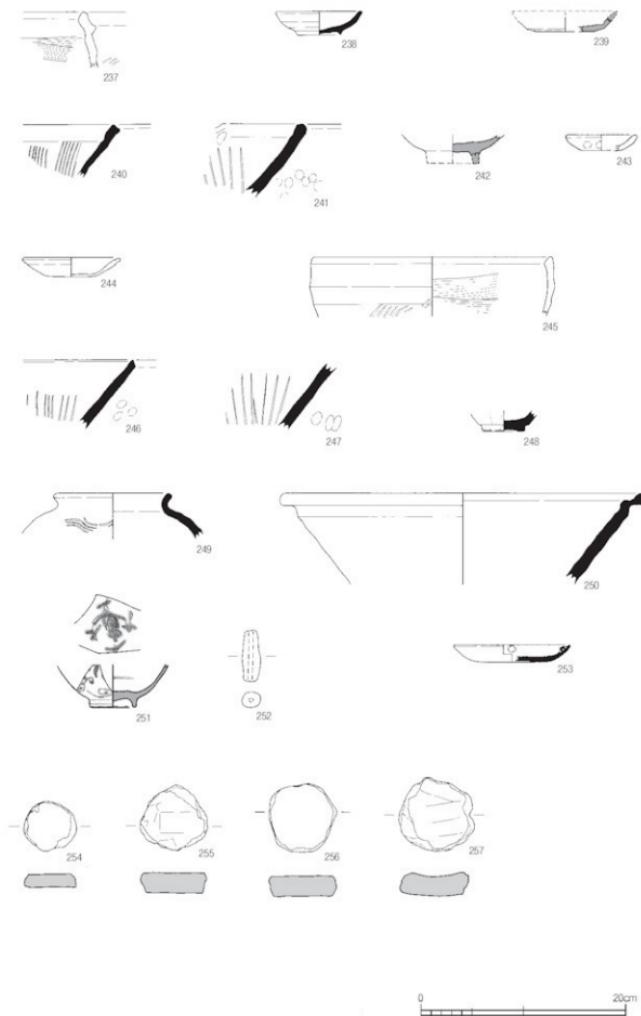
235



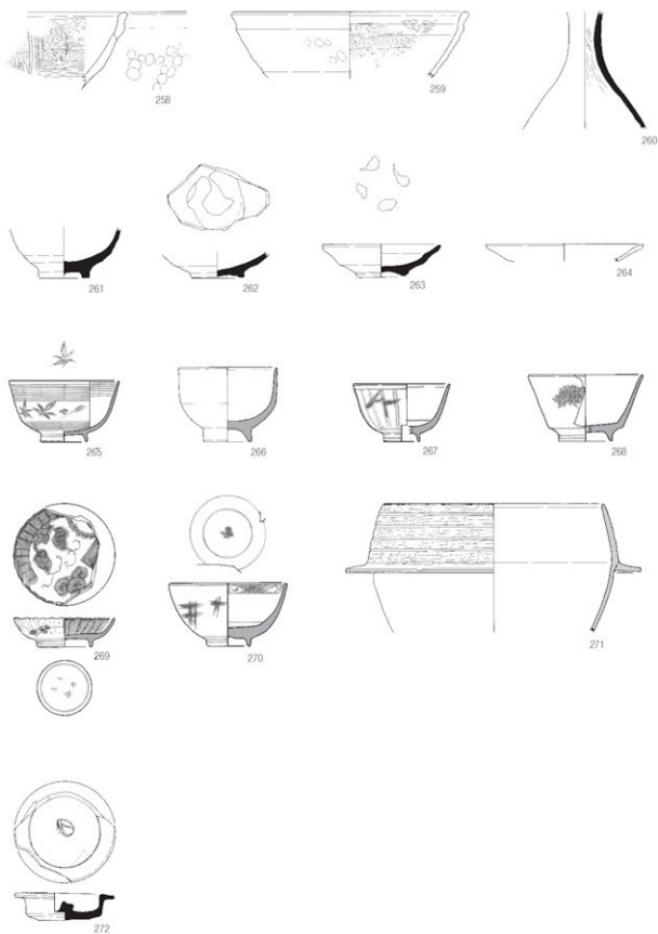
236

豐地城跡3区 出土遺物（5）

图版44

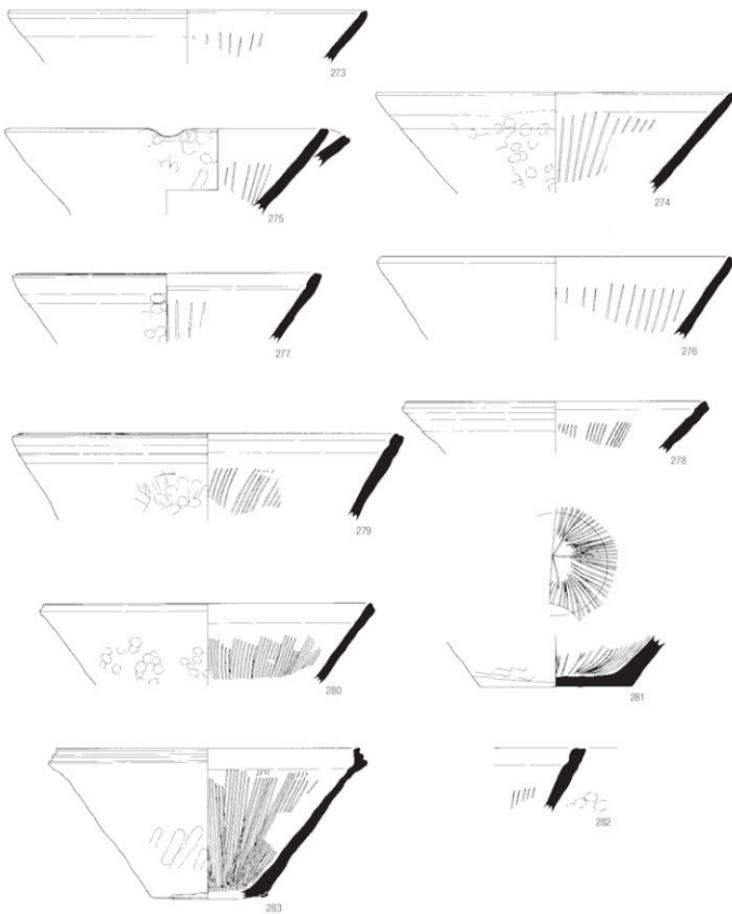


豐地城跡3区 出土遺物（6）



豊地城跡 4・1 区 出土遺物 (1)

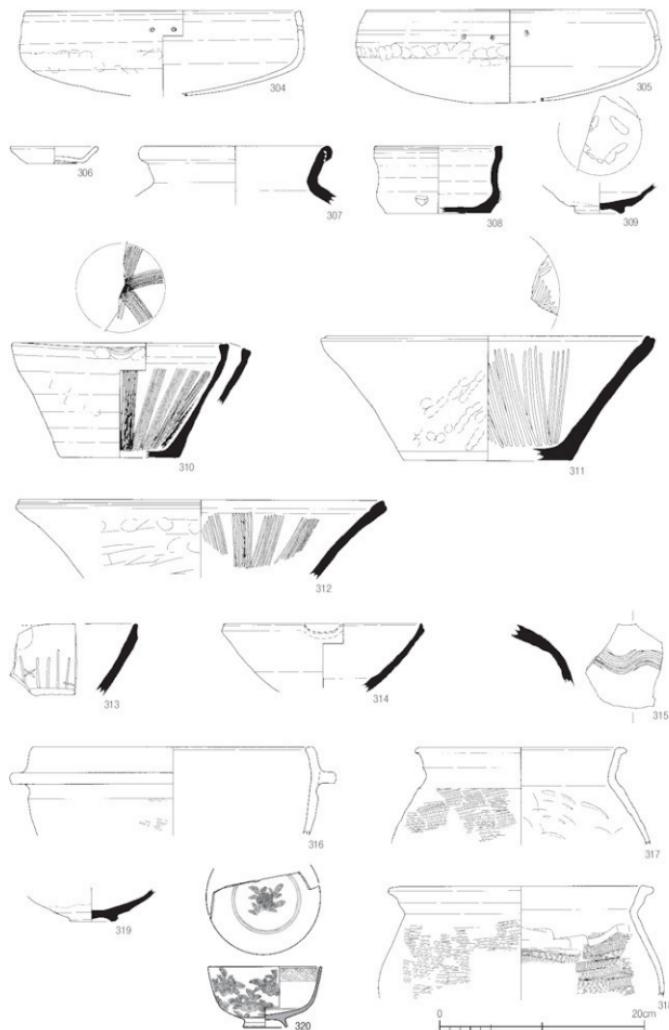
图版46



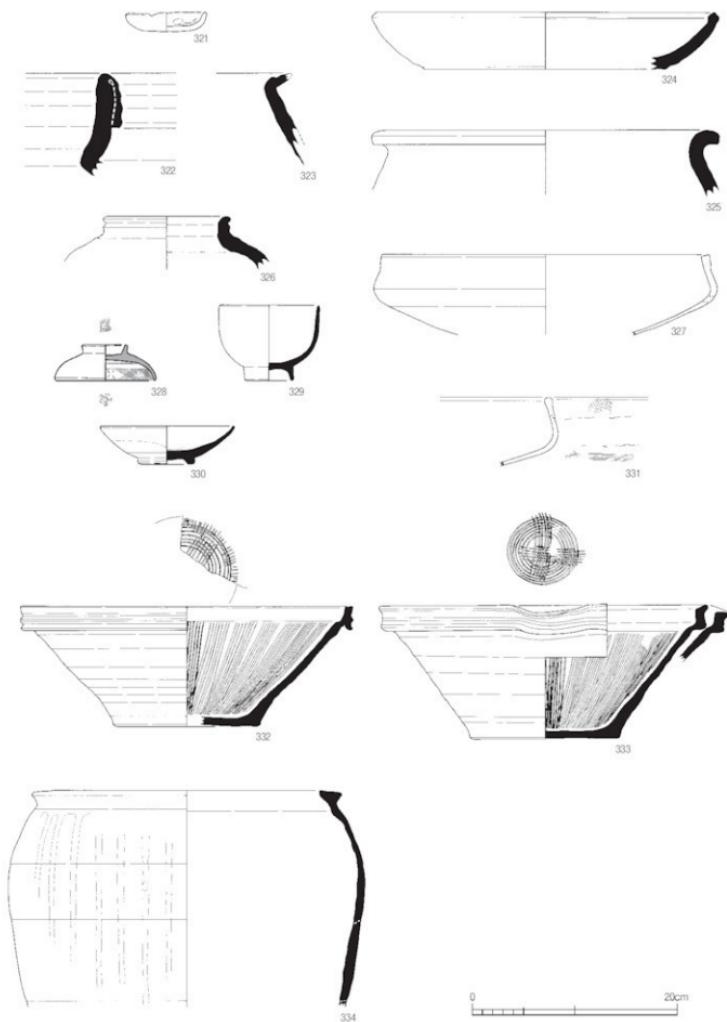
丰地城路 4·1 区 出土遗物 (2)



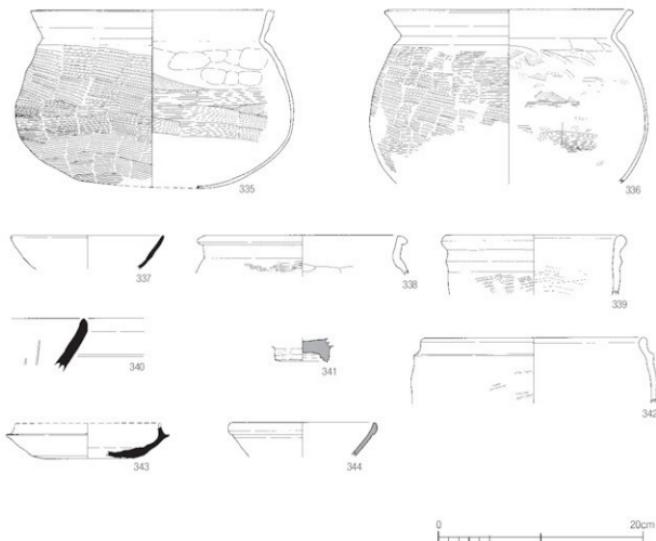
丰地城路4·2区 出土遗物



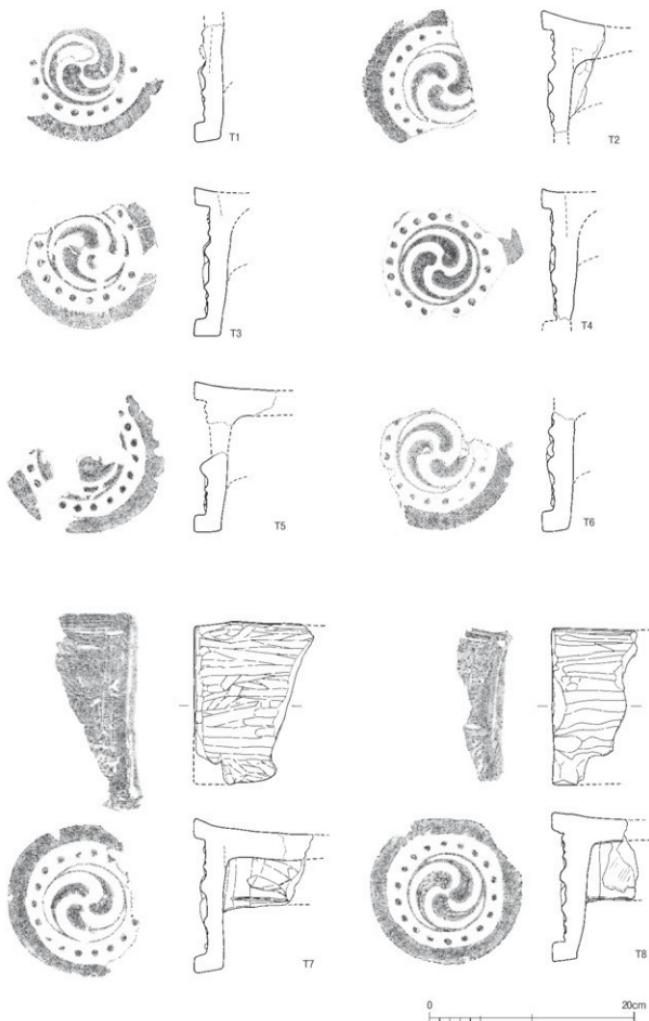
丰地城路4·6区 出土遗物



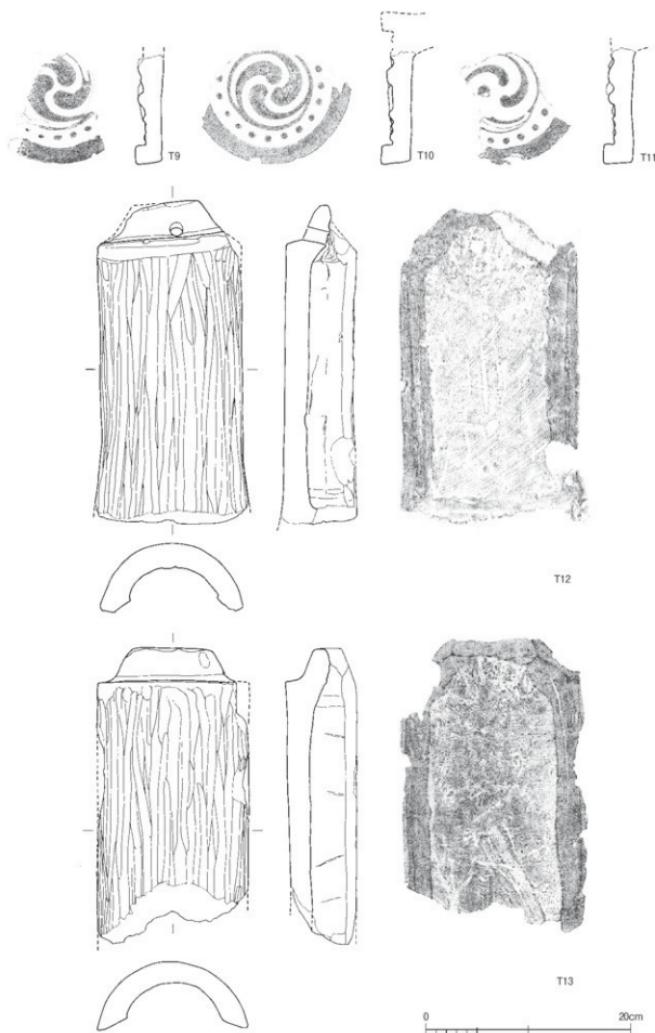
丰地城跡 5 区 出土遺物



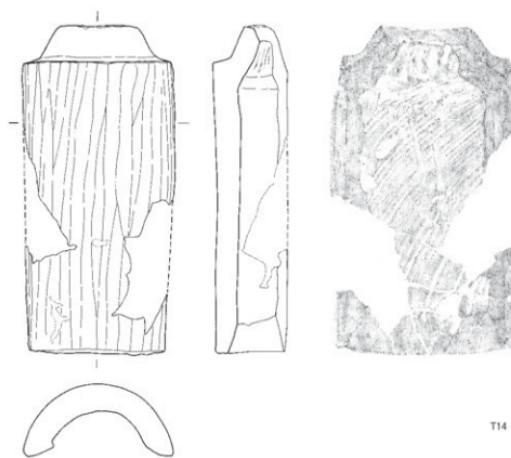
同遗迹 1·2 区 出土遗物



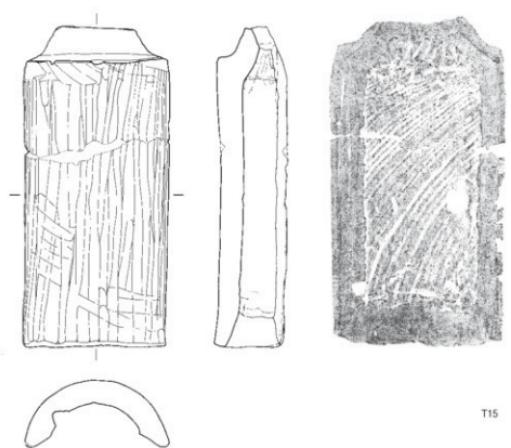
丰地城路 2 区 出土瓦 (1)



丰地城跡 2 区 出土瓦 (2)



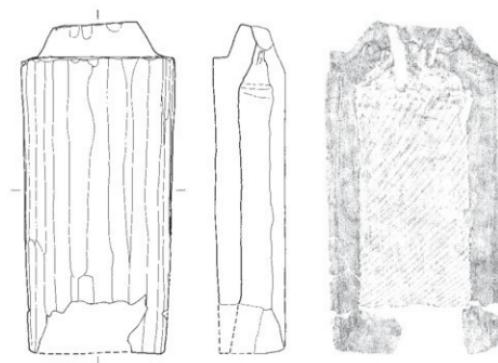
T14



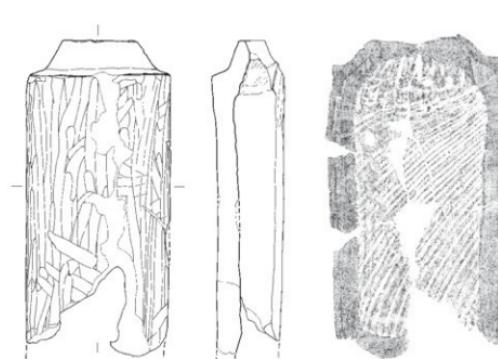
T15



丰地城路2区 出土瓦 (3)



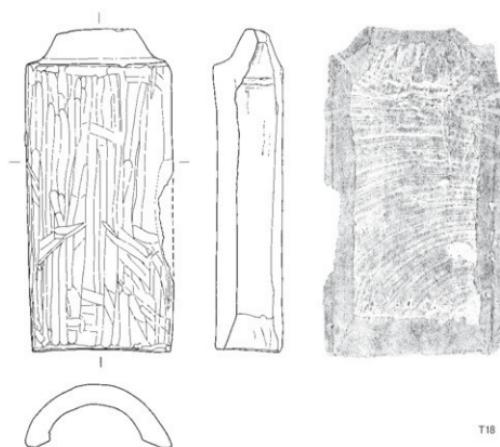
T16



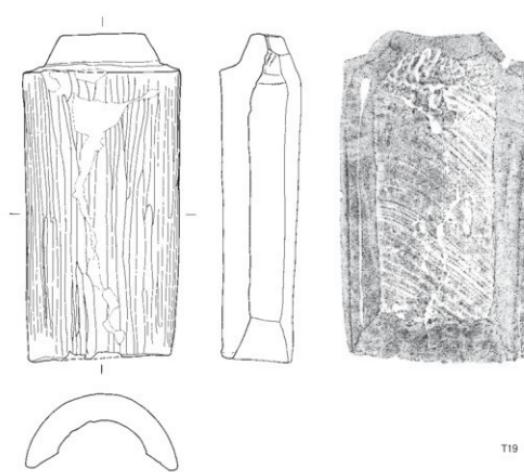
T17



丰地城路 2 区 出土瓦 (4)



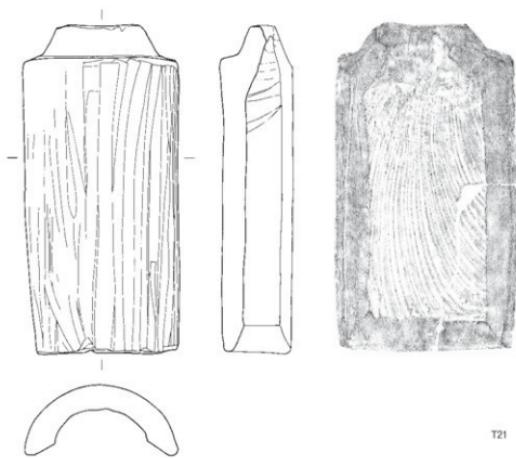
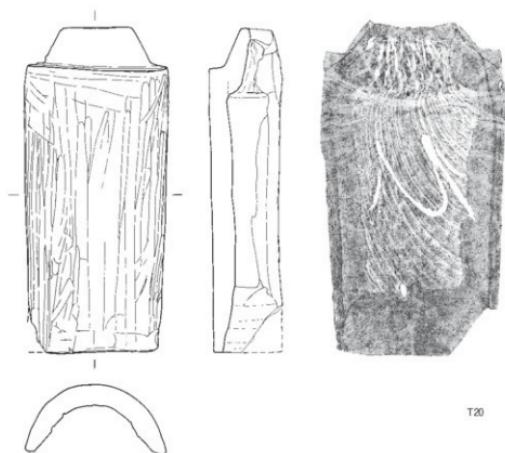
T18



T19

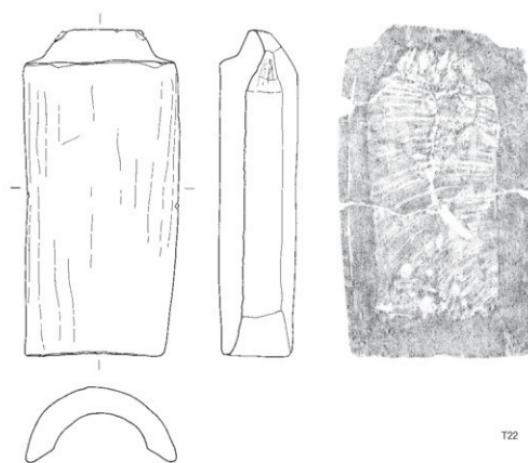


丰地城路 2 区 出土瓦 (5)

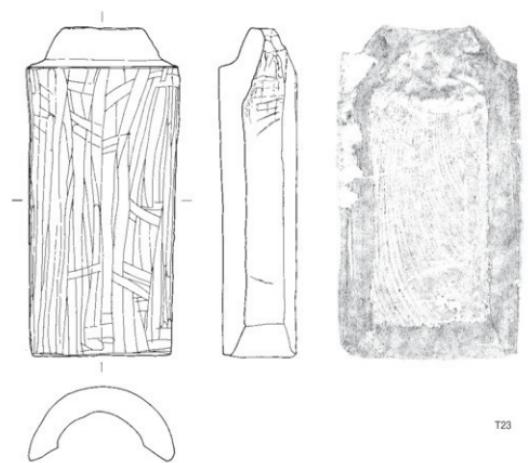


0 20cm

丰地城路 2 区 出土瓦 (6)



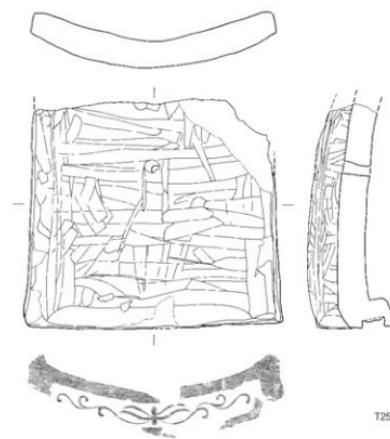
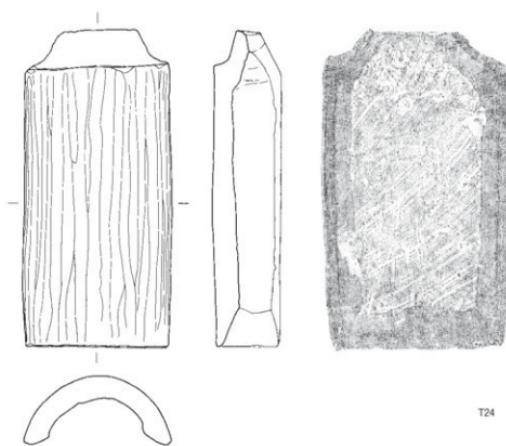
T22



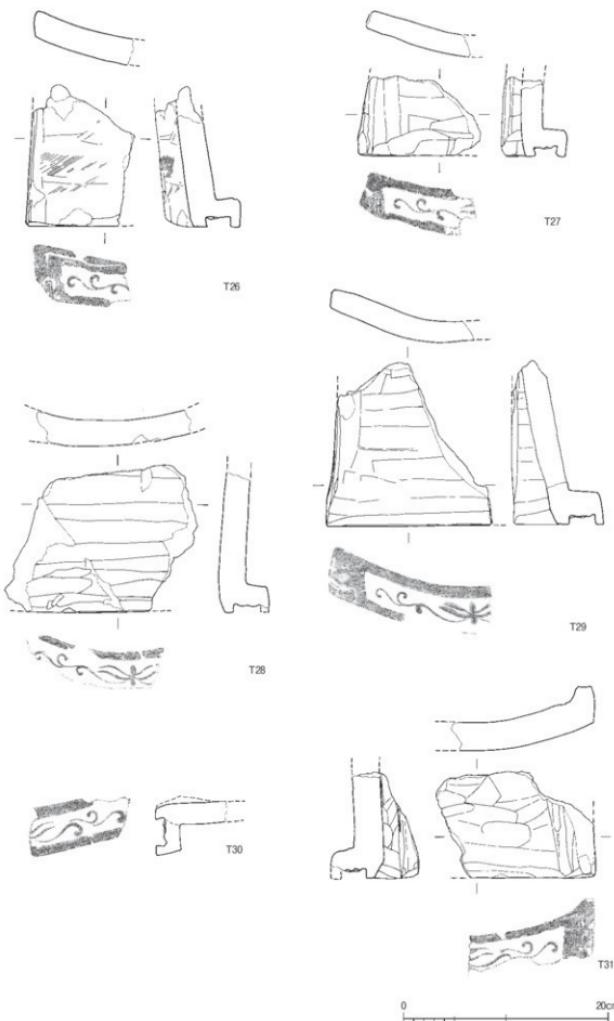
T23



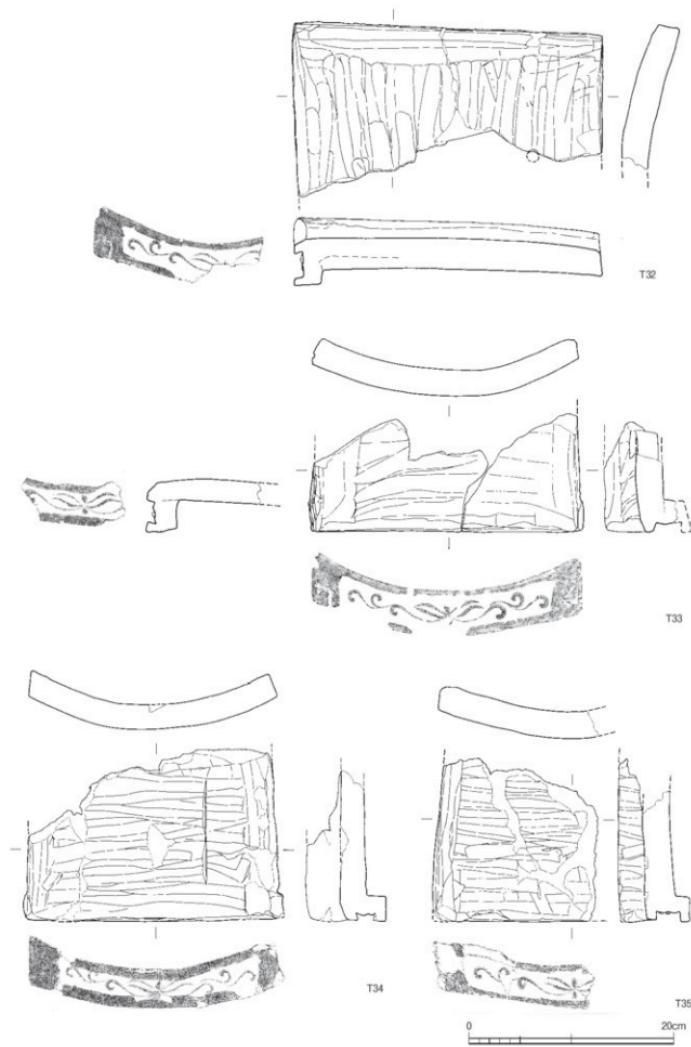
丰地城路 2 区 出土瓦 (7)



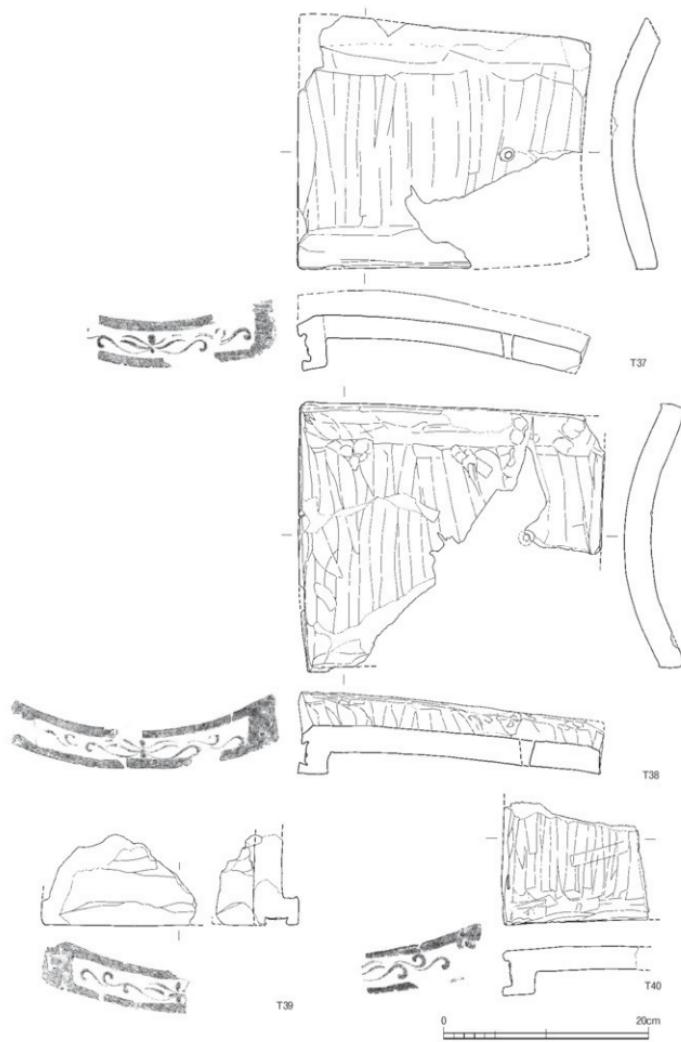
丰地城路 2 区 出土瓦 (8)



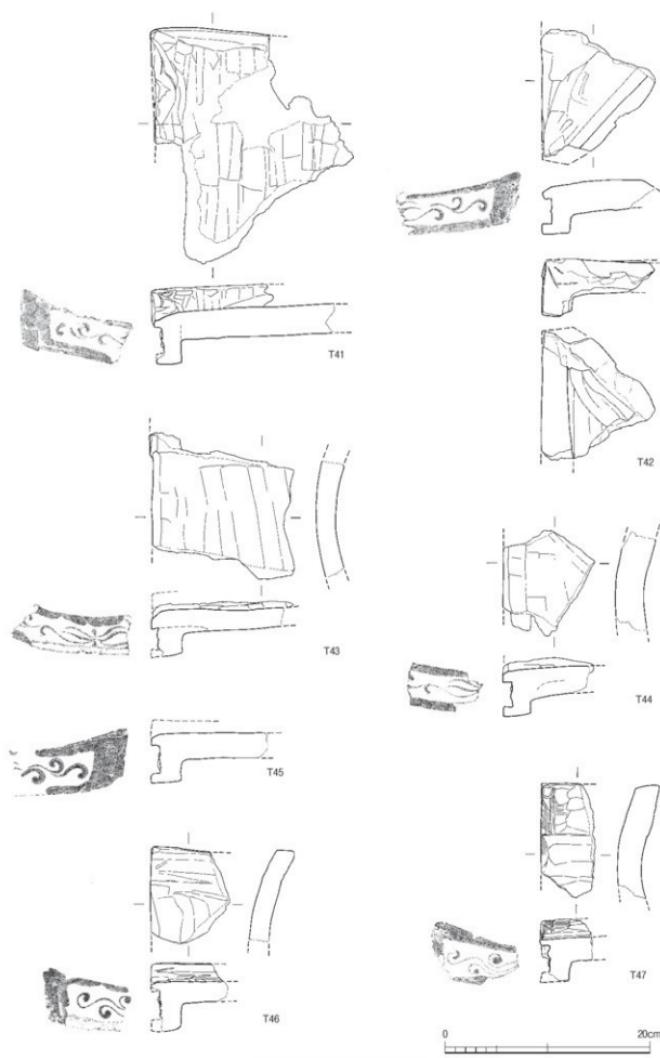
丰地城跡 2 区 出土瓦 (9)



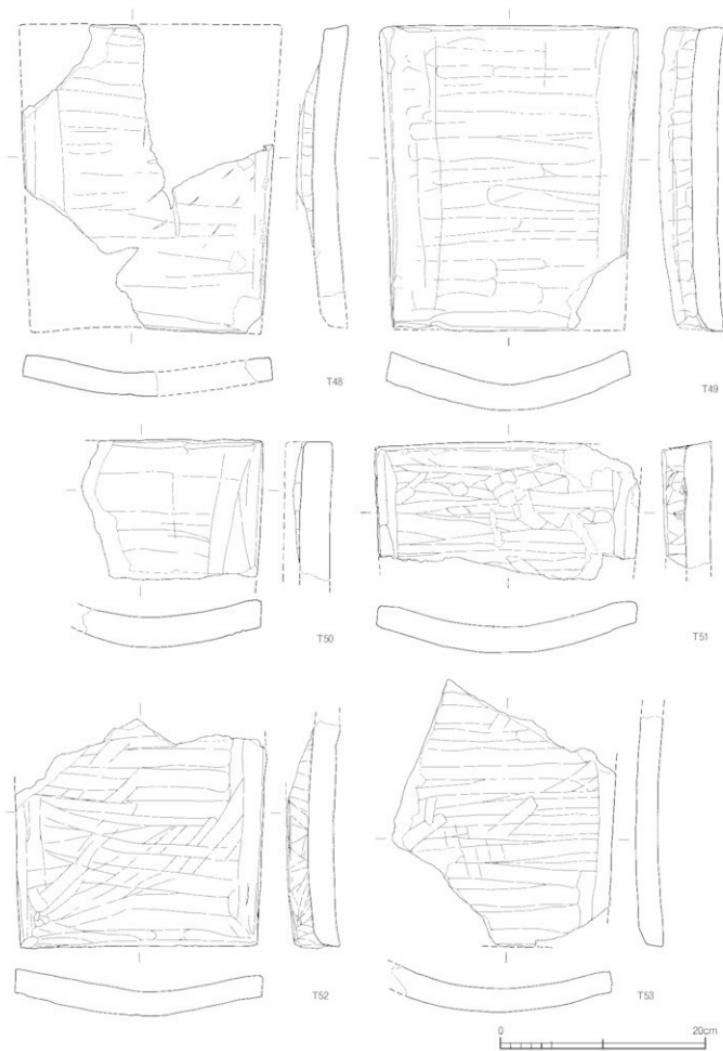
丰地城路 2 区 出土瓦 (10)



丰地城路2区 出土瓦 (11)

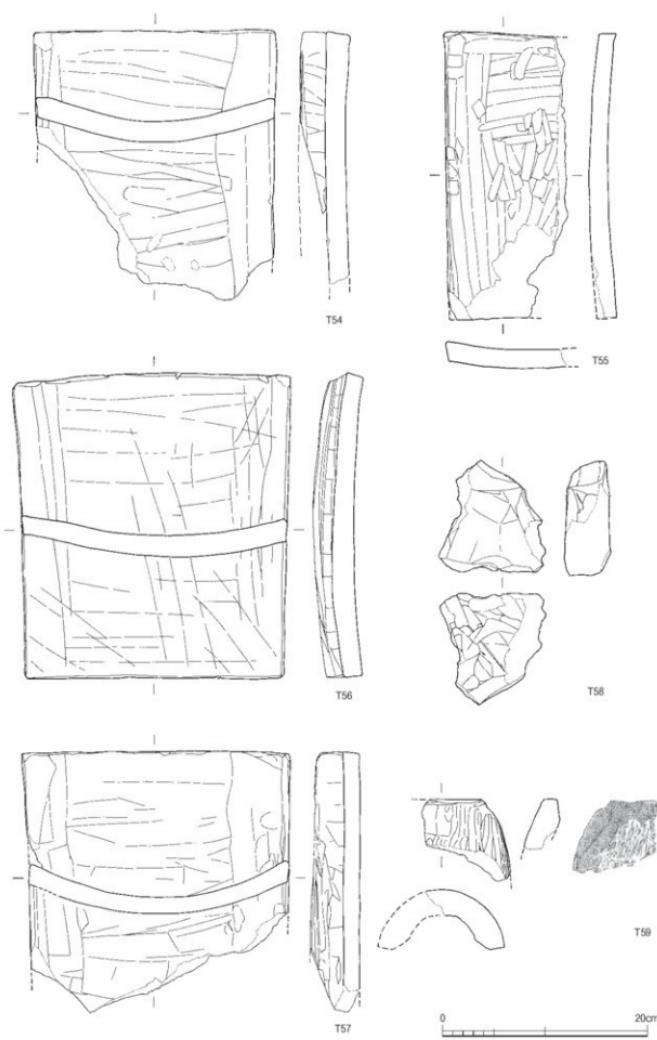


丰城市路2区 出土瓦 (12)

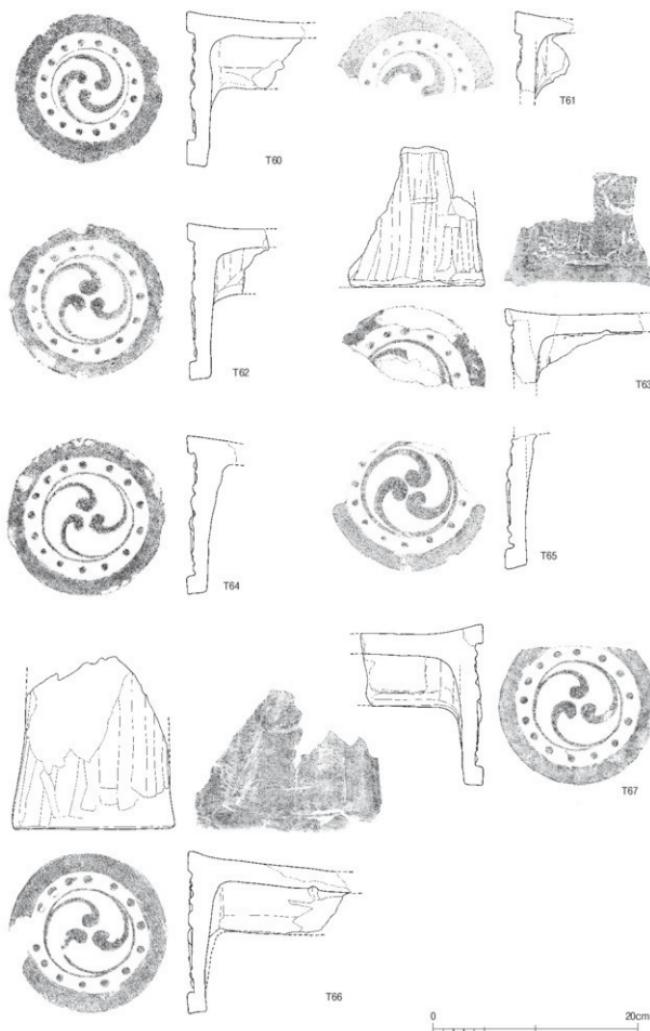


豐城路 2 区 出土瓦 (13)

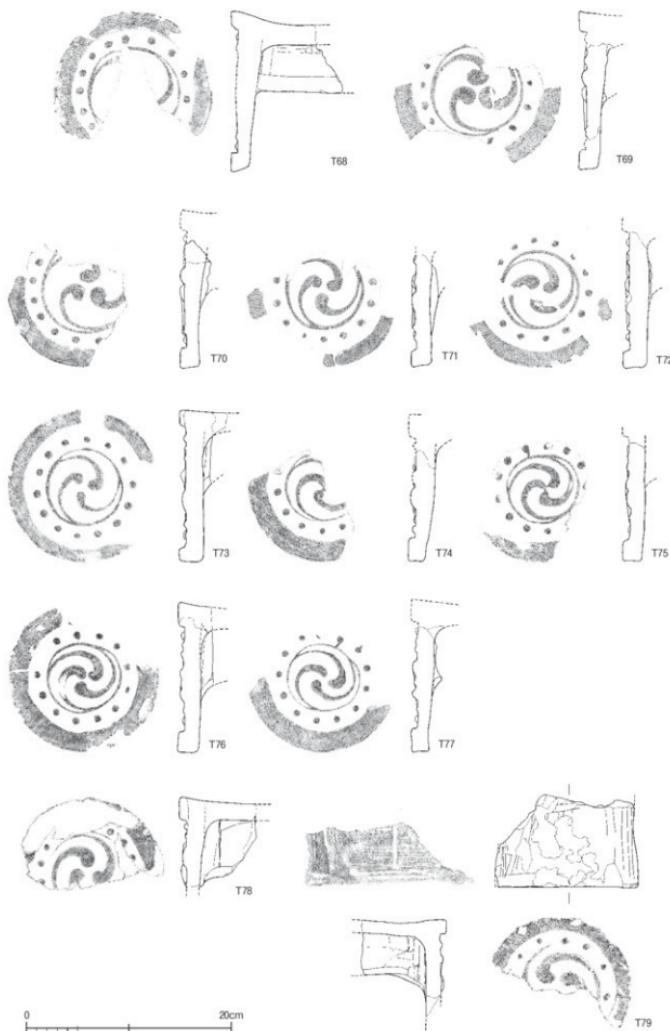
图版64



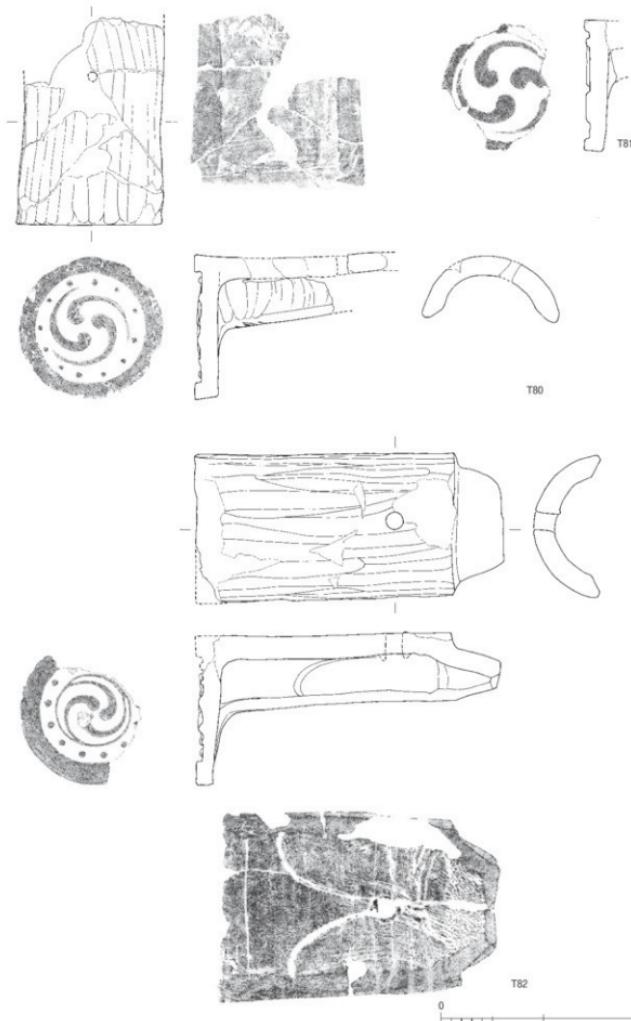
丰城城跡 2 区 出土瓦 (14)



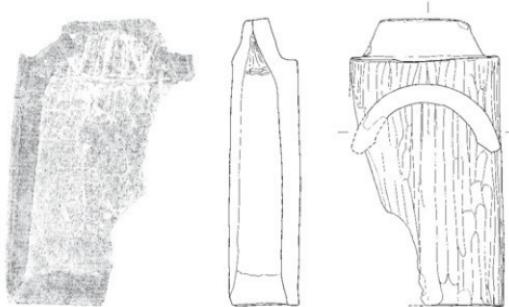
丰地城路3区 出土瓦 (1)



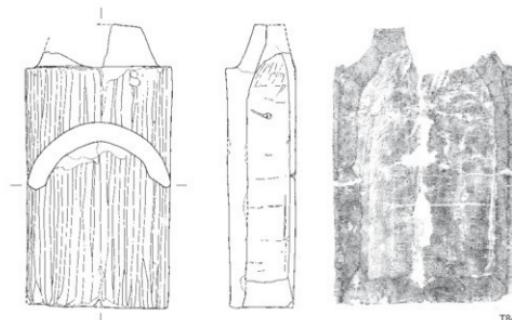
丰城城跡 3区 出土瓦 (2)



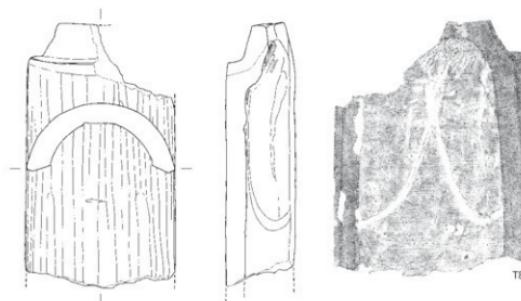
丰城街路3区 出土瓦 (3)



T83



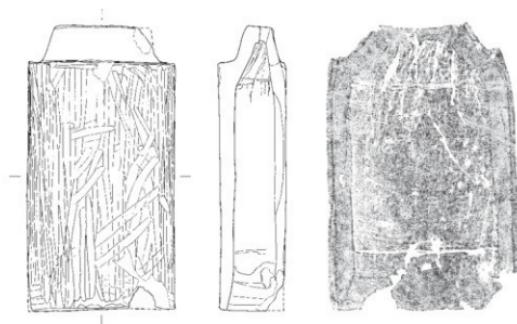
T84



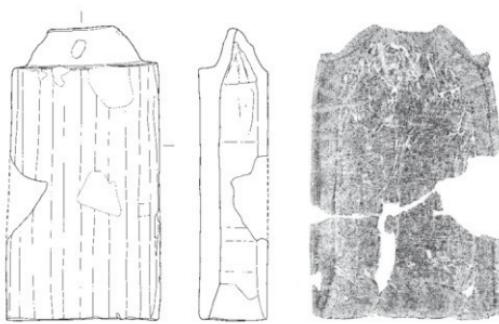
T85



丰地城路3区 出土瓦 (4)



T86



T87



丰地城路3区 出土瓦 (5)